R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

—第15号—

《講　演》
チカーノ・アート図像学序説
—視覚表象からチカーノ史を解読する試み—
..... 加　藤　　薫　(1)
スペイン政治経済最新情勢：新たなる地平
..... 戸　門　一　衛　(51)

《論　文》
La enseñanza de español a japoneses: puentes culturales en Argentina
..... María Isabel Pozzo (59)
15世紀カスティーリャにおける王子教育書に関する一考察
—モセン・ディエゴ・デ・バレラの手法—
..... 加　藤　さやか　(67)

《研究ノート》
スペイン語コーパスを利用した活動の一提案：語彙指導を中心に
..... 二　宗　美　紀　(93)

《翻訳》
ロドルフォ・カント・サエンス著
『エネケンからマキラドラへ　ユカタンの工業政策　1984−2001』より
..... 吉　野　達　也 (107)

《書評》
大垣貴志郎『物語メキシコの歴史ー太陽の国の英傑たち』
..... 立　岩　礼　子 (123)

2007年
京都イスパニア学研究会
Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto

チカーノ・アート図像学序説
—視覚表象からチカーノ史を解読する試み—

加藤　薫
神奈川大学教授

はじめに

本稿は2006年12月10日キャンパスプラザ京都にて京都外国語大学イスパニア学研究会主催の元に行われた筆者講演資料をベースに再構成したものである。同講演会ではパワーポイントによる大量の映像提示が主であったため、当該文書化の作業は必ずしも講演プログラムを再現したものにはなっていないことをまずご了解いただきたい。

日本におけるチカーノ史やチカーノ・アートの研究は、筆者が調査を始めた1990年代の状況と比べて飛躍的な拡がりと深化を見せている。京都イスパニア研究会会員である牛島万氏と大泉光一氏共編著による『アメリカのヒスパニック＝ラティーノ社会を知るための55章』（明石書店、2005年）などはその成果のひとつである。

とはいえチカーノ・アート研究が美学・美術史研究という専門領域としてはまだ萌芽状態にあるという点は否定できるものではないし、また地域研究というアプローチでは言語や地政の問題から研究の空白領域として残されてきた点もいなめない。

一方、アメリカ合州国におけるラティーノ系住民人口は増加を続け、アフロ・アメリカンを抜いて今や全米第一のマイノリティー・グループとなり、大統領選挙にも大きな影響を与えているという現実もある。そのラティーノ系住民の約半数を占めるメキシコ系アメリカ人あるいはチカーノというアイデンティティーを積極的に表明する人々の考えや主張、動向も自然と注目されるようになっている。

この流れからチカーノの言説の一つであるチカーノ・アートの様々な表象についての分析・評価や美術史的研究やそれらの成果を示す出版物も急増している[1]。背景には新たな美術マーケットの開拓を迫ら

[1] 拙著『21世紀のアメリカ美術　チカーノ・アート』（2002年、明石書店）巻末参考文献リストに2001年末までに出版されたチカーノ・アート関連文献を記

れている国際美術市場の要請という面もあるのだがこの点についての言及は割愛する。

美術研究にはまた様々なアプローチがあるが、本稿では技法、素材やメディア、様式といった問題には深入りせず、もっぱら作品コンテンツからチカーノ史を再確認してゆく作業に集中する。美術世界の言説では＜美術表現＞という言葉が頻繁に使われるが、本稿の場合、作家の採用した表現手法についてよりも、作品に表現された図像の意味、歴史的背景、メッセージ性についての試論を展開することになる。

1. 現在のメキシコーアメリカ合州国間の国境問題を考える

まず＜図 1＞を見てもらう。これは 2002 年にロサンジェルスでシルクスクリーン制作・販売されたTシャツのロゴデザインである。意訳すると「我々が国境を越えたんじゃない、国境が我々を分断しただけなのだ」という内容のメッセージだが、背景には一世紀半前の米墨戦争によって現在のアメリカ合州国サウスウエスト地域がわずかな賠償金と交換に＜不当＞に略奪されたとの歴史観を表明している。

TV などマスメディアで連呼される「不法移民」とか「非合法住民」という呼称に対する苛立ちが感じられる作品だが、このメッセージはアメリカ合州国内ですでに市民として居住するメキシコ系アメリカ人も短期の労働ビザや就学ビザで合法的に居住するメキシコ人とも区別することなくラテン系の風体をした人種グループに全て不法とか非合法というラベルを貼ってしまうマスメディアやアングロ系市民の風潮への反論であり、またビザなしで国境を越えてくるメキシコ人あるいはラティーノ一般の人々に対してはその行為に後ろめたさを感ずる必要がないことを示唆している[2]。

そもそも既存の国境線を理由にアングロ白人たちが越境者を不法

載している。

[2] やや古い統計だが 2001 年調査でチカーノ人口は 1400 万人、合法的メキシコ居住者人口 660 万人、不法滞在のメキシコ人 350 万人という推計がある。別の 20 世紀末に実施された社会意識調査では、合法滞在するメキシコ系住民の圧倒的多数がメヒカーノ/メヒカーナの呼称を望んでいる。呼称としてメキシコ市民との区別ができなくなるのだが興味深い結果である。

だとか非合法だという権利があるのかという点をラディカルに告発するのが＜図 2＞である。「誰が不法入国者だって、それは清教徒たちのことでは？」という言葉で、作者ヨランダ・ロペスは先住民の土地に勝手に入り込みながら土地占有の権利や領土拡張の野望を自己正当化してきたアングロ系白人の歴史的な欺瞞を明らかにしようとしている。世界史的な観点からみれば広くラテンアメリカ全体もコロンブス以来スペイン人やポルトガル人が先住民の土地に勝手に入り込み、征服し植民地化していったわけだから、メスティーソ化しているチカーノであっても自らの出自に対する自己言及性を伴っており、一方的に清教徒移民たちの行為を弾劾できるものではない。ロペスはしかし、主モチーフとなっている男性を先住民的意匠で表現することによってメスティサーへの中の先住民性を強調し、アメリカ合州国内のネイティヴ・アメリカンと同様の正当な権利を持つ住民の末裔からのメッセージであることを示している。

国境線が法律を盾にした人狩りゲームの場と化していることを象徴する写真が＜図 3＞である。1983 年 3 月 7 日に撮影されたもので、越境した当時 20 歳のミカエル・ルイスがアリゾナ州国境警備隊のパトロールカーに追われて逃げている。ルイスは結局この写真撮影時より数十分後に事故死するのだが、警備隊の報告書には何も記載されなかったという事実が判明した。国境が差別やいじめと抑圧の装置として機能していることを端的に示す事例である。この写真はドキュメンタリーものだから美術のコンテクストで扱うには若干抵抗があるかもしれない。そこでチカーノの創造力が国境問題をより大きな物語として表現している例を挙げよう。

＜図 4＞はサルバドール・カンポス・ロペスの「収容所はエル・サント・メヒカーノで一杯だ」という作品で、白い木綿の農民服を着たメキシコ人が鉄条網の後ろでまるで銃殺を待つように立っている。ちなみにこの農民の姿はメキシコ写真界の巨匠マヌエル・アルバレス・ブラボが 1934 年に発表し、メキシコ人の原風景だとかメヒカニダーの象徴として国際的にも絶賛された写真＜パパントラの男＞で、カンポス・ロペスはその写真をパスティーシュし、鉄条網を新たに加えた作品である。ここでカンポス・ロペスは犯罪者として収容所に入れられたメキシコ人こそ実は国境なるものを脱構築する 20 世紀の新しい

聖人という意味の転換を図っている。

＜図5＞はローサ・Mの作品で「アストランの聖家族」というタイトルがつけられている。暗闇に乗じ国境を越えて逃亡する三人の家族の姿をシルエットで描いている。「聖家族」とはヘロデ王の幼児虐殺の手から逃れるためエジプトに逃避する父ヨセフ、母マリア、幼子イエスの姿を描くキリスト教図像でもポピュラーなもののひとつだ。勿論近代の国境概念など存在しない時代の話しである。ローサ・Mは現代のメキシコ人家族を聖家族にしたてあげ、国境という制約の不条理さを浮かび上がらせている。そしてこの家族を追い回す権力者は聖書の中で権力に執着し非人道的な行為を繰り返すヘロデ王にたとえられている。ちなみにこのシルエット図像はたちまちのうちにチカーノ・アートのイコンとなり、後続美術作家たちの作品にも借用され、さらに記号化されて国境近辺の道路標識にも使われるようになった。

2．現在の国境制定以前のサウスウエスト地域

＜図6＞は19世紀前半の領土地図である。大雑把な見方をすれば、ミシシッピー川の東側がアングロ領土で、西はヌエバ・エスパーニャ副王領（メキシコ独立後はメキシコ領）であった。太平洋岸北部にある現在のオレゴン州・ワシントン州にまたがる地域は名目的にはイギリス領であったが、1804年から1806年に掛けて実施されたルイス＝クラーク探検隊が踏破するまでは未知の空間だった。また地図では割愛されているが、フロリダ半島地域は1565年以来統治していたスペインから1819年にアメリカ合州国に割譲されている。

さてヒスパニック＝チカーノ問題に密接なサウスウエスト地域、すなわち現在のテキサス州、ニューメキシコ州、オクラホマ州の西部、カリフォルニア州、ユタ州、ネバダ州、ワイオミング州南部に渡る領土は16世紀以来エル・ヌエボ・メヒコ総督領に属し、首府をサンタ・フェにおいていた。サウスウエスト地域は文化の原風景からして他の米国地域と違うのである[3]。

1513年に始まる現在のアメリカ合州国領土におけるスペイン人探検者の「エントラーダ」時代から1680年の「プエブロの反乱」を経

[3] 拙著『ニューメキシコ　第四世界の多元文化』（1998年、新評論）を参照。

て、1692年からエル・ヌエボ・メヒコ領土への本格的な植民地活動が始まったが、文化的にはそのエントラーダ時代初期からメキシコ市を中心に展開されたヌエバ・エスパーニャの植民地文化とは異なる要素を持っていた。

＜図7＞はサンタ・フェ市の中心にあるプラサである。都市の設計は基本的に他のラテンアメリカ諸都市と同じく、まず都市の中心に広場を置き、その広場を中心に格子状に道路を敷設してゆく規範を踏襲している。＜図8＞は、このプラサに面した旧総督の館の外観である。メキシコ市ソカロと取り巻く石造のモニュメンタルな建造物の持つ壮大な印象とはかなり異なる。平屋建てで建材は材木と土（アドベ）のみである。但し平面プランは敷地一杯に壁を築き、内部にパティオを設けるいわゆるアシエンダ様式になっている。ちなみにエル・ヌエボ・メヒコ領の公共建造物に石造りのものがでてくるのは18世紀末になってからのことであるがついに主流となることはなかった。＜図9＞はサンタ・フェ市内にある＜最古の家＞の名称で保存されているスペイン人の個人住宅である。「最古」といってもアドベの寿命はいかに精巧に築いても最長で80年程度といわれており、当然ながら現在までに何度も補修や改修を重ねており、建造当初のオリジナルな姿ではない。

丸太のビームを構造体とするアドベ工法の起源は先住民であったプエブロ・インディアンから学んだものであり、スペインの伝統ともヌエバ・エスパーニャ領の先住民文化伝統とも無縁なところから生まれた。そしてこのスタイルの建造物がエル・ヌエボ・メヒコにおける独自のヒスパニック文化の表象となっている。余談になるかもしれないが、アメリカ合州国の建築史をひもとくと20世紀にはいって二度ばかり「プエブロ・リバイバル」建築の名称で土（アドベ）と木材構造体を強調した建築様式が流行した。一度目は1930年代で背景には建築家フランク・ロイド・ライトの提唱したバノキュラーな場所の特性を活かした機能主義の発想があり、建築家ジョン・ガウ・ミームだけで三十点以上の公共建造物と十二軒の個人住宅を手がけた。二度目は1980年代でポスト・モダン建築の流れを踏襲した形でのブームであった。＜図10＞は1995年に完成したサンタ・フェ市郊外のラ・パス教会堂である。コンクリートや鉄骨など現代の建材も併用している

が外観は伝統のヒスパニック建築を踏襲したものになっており、エコロジカルな適性を持つ現代の公共建造物として注目された。ちなみに内装・備品なども全てヒスパニックの伝統様式と伝統技法に従って制作されている。

メキシコ市を中心としたヌエバ・エスパーニャ領と、その一部でありながらなかば独立した総督領として存在したエル・ヌエボ・メヒコの関係をもう少し探ってみよう。総督領の維持に必要な資金や物資の供給はヌエバ・エスパーニャ副王の義務だった。そのためにサンタ・フェとメキシコ市を繋ぐカミノ・レアルが整備され、数百台のワゴン車と食糧用の牛・豚・羊を連ねた物資輸送のキャラバン隊が往復した。但し物資の調達に一年、輸送往路に一年、復路に半年かかるため、三年に一回というものだった。資金不足や天候不順で四年に一回ということも度々あった。しかも物資の優先順位としては官僚組織、教会組織向けのものが高く、生産活動に従事する植民者の生活向けのものは最後でそれこそ鉄釘一本にもこと欠く環境が植民地時代を通じて大きく改善されることはなかった。

メキシコ市からの物理的距離、流通物資の不足はエル・ヌエボ・メヒコ住民に過酷な生活を強いた一方、独自の文化形成という果実をもたらした。背景には当然ながらほとんどの精神的、物質的生活を自助努力で維持しなければならなかったという現実があった。また身近に存在する生態系を知り尽くしたプエブロ・インディアンの知恵から多くを学んだからでもある。

エル・ヌエボ・メヒコ総督領が設定されるとほぼ同時にエンコミエンダ制も導入された。1680 年のプエブロの反乱によってそれ以前の文献資料記録はほぼ消滅し 16 世紀から 17 世紀の実態は不明だが、メキシコ市のアルチーボ・デ・ラ・ナシオンに残された記録から 43 から 47 のエンコミエンダ権利保有家族の名が特定されている。エンコメンデロたちはそれぞれの領地の特性を活かした産業育成に従事した。

牧牛を主とした畜産事業は 16 世紀末にエル・ヌエボ・メヒコに成牛が導入されて以来、徐々に発展し、19 世紀初頭には地域の一大産業になり、数十万エーカーの土地を使った放牧を行う事業者も出現した。アングロ・アメリカ人の原風景だといわれるカウボーイ文化のほ

とんどはエル・ヌエボ・メヒコのバケーロ風俗を起源とするものである。＜図 11＞は英語でハイド・ペインティングとよばれている、牛の獣皮をなめしてキャンバス代わりにし、図像を描いたものであり、ヌエバ・エスパーニャ副王領内ではほとんど事例のないものである。絵画用キャンバス地のような非日用品はカミノ・レアルから届けられることはなく、その代用品として発展し、流通した絵画の分野である。またアドベ建築では床材をどうするかは大きな問題だった。機械式製材機のない時代、平らにカットした均一のフローリング材を手作業で作るのは恐ろしく手間のかかるもので、このため床は土間が普通のことだったが、欠点は埃だらけになることである。しかし、牛の血を粘土にまぜることにより、表面が膠質でカチカチに固まり、強固な床材に変身した。

チーレ（赤唐辛子）の栽培も成功した事業のひとつである。現ニューメキシコ州南部にあるハッチ市は全米一のチーレ生産・集散地となっており、二位のカリフォルニア州全体のチーレ生産量を大きく上回っている。冷凍設備のない時代、食物の保存には欠かせない材料であった。ビーフジャーキーも元来はチーレをまぶしたものが元祖である。但し食材としてチーレが料理に大量に使用されることはなかった。＜図 12＞　チーレ栽培は先住民プエブロ・インディアンの間でもすでに使われていたが、彼らの持っていた在来種とヌエバ・エスパーニャからスペイン人たちが持ち込んだ種の交配により大量収穫が可能になったようだ。

織物産業も発展した。植民初期はまずプエブロ・インディアンも伝統的な素材として使っていた木綿を自家栽培した個人消費向けとしてスタートした。しかし羊の繁殖により主流は羊毛織りに変わり、商品としての価値も増した。＜図 13＞は現在リオ・グランデ様式とかヒスパニック様式と呼ばれる最も伝統的なスペイン系住民が制作し、使用してきた水平式機織機と毛織物の事例である。色や幅の組み合わせなどは無限にあるが、基本は実に単純な横ストライプ柄のみである。羊がチュロ種から毛足の長いメリノ種に変わってもデザインがかわることはなかった[1]。同時代のナバホやプエブロ・インディアンたち

[1] エル・ヌエボ・メヒコ地域へのチュロ種羊の導入は 1540 年のフランシスコ・

が羊毛技術を学び独自に開発していった毛織物と比較するとデザイン・モチーフや色彩の多様さにおいて全く地味といわざるをえないが、19 世紀初頭にメキシコのサルティーリョから招聘した織物職人の指導があるまでは横ストライプのデザインを変えることはなかった[5]。

織物産業発展の阻害要因は西洋式水平機織機の不足であった。スペイン政府の政策で産業用に転化できる機織機は全てスペインからの輸入品のみを使うことが求められた。しかしヌエバ・エスパーニャ経由でエル・ヌエボ・メヒコに納品される水平型機織機の数は些少で必要最低台数を満たすものではなかった。エル・ヌエボ・メヒコでの自作は技術的にも能力的にも可能だったが建前では禁止されていた。

生産能力に見合うだけの機織機をそろえるために着目したのはプエブロ・インディアンからヌエバ・エスパーニャの先住民の間で広く採用されていた垂直式機織の手法だった。大きなものは建物の垂直壁に沿って縦糸を張り、そこに横糸をとおしてゆくタイプの機織技法で、小さなものの場合は背中に縦糸の一端を縛り、坐って作業を行うことからいざり機とも呼ばれた。<図 14> 現在のニューメキシコ州、コロラド州、アリゾナ州北東部は乾燥した砂漠のイメージが強いが、冬季の積雪が五メートルを越える所も多い。雪のために外出できない期間が長くてもこの垂直式機織があれば一家の女性たちが各自の居室壁に一台は設置できるので作業効率はよく、収入源となった。

エンコメンデロの血統にあり、大規模の牧畜や農業を営む高収入の上流階級はイスパーノと呼ばれた。カリフォルニアでは特にカリフォルニオという名称もつけられた。イスパーノの住むアシエンダには常時数十人から数百人のスタッフとその家族が常駐し、教会堂や学校まであるそれ自体が一つの村のような生活共同体で自給自足が可能で

バスケス・コロナド探検から。メリノ種の導入は 1859 年になってのことで、以後チュロ種の羊は飼育されなくなった。ただ 1980 年代のリバイバル・ブームやマニアックな本物志向で市場から求められ、現在ではチュロ種の羊毛が復活している。

[5] 1807 年にスペイン国王の命令によりサルティーリョの毛織物職人イグナシオ・リカルド・バサンとフアン・バサン兄弟がサンタ・フェ市に派遣され、2 年間に渡って新デザインの導入指導など教育活動をおこなった。

あった。ヒスパニック文化の基層にはイスパーノの生活環境の中から形成されていったものが多い[6]。メキシコ市から派遣されてくるペニンスラールの官僚や聖職者などもこのイスパーノの権力や経済力の前には無力だった。イスパーノにはクリオーリョとかメスティーソといった人種概念を含む区分はほとんど意味がないようで、家系図をチェックしてもどこかで必ず混血した痕跡を見出せる[7]。自給自足が大前提となるエル・ヌエボ・メヒコ社会では、世継ぎには人種よりも良い意味での能力主義を徹底させる必要があったようだ。

また職業別による社会階級意識も緩やかなものだった。肉体労働者であっても技術を持つ職人の社会的地位は高かった。特に灌漑工事やそれに必要な機材を設計、制作、施工できるような土木技師や木工職人の地位は高かった。また機織機と同様に金属製の農工具—鋤や鍬、シャベルなど—もスペインからの輸入品をヌエバ・エスパーニャ経由で入手するしかなかったし、さらに釘とかねじ釘、接続金具、針金といった使い捨て消耗金属品まで支給されることはなかった。いきおい、古くなった金属製品を集めて溶かし、鍋や適切サイズの錠やハンマーなどに作り変える技術を持つ金工職人も貴重な存在で地位も高かった。職人たちはギルドを結成し、若者への技術伝播やエル・ヌエボ・メヒコ独自の規格など標準化を図った。結果としてヒスパニック独自の文化伝統が形成されていった。

1821年のメキシコ独立に連動してエル・ヌエボ・メヒコ総督領はメキシコ共和国の一部となったわけだが、国家独立後からその恩恵に浴したわけではなく、自給自足と自助努力が引き続き求められた。唯一メキシコ独立に期待できたのは東部から来るアングロ商人たちとのより自由な交易であった。また生活信条として「節約」や「欲望の抑制」が必須なヒスパニックの住民にとって、ジョルジュ・バタイユの言説を引用すれば「過剰」と「放蕩」という言葉で理解されるウル

---

[6] イスパーノの定義、名称、歴史については Perrigo, Lynn I., *Hispanos Historic Leaders in New Mexico*, Sunstone Press, Santa Fe, 1985.

[7] Chavez, Angelico, *Origins of New Mexico Families A Geneaology of the Spanish Colonial Perido*, revised ed., Museum of New Mexico Press, Santa Fe, 1992.

トラ・バロック的メキシコ文化よりも、プロテスタント的清貧の行動原理や固有の天命論を持つアングロ白人の方に親しいものを感じていたとも推察される。また人種問題と社会・経済格差問題が複雑な入れ子状態にあったメキシコの国内政治問題も旧エル・ヌエボ・メヒコの住民にはそれほど切実な問題ではなかった。逆にいかに古臭く見えようとも正統なスペイン文化の継承者というアイデンティティーを積極的に構築しようとする動きもあった。これは対アングロ関係で優越的な地位を維持するには有効だと考えられたせいでもあるが、1848 年締結のガダルーペ・イダルゴ条約以後にアメリカ合州国に併合された後はアングロと敵対する分子だとされ、政治的には真っ先に抹殺の対象となった。アングロの領土拡大の野望にはネイティヴ・アメリカンやヒスパニックなど他文化との共存共生という発想がなかったことを理解できなかった悲劇でもある[8]。

グアダルーペ・イダルゴ条約締結以降、最初にサウスウエスト地域のイスパーノ（カリフォルニオ）階級が消滅した。広大な土地権利が巧みに剥奪されていったのである。アングロとの政略結婚などで延命を図ったイスパーノ階級も、結局のところ同化の速度を減速させたに過ぎず、19 世紀末までに実質的にイスパーノは消滅した。次に崩壊したのは生態系システムをエヒードとして共有し、個々の家族は 200 坪程度の自宅敷地しか持たなかった農牧業村落共同体だった。アングロの法体系では共有地という概念がなく、個人登記されていない土地は全て早いもの勝ちで登記さえすればアングロの所有物となった。スペイン語による権利書などは全て無効とみなされ、結果として川や山林などが分断され、共同体は崩壊していった。ヒスパニック社会の構成員で唯一生き延びることが出来たのは人種を問わず生活の必需品を生み出す技術の蓄積があった職人階級と流通を担う商業従事者であった。21 世紀初頭の統計で全米で約 90 万人はいるヒスパニックであることをアイデンティティーとする住民の文化伝統なるものはこの職人階級と商人によって維持・発展されてきたものである。

アメリカ合州国への併合後もマイノリティー化するサウスウエスト地域ヒスパニック系住民の精神生活を支えたのは基本的にカトリ

---

[8] 拙著前掲書、『ニューメキシコ　第四世界の多元文化』、pp.196-198.

ック信仰であった。しかしアングロたちはカトリック信仰の存続にはほとんど無関心だった。教会組織も以前のようにメキシコ経由で教区や教区教会堂の維持管理のために司祭を派遣することは難しくなり、当然資金面での援助も途切れた。普通なら毎週実施されるミサも廃止され、場所によっては年に数日滞在する巡回司祭の日程に合わせて結婚式や洗礼や埋葬などを集中して実施した。あまりの不便さに信者たちは独自の信仰維持システムを考案した。これは「ペニテンテ」と呼ばれる組織の形成だが、共同体の中で特に信仰に篤く知識も深いとされる民間人が自主的に司祭の代役を果たすというものだ。当然ながらカトリック組織から公認されるものではなかった。ペニテンテの正式名称は「ナサレの子イエス・キリストを信奉する兄弟同志団」というもので、男性会員はその生涯を通じてイエスの体験した14の受難を順次身体的に追体験し、信仰の極致に到達することを目的とした。<図15>

ペニテンテ組織は共同体や都市の境界の制約を受けず、物理的に活動が可能な範囲で任意の組織体に入会することが出来る。入会にあたっての年齢制限はないが、入会審査は厳しく、また家族全員の同意も必要とされた。また伝統的には男性のみとされていた。しかし20世紀後半から女性会員も認めるペニテンテ組織も増えている。いずれにせよ、誰がどのペニテンテに属し、何を行っているかといった個人情報は徹底的に秘密にされた。

入会が認められると新人たちは定期的に聖書や組織の規律に関する研修を受け、上位の資格をえてゆく。資格の有無や位階に関係なく会員の発言権などは平等である。各ペニテンテ組織はある程度の資金が蓄積されると会合用の建造物<モラーダ><図16>を建てる。地味なアドベ造りのワンルーム形式でサイズは会員数によるが机や椅子の数から大きくても数十人規模以内のものが多い。機密維持のため、扉や窓などは最小限の数と大きさに制限されており、鍵の管理も厳しい。華美を避け、机、椅子など家具類も質素な機能一点張りのものだけである。しかし基本はカトリック系なので信仰対象となる図像は必要だった。モラーダ内に設置する図像についてはペニテンテの会員たちがお互いに議論しながら自作していった。やがてこの分野に秀でた人が半ば専門職のようになり、特にサンテロと呼ばれるようになった。

ペニテンテ相互の交流はほとんどなかったから、図像表現についてもサンテロの個性などとあいまってやがて各モラーダ、各ペニテンテ毎に独自のスタイルが生まれ、定番化し、次世代に継承されていった。

これがヒスパニック・アートの起源であり、その表現様式は一般の教会堂レレド（祭壇後方衝立）にも採用されるようになり、やがて世俗レベルにも流布し20世紀のヒスパニック・アート市場の形成へと繋がる。現代美術のコンテクストでいえば、20世紀ナイーヴ・アートの一類型と分類される。現代サンテロは必ずしもペニテンテ会員ではないが、図像の基本は信仰にあり、主題はもっぱら聖書や聖人物語をベースとしたものばかりである。＜図17＞は19世紀のペニテンテで使用されてきたブルト（聖像）で、受難で血を流す苦痛のイエスの表情を捉えている。聖母図像も多いがなかでは＜図18＞のように「孤独の聖母」や深い悲しみの表情をあらわす「嘆きの聖母」像が多くとりあげられた。

チカーノ・アート作品を表現スタイルで分類してゆくと、アルタル（祭壇）形式のインスタレーションものが多いのに気がつくが、その源流にはヒスパニック社会のペニテンテ美術の存在があり、反－アングロ文化の表象でもあるのだ。＜図19＞

3．ヒスパニック・アートとチカーノ・アートの分岐

「チカーノ」という名称の起源には諸説ある。詳しくは拙著『21世紀のアメリカ美術チカーノ・アート』（明石書店、2002年）を参照いただきたいが、時系列に沿って要約すると　(1) エル・ヌエボ・メヒコ領時代に形成されたヒスパニック社会の住民から見て、身分や血統の怪しいチワワからやってきた商人や労働者の呼称、(2) メキシコの国家独立後に何らかの理由で旧エル・ヌエボ・メヒコ領に移住してきた貧しいメヒカーノの呼称、(3) ガダルーペ・イダルゴ条約締結後に新しくサウスウエスト諸州に越境してきた貧しいメヒカーノの呼称、(4) 19世紀後半になってアングロ文化の影響で文化変容をおこしていたメキシコ系アメリカ人（ポチョ）から見て、非近代的な純メキシコ的文化伝統しかもたず、またアングロに比べて体格も貧相で足も小さい（パタ・チカ）メヒカーノ越境者の呼称、として登場した。

複雑なのはこういったヒスパニック側からチカーノの名称が登場

したと考える諸説の他に、メキシコ側からチカーノの呼称が生まれたとする説もあることである。これらを要約すると、(5) 19世紀後半のデイアス政権時代にクリオーリョの支配階級から見て近代化の波に取り残され貧困生活を送る国内メスティーソやインディヘナの呼称、(6) 1910年に始まるメキシコ革命時代から革命闘争から逃避して越境していった革命の裏切り者的メヒカーノの呼称、ということになる。どの起源説を採用するにせよ全てネガティブな蔑称として使われてきたことは確かだ。

この「チカーノ」言説の表象からチカーノ・アートの成立、すなわちヒスパニック・アートとの分岐ということを考えてみよう。<図20>は20世紀初頭の人口移動の動態を図示したものだが、新規のメキシコ人越境者が増大するのはメキシコ革命以後であり、その移動範囲もサウスウエスト領域を大きく超えていることがわかる。もはや地域限定的なヒスパニック社会への同化によるヒスパニック・アートの学習ということは望めなくなった状況が理解できる。従って1920年代がヒスパニック・アートとチカーノ・アートの分岐時代といえるだろう。

興味深いことに1920年代はまた東部にすむアングロ知識人たちによるヒスパニック文化の再興や建築における第一次プエブロ・リバイバルの動きがでてきた時期でもあることだ。一般にその出自から何かと西欧諸国に劣等感を持つアメリカ合州国知識人が国内に存在する古い西洋伝統の痕跡を探っている過程で再発見されたという次第だ。この時よりヒスパニック文化やヒスパニック・アートはそのスペイン的文化の痕跡を残すゆえに保護されるべきレトロな文化遺産という位置づけになった。新規に越境してくるメキシコ人たちの表象とは次元の異なるハイブローな文化の産物でありアートであるという自己アイデンティティーを形成することによって自らを神話化していった。当然ながらダイナミックな動態を示すチカーノたちとは一線を画し、別な道を歩むことになる。再び接点ができてくるのは1960年代以降のことで「アストランの子孫」というコンセプトが登場し、「ガダルパーノ(ガダルーペの聖母の恩恵に浴する同志)」としての連帯が提唱された時期からである。

ヒスパニックとチカーノの解離は別の面からも解説できる。ヒスパ

ニック社会の形成は農耕牧畜生活と密接だった。一方1920年代から30年代のアメリカ合州国は世界の最先端をゆく大量生産と大量消費のモダン社会に変貌を遂げ、大都市の消費生活を支える農業生産で労働力が必要とされた。肉体を使うこと以外に何の技術も持たない越境者たちの多くが農場に吸収されていったことは事実だが、何か新しいイコンを生んだとかアート世界に反映されたということもなかった。

一方、大都市に直接流入し、新しくバリオを形成していった越境者たちも多かった。増加するメキシコ系住民向けの店舗ができ、そういった店の看板スタイルや室内装飾には慣れ親しんだ<メキシコ的>な要素やスペイン語が当たり前のように使われた。やがてそれらの表象が記号として普及伝播していった。このようにチカーノ・アートの前史にはモダン都市の出現と発展が大きな要素としてあり、もはや閉鎖的なヒスパニック社会のあり方に納まるものではなかった。

<図21>は1920年代のメキシコ系住民の自己イメージを投影した表象と分析されるものである。アステカの戦士の意匠で飾られた屈強な男性はアメリカ合州国の象徴であり、眠り続ける美女はメキシコの象徴である。男性であるアメリカ合州国によって文明世界に連れてこられ、そこで眼をさました美女はその美しさに磨きをかけ、幸福な生活を送るというものである。文明—非文明の対立軸を設定して単純な勧善懲悪のストーリーをロマンティックなオブラートで包むハリウッド映画の影響も見てとれる。いずれにせよ目覚めた美女は現実に支配的な男性の存在を全面的に受け入れたわけではなく、自己主張まで始めたわけだ。エキゾティックでミステリアスなメキシコという観光的イメージを強調することで自らの出自を神話化するイコンの創生に向けた事例が<図22>である。ロサンジェルス市内のブロードウエィ大通りの南に建てられた映画館兼劇場であったこの<マヤ・シアター>外観は、チチェン・イッツアやウシュマルなどマヤ遺跡の装飾モチーフを適宜引用し再構成したもので、オリジナル同様漆喰を使っている点を除けば学術的には不正確なものだが、メキシコ先住民文化の大衆化された記号としてイメージを増幅させる効果はあり、長らくランドマークとしても機能してきた。

1930年代から40年代にかけてチカーノ・アートのベースとなるチカーノ文化の萌芽が見られる。その担い手はバリオの中で生まれ育っ

た第二世代とも呼ばれる集団で、両親世代のように故郷メキシコの思い出をもたず、また非アングロ的な生活風習、料理などの意味を十分理解できず、また学校では英語による教育を受けるため両親の使うスペイン語でのコミュニケーションにも問題が出てきた。意識としてはアングロ社会に適応できないこういった第一世代を蔑視し、自らを両親世代から自己疎外していった。しかしバリオの外に一歩出ると肌や髪の毛の色の違いやスペイン語なまりの英語を笑われ、アングロ系市民とは平等に扱われなかった。就職にあたっても門戸は狭く、多くが肉体労働で賃金も低く差別され、簡単に解雇された。また高等教育を受け資格や専門技術を身につける機会もほとんどなかった。バリオの外の一般社会からも疎外されたのである。要するにバリオの中でも外でも居所がなく、また未来に夢を抱くような状況にはなかった。

いきおい犯罪に手を染めることも多く、また自分の身を守るために集団を組んで行動した。それぞれのグループ独自の符牒やファッションが考案され、定期的な集会やパーティを開催した。こういった閉鎖的な環境の中からやがて独自の文化表象となるものが生まれ、サブカルチャー・レベルからよりパブリックな記号に変容していった。言語では「カロ語」と呼ばれるスペイン語と英語の混合言語を使いこなした。現代風にいえばスパングリッシュというものだが、英語しか理解できない、あるいはスペイン語しか理解できないという人には伝達不能な仲間内だけに通用する言語で、この言語を使いこなすことがアイデンティティーの一つとなった。やがてこの新世代メキシコ系アメリカ人は自らを「パチューコ/パチューカ」と呼ぶようになり、パチューコ/カ世代とかパチューコ/カ文化という言葉も派生した。

パチューコの存在を示す典型的な表象が＜ズート・スーツ＞である。＜図 23＞を参照すると、まず膝丈まである長いジャケットが特徴的である。襟の形は剣ピークで強さや男らしさを演出している。意匠の起源はスペイン植民地時代の軍服外套だとされているが何にせよ非ーアングロ的なファッションの表象である。ズボンは股上を長くし、腿部分は太くて膝下から絞り込み裾はダブル仕立てが多い。タックはダブル、あるいはトリプル仕様で、何にせよプリーツをきれいにつけておかないと笑われる。シャツは襟先が長く襟立も高い。ネクタイを締めることもあるが二つボタンまではずして胸元を大きく見せるの

が一般的だったようだ。胸元には金や銀の長いネックレスで飾る。片方の腰からはまた別の長いチェーンをつける。長い上着の裾下からこのチェーンが認識できる長さが必要とされている。頭にはダービーハットを目深に被り、靴はワークブーツ・タイプの厚底ものが多い。編み上げでくるぶしが隠れるくらいのブーツも好まれた。どこをとっても東部アイビーリーガーご用達のブルックス・ブラザース仕様とは異なるファッションだ。

パチューコたちは毎日このズート・スーツを着たわけではなく、週末のダンスパーティや結婚式や誕生日といった祝宴などに限られたが、移動の際にはどうしても一般市民の目に触れ、第二次世界大戦の戦場に出征する若いアングロ系兵士などには欲求不満をぶつける格好の攻撃対象となった。そしてこの種の反応がよけいパチューコの結束を強めるものになった。

自動車を持つことも憧れであった。しかし一般に収入の低いパチューコたちは犯罪にでも手を染めない限り、新車を現金で購入することなどはかなわないという現実があった。勢い安い中古車を手にいれ、自分で修理したり改造し、個性豊かな装飾や仕様を加えていった。ここから＜ローライダー＞というタイプの車が登場する。＜図 24＞まず車高を地面すれすれにまで下げる。これがローライダーの名称の所以なのだが、従って高速で乗り回すよりも地面をこすらないように低速で巡回し威嚇するものであった。ボンネットなど車体にはメタリックな装飾を施すが、ガダルーペの聖母やホセ・ガダルーペ・ポサダの版画を参考にした骸骨イメージ、アステカの戦士、土器の装飾文様などメキシコ的イコンをちりばめた。また予算がない中での一点豪華主義的発想で、ラジエターグリルや足回りのモール、マフラーなどだけ金やクロームのメッキをほどこし、そのセンスを競い合った。また後部トランクスペースにオーディオ機器を搭載し、大音量での野外パーティに供した。

パチューコ文化の表象として音楽にも独特の色づけが考案された。ダンスパーティなどに呼ばれるバンド構成にコンガやボンゴ、マラカスなど打楽器を追加し、複雑なリズムを刻むいわゆるラテン色を加味していった。パチューコたちはこのスタイルの音楽を「マリアッチ」とよんでいたが、勿論メキシコ起源のマリアッチとは似て非なるもの

である。

4．メキシコ壁画運動の影響に関する若干の考察

1922年に当時の公教育省大臣ホセ・バスコンセロスの口から初めて「メキシコ壁画運動」の誕生が述べられて以来、メキシコ革命以降のメキシコ現代美術ルネッサンス運動の最大の成果とされるのが壁画作品だが、リアルタイムで国境の北側に住むメキシコ系アメリカ人たちに向けて発信され、また彼らに受容されたかどうかについては議論のあるところである。確かに1930年代になってメキシコの壁画三巨匠と呼ばれるディエゴ・リベラ、ダビッド・アルファロ・シケイロス、ホセ・クレメンテ・オロスコはじめ、ルフィーノ・タマヨ、フリーダ・カーロなどがアメリカ合州国に滞在し、壁画やタブロー画を制作し、多くの水彩画や素描画、版画などを市場に流していたことは知られている。だがその事実がヒスパニックはじめメキシコ系アメリカ人の文化興隆の起爆剤となったかという話しになると、結論としては否定的にならざるをえない。

まず彼らメキシコ壁画作家を招聘したのは誰かという点から確認してゆくと、どの例もアングロの知識人や富裕者であり、ビザ取得や身元保証人、報酬支払いなどにメキシコ系メキシコ人が積極的に関与した痕跡は見つからない。次に壁画制作には当然相当数の助手やアシスタントの助けが必要なわけだが、メキシコ人壁画作家たちがアメリカ合州国内でメキシコ系アメリカ人との連帯を深め、教育啓蒙効果もねらって積極的に接触したり採用したという事実もない。一つには1929年の世界大恐慌以来、仕事もなくなり極貧生活を送る美術作家の自衛組織として各地でユニオンが結成され、メキシコ系アメリカ人だけを優先的に助手・アシスタントとして採用することは不可能だった点も挙げられる[9]。

---

[9] その余波としてデイエゴ・リベラがサンフランシスコ市旧カリフォルニア・スクール・オヴ・ファイン・アーツ（現サンフランシスコ市立芸術大学）講堂壁画制作期間にユニオンに登録していた日本人画家野田が制作助手に加わったことも言われている。しかしリベラ側の資料には今のところ野田の名前がでてくるものはない。おそらくユニオンを通じて派遣されてきたということで、何

ここで壁画三巨匠がアメリカ合州国内に残した各壁画作品制作に貢献した膨大な助手・アシスタントの個人名や契約期間を挙げてゆくことで立証することも可能だが紙幅の都合もあり割愛させていただき、結論だけ要約する。実際に助手として活動したのはメキシコですでに助手として働き壁画制作のプロセスに熟知したメキシコ人美術作家か、メキシコ壁画運動やその背景にある社会主義的発想に共鳴するアングロのすでに実績を持つ美術作家たち(カナダやイギリス出身者や女性も含む)であった。

メキシコ人壁画作家によるアメリカ合州国内に残された壁画作品が誰に向かって発信されたものか、即ちどんな観客を想定していたかという点も考察してみよう。壁画の残された場所を確認してゆくと、美術館(リベラ)<図 25>、大学(リベラ、オロスコ)<図 26>、テーマパークのような非日常空間(シケイロス)<図 27>、アングロ系有名人の広大な邸宅(シケイロス、リベラ)<図 28>、資本主義の成功者が集まるビジネスビル(リベラ)<図 29>、労働運動の拠点(オロスコ、リベラ)<図 30>といった場所で、要するにメキシコ系アメリカ人にとっては無縁な場所か、メキシコ系アメリカ人も含まれるがそういった人種的に特化した形で発信されていたものでないことがわかる。

最後にメッセージのコンテンツを確認してみよう。シケイロスにしてもリベラにしても 20 世紀前半の多くの知識人の例にもれず、科学技術の進歩や工業の発展を万人に平等に廉価に恩恵をもたらすものと肯定的に捉えていた。一方で西欧諸国による世界史的なアメリカ大陸征服の暴挙というものを告発しようともした。オロスコなどは深くキリスト教による精神的征服にも異議を唱えている。夢想していたのは西洋伝統とは無縁なアラスカからパタゴニアにまで普遍性を持つ豊かな先住民文化伝統と、西洋を完全に凌がするようになったアメリカ合州国の科学技術力や近代文明の融合によるラス・アメリカス文化圏の自立と世界からの認知であった。つまりアングロ社会の存在や発展を対西欧中心主義の戦略として提携相手と考えていた。この点はアメリカ合州国在住のメキシコ系アメリカ人たちが持つ反アングロ感

か個人的な繋がりからリベラが指名したということではないようだ。

情や脱アングロ文化志向と一線を画すものである。

以上の諸点からメキシコ壁画運動とのリアルタイムでの交流や影響関係はミニマムであったと考える。ちなみにメキシコ壁画運動との接点が生まれたのは1960年代末になってチカーノの抵抗運動が興隆した時期になってのことである。美術館やギャラリー、公共文化施設などがすべてメインストリーム美術しか認めず、チカーノ・アートは美術界から締め出されていた。表現の場を求めて模索していたチカーノ美術作家たちが見出した唯一の公共空間が建物の壁やストリートだった。このとき初めてメキシコ壁画運動というものが再認識されたのである。

終わりに

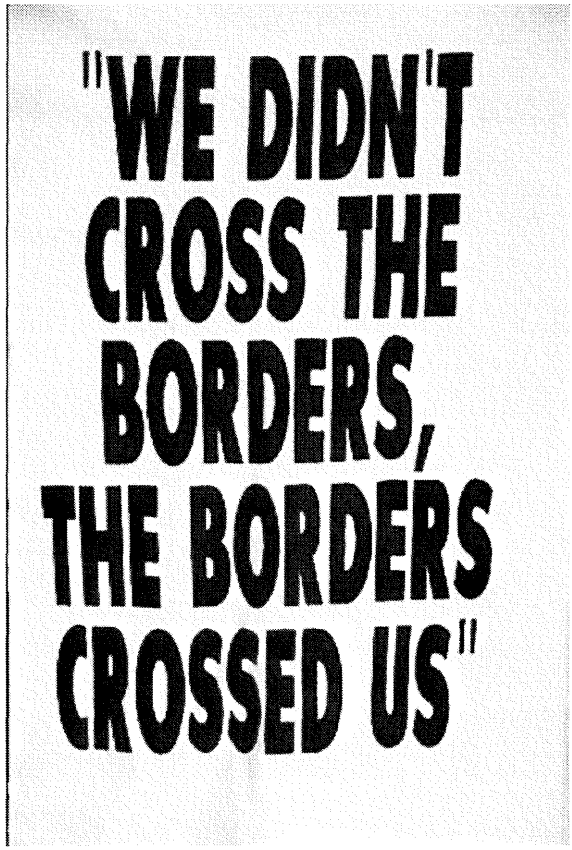
1960年代以降発表されてきたチカーノ・アートには公民権運動に象徴される抵抗の時代の状況をリアルタイムに表現する作品も多い一方、エル・ヌエボ・メヒコ時代以来のメキシコ系住民の歴史や文化伝統を反映した図像も多く使われてきた。チカーノたちのルーツ探しの一環と理解される。その過程で生まれてきたのが「アストランの子孫」という概念である。

メシーカ人たちがアステカの名称でも呼ばれるようになった理由は、アストランを故郷としそこから数世紀にわたる民族移動の旅にでたことに由来する。伝説をベースに度重なる考古学的調査が実施されたが、まだアストランがどこかは特定できていないが、範囲としては現在のアリゾナ州南部からメキシコ領のソノラ州北部のどこかという説が有力である。チカーノたちはより広義に、まだ近代のネイション＝ステート概念の元に国境線が引かれる以前に存在したアストランを、ネイティヴ・アメリカンとメキシコの先住民共通の文化の発祥地と定義した。スペイン人よりもアングロよりも古くから住んでいたインディヘナの子孫で真のネイティヴ、正統な住民という意識の拠り所になった。そしてチカーノの語源はメシーカであり、それがスペイン語化する過程でメシカーノからメチカーノになり、チカーノに短縮されたという新説をうちだした。

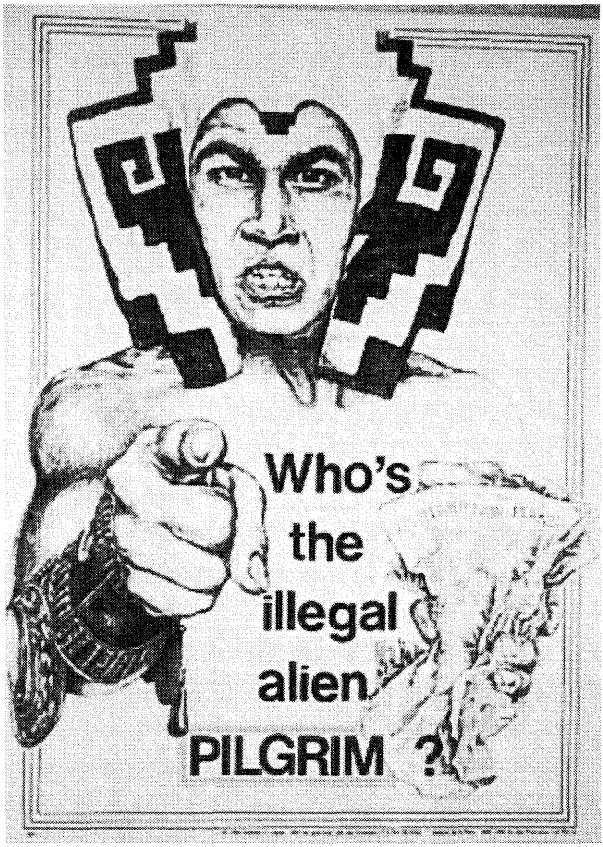
現在では＜図 31＞のような「アストラン」という名称のネイション・マップが作成されているように、19 世紀以来与件のように受け

入れられてきた米墨間の国境線をネイションというエスニックなコンセプトで脱構築しようとしている。この問題はヒスパニック住民やプエルト・リコやキューバ出自の他のラティーノ住民の美術作品とは異なる位相の図像を伴って表現されている。一方、メキシコ側にいる若い美術作家の中にはアートを通じてチカーノとの連帯や問題意識の共有を試みる動きも活発になってきている。国境を越えたコラボレーションが世界的な現代美術の現象なのだが、その意味では21世紀美術の最先端に位置するのがチカーノ・アートだという言い方もできる。

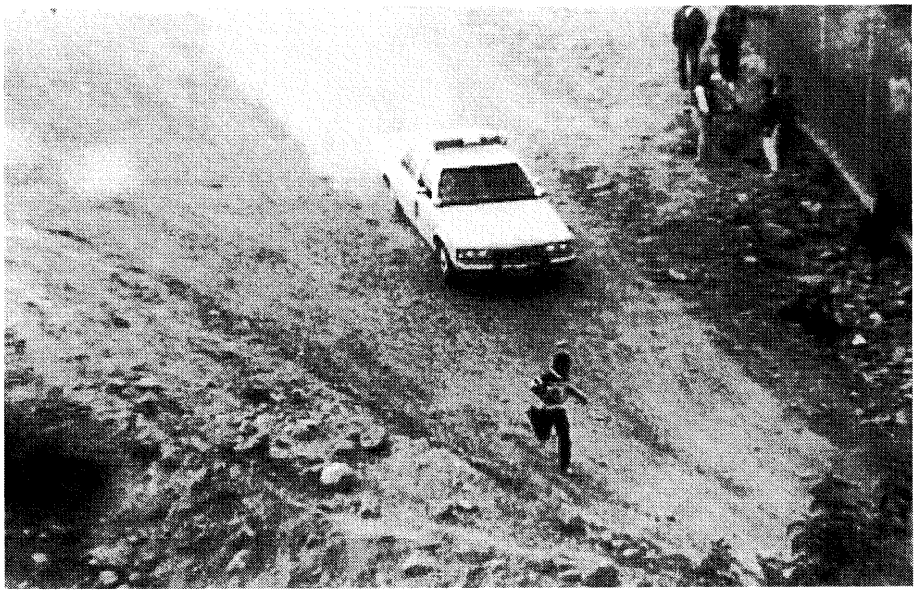
とはいえ、現在見られるチカーノ・アートの持つ最初の強烈な印象に導かれて知識を深めようとするととたんに理解不能な地平に放り出されるのも事実だ。本講演は、チカーノ前史（ヒスパニック・アート）を投影した図像の事例を中心に、少しでもチカーノ・アートへの理解を深めてもらおうという趣旨の元に図像事例とそれらの解釈について報告したものである。当然ながら近代の思考の枠組みである国別、時代別分類をベースに語る美術の言説ではとらえきれない美術現象を何とか語るという、筆者にとっても大きな挑戦であった。聴衆の方々の忌憚ないご批判やコメントを待つ次第である。



＜図 1＞
Tシャツのロゴデザイン
「我々が国境を越えたんじゃない、
国境が我々を分断しただけなのだ」
2002年。加藤蔵。



＜図 2＞
ヨランダ・M・ロペス作
『誰が不法入国者だった、清教徒たちのことでは？』
原画 1978 年、ポスター、オフセット印刷、1994 年。
加藤蔵。



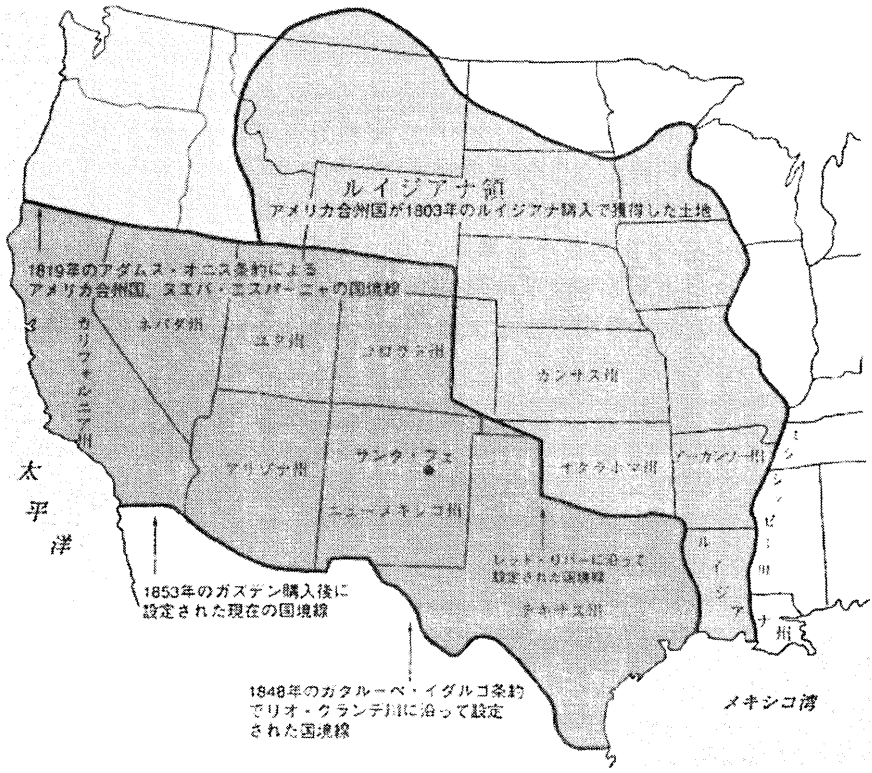
＜図 3＞
「アリゾナ州国境警備隊に追われる
ミカエル・ルイス（当時 20 歳）」
1983 年 3 月 7 日ウラジミール・テリェス撮影。
出典「チカーノ史の五百年」掲載資料より。



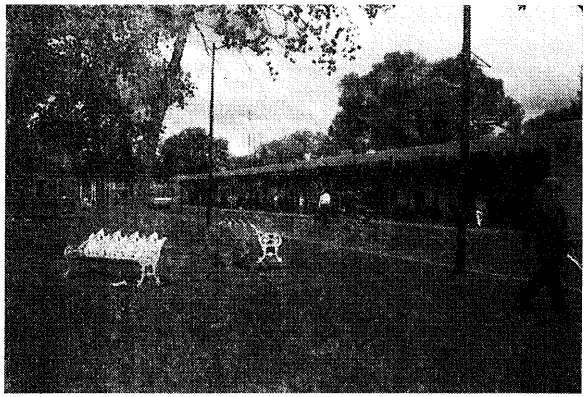
＜図 4＞
サルバドール・カンポス・ロペス作
『収容所はエル・サント・メヒカーノで満杯だ』
ポスター、オフセット印刷、1994 年。加藤蔵。



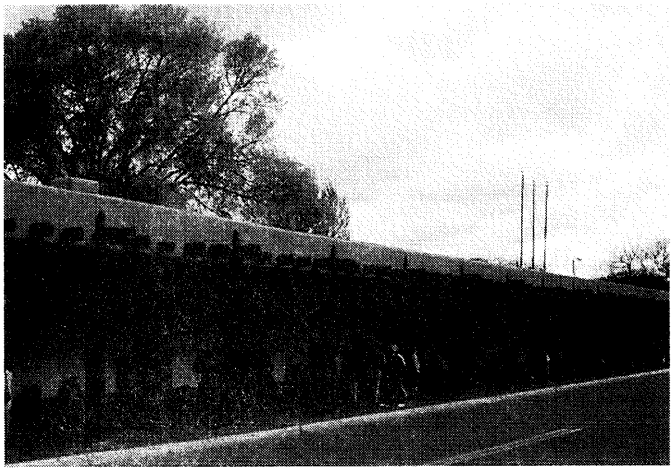
＜図 5＞
ローサ・M作『アストランの聖家族』
木と皮にアクリル画、1994年。作家蔵。



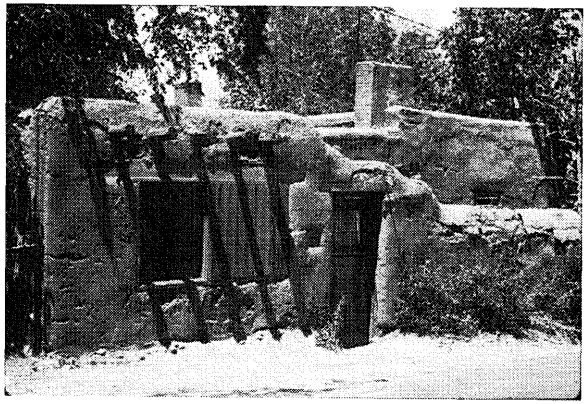
＜図 6＞
「19 世紀のルイジアナ領、アメリカ合州国、
スペイン領（ヌエバ・エスパーニャ）間の国境線」
出典：加藤薫著『ニューメキシコ 第四世界の多元文化』
より転載。



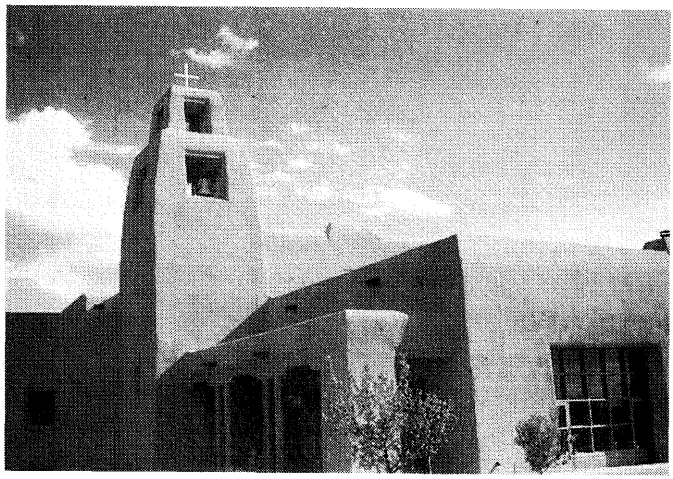
＜図 7＞
「サンタ・フェ市中央プラザ」
中央に四角広場を置き、格子状の街路を敷くスペイン植民地式の都市計画。広場に面して総督の館など公共建築を配置。



＜図 8＞
「サンタ・フェ市中央プラザに面した旧総督の館（現博物館）」



＜図 9＞
「サンタ・フェの民家」（再建）
アドベとビガ構造はプエブロ・インディアンより学んだ。



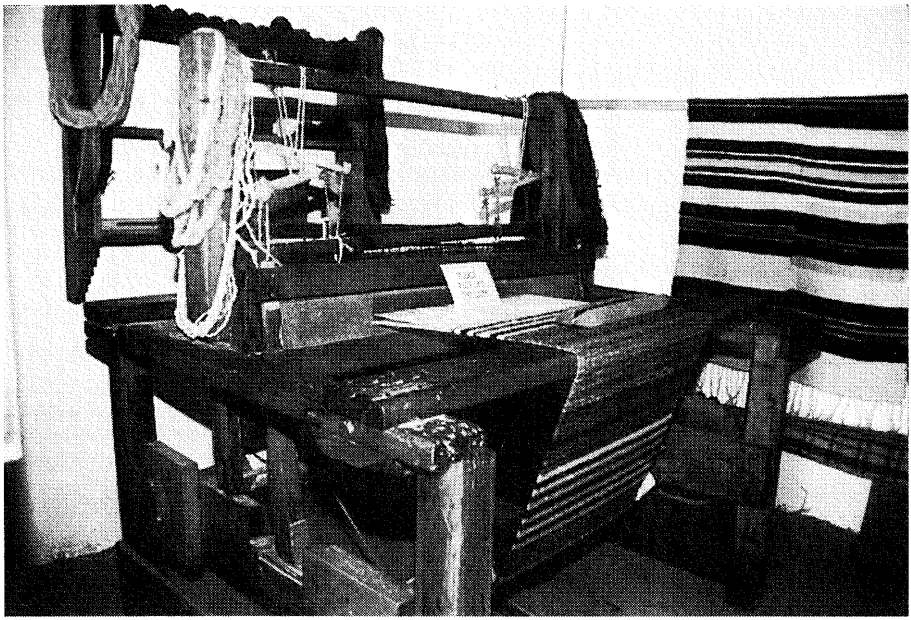
＜図 10＞
「サンタ・マリア・デ・ラ・パス教会堂外観」
1995 年。プエブロ・リバイバル様式。



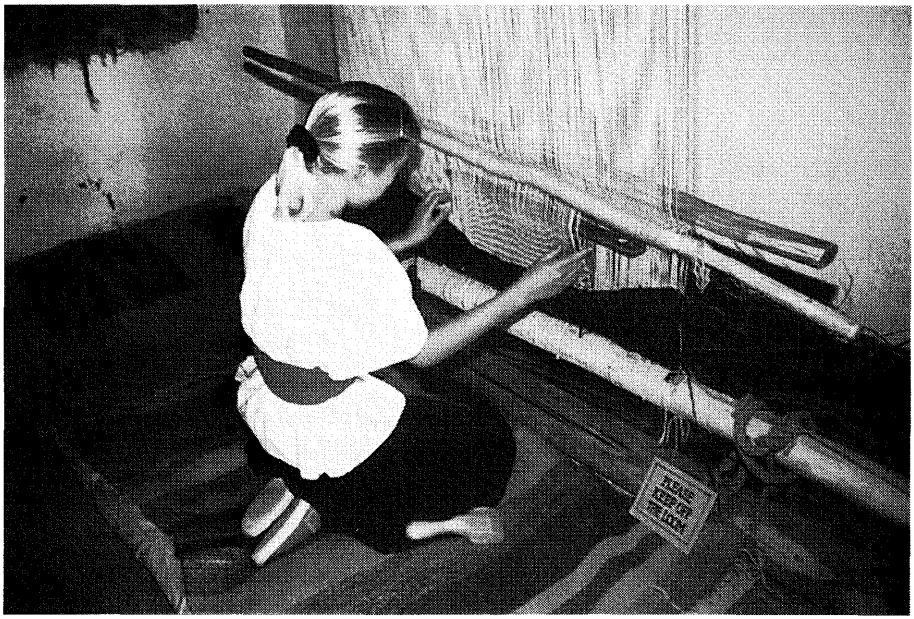
＜図 11＞
作者不明『アシジの聖フランシスコ』
獣皮（牛）に水性ペイント、18 世紀初頭。
国際フォークアート財団蔵。



＜図 12＞
全米一のチーレ生産・集荷地ハッチ市。



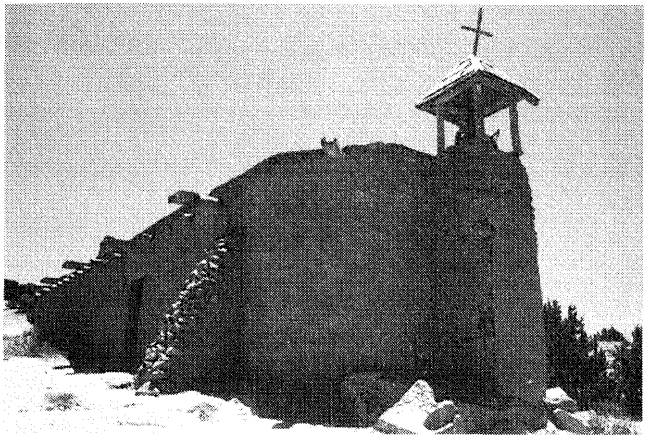
＜図 13＞
水平式機織機とリオ・グランデ様式の横ストタイプ毛織物。
ゴロンディナス資料館。



＜図 14＞垂直式機織機の実演。
ゴロンディナス資料館。



＜図 15＞
作者不詳
ニューメキシコ州ペタカ村野外彫像。



＜図 16＞
モラーダの事例：ゴロンディナス資料館復元施設。



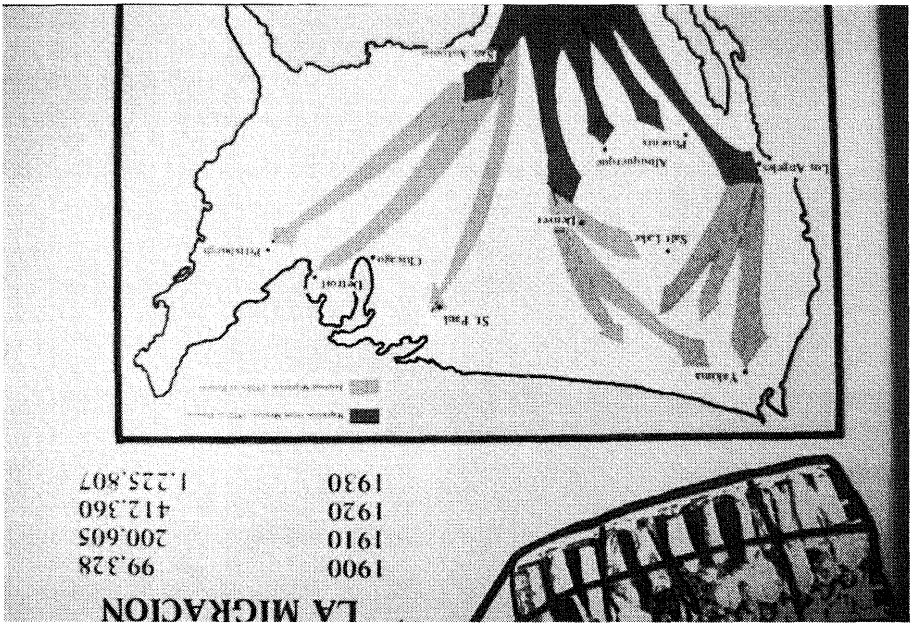
＜図 17＞
ミゲル・エレラ作『ナサレのイエス像』
1880~90 年頃、木に彩色。
タオス市アシエンダ・マルティネス蔵。



＜図 18＞
作者不詳『孤独の聖母』
19 世紀後半、木に彩色、衣装。
タオス市アシエンダ・マルティネス蔵。



＜図 19＞
アメリア・メサーバインズ作
『ドローレス・デル・リオのためのオフレンダ』
インスタレーション。オリジナルは 1984 年、再制作 1990 年。
テキサス州オースティン市リオ美術館 1996 年展示より。



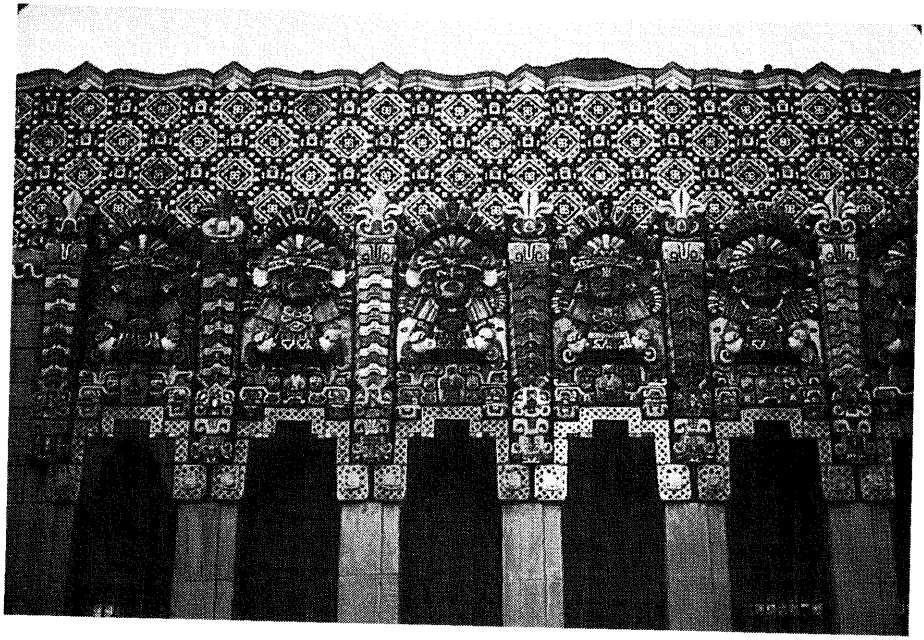
＜図 20＞

「1900 年から 1930 年のメキシコからの移民の動態」

出典：「チカーノの五百年史」、p.73　図版より。



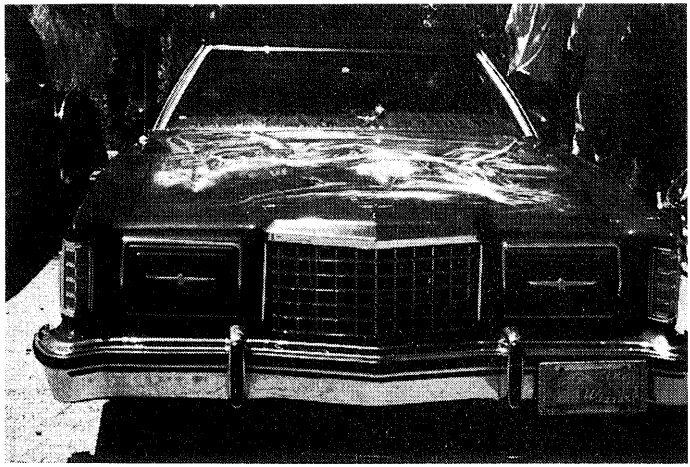
＜図 21＞
作者不詳
サンフランシスコ市ミッション区
『ベルマル・ベーカリー店舗壁画』（修復後、部分）
木の彩色ペイント。オリジナルは 1920 年代。



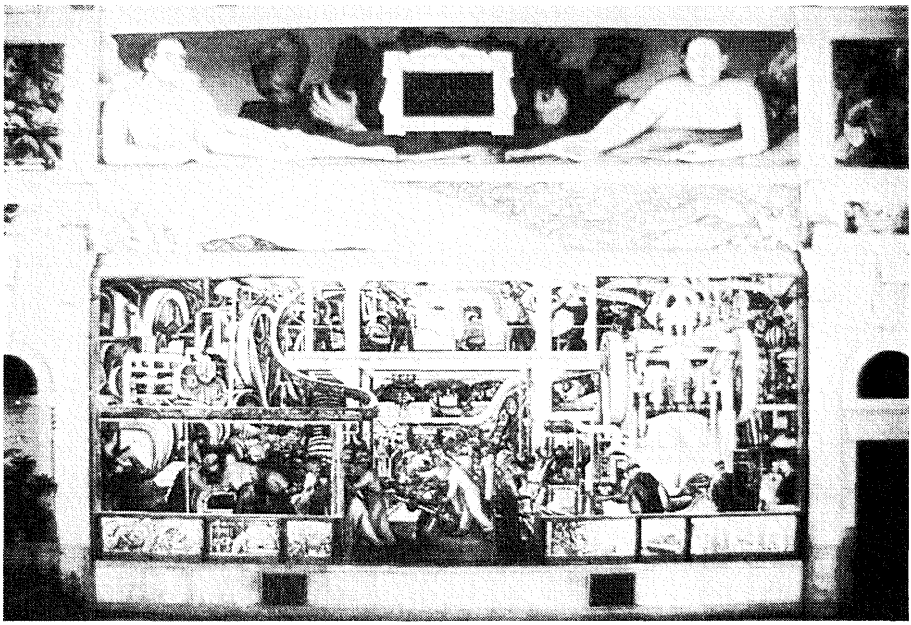
＜図 22＞
フランシスコ・コルネホ設計・施工
「マヤ・シアター外観」
コンクリートに漆喰、彩色。
ロサンジェルス市サウス・ヒル通り 1038 番地。
1927 年完成。



＜図 23＞
ウエイン・アラニス・ヒーリー作『ズートスーター』
制作年不明、キャンバスにアクリル画。作家蔵。



＜図 24＞
ローライダー・カーの事例：
ニューメキシコ州エスパニョーラ市郊外。



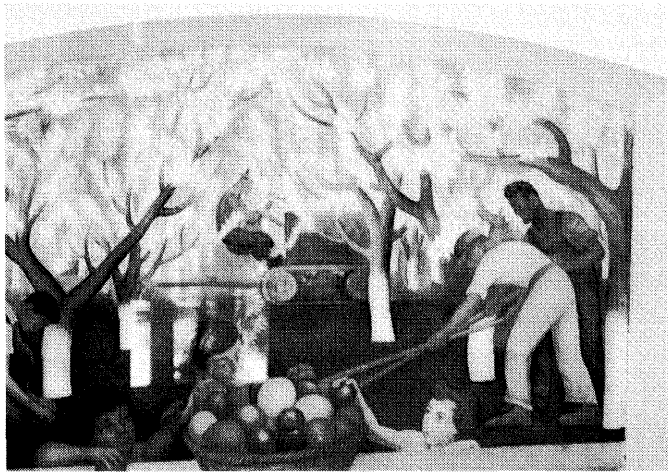
＜図 25＞
ディエゴ・リベラ作
『工業化時代の幕開け』（部分）
フレスコ画、1932 年。
デトロイト市美術館リベラの広間。



＜図 26＞
ディエゴ・リベラ作『壁画制作の壁画』
フレスコ画、1931 年。
現サンフランシスコ市立芸術大学講堂。



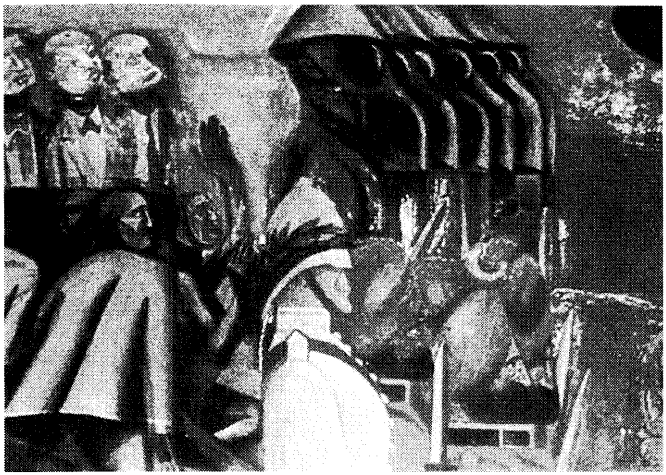
＜図 27＞
シケイロス作『アメリカの神話』下絵部分
1932年頃、ロサンジェルス市オルベラ通りに面した
プラザ・アート・センター（作品自体は破壊）。



＜図 28＞
ディエゴ・リベラ作『カリフォルニアの農場と果実』
旧スターン邸壁画、フレスコ画、1931 年。
現在はカリフォルニア州立大学バークレー校スターン学生寮蔵。



＜図 29＞
ディエゴ・リベラ作『カリフォルニアの歴史寓意画』
サンフランシスコ市パシフィック株・証券取引所会員用
レストラン入り口階段部、フレスコ画（部分）、1931年。



＜図 30＞
ホセ・クレメンテ・オロスコ作『アジアの戦い』
ニューヨーク市ニュー・スクール・フォア・
ソシャル・リサーチ壁画、フレスコ画（部分）、1930-31 年。



＜図 31＞
トッド・スミス総合デザイン
「アストラン・ネイションのマップ」
ラップグループ「アストラン・ネイション」
（シティ・ホール・レコーズ社）の CD 宣伝ポスターより転載。
加藤蔵。

＊特に明記してない限り、写真は筆者撮影。

スペイン政治経済最新情勢：新たなる地平

戸門　一衛
神田外語大学教授

はじめに

スペインの現代政治経済を、「鳥の目（大局と潮流）」と「虫の目（具体的な問題群の詳細分析）の複眼視座から分析する。具体的には（講演を行った 2007 年 12 月時点で）スペインが直面する喫緊の政治的・社会的課題ならびにユーロ導入後のスペイン経済の構造変化と景気動向について分析を行い、今後スペインが向かう地平を展望したい。

本稿は研究論文ではなく講演内容のまとめなので、骨子を箇条書きで紹介する。

I. 政治

＜鳥の目＞

2007 年は 1977 年に民主化第 1 回総選挙が実施されてから 30 周年にあたる。この間に形成されたスペイン政治の特徴は次のとおりである。

1）社会労働党（PSOE）と国民党（PP）による二大政党制が確立した。バスク地方やカタルーニャ地方では、地方民族主義政党の力が強いものの、スペイン全国では、この二大政治勢力が支配的である。ただし、大選挙区比例代表制を採用していることもあって特定の政党が議会で絶対過半数を制して単独政権を司るのは難しい（1982～86 年の社会労働党政権の時代は例外）。安定した議会運営を可能にすべく、中央政党（主に社会労働党と国民党）は地方民族主義政党に連立政権あるいは閣外協力を持ちかける工作を行ってきた。この結果、地方民族主義政党は、国政の場でも一定の影響力を行使できた（できる）。

2）二大政党による政権交代が混乱なく行われており、これが常に政治に緊張感・新風をもたらし、民主主義を風化させない。

3) その結果、高い投票率（70%台後半）が続いている。国民の政治的関心は薄れておらず、投票所に足を運ぶ人々が多い。

4) 二大政党ともに包括政党 Catch all party であり、基本的政策に大きな違いはない。欧州社会経済モデルを堅持する中での、具体的施策、社会政策においてアクセントのつけ方が異なる。

5) 欧州では一般的に保守回帰の傾向が強まるなかで、スペインでは左翼勢力が強い。

＜虫の目＞

6) 代表的な世論調査（CIS 社会学調査研究センターの Barómetro）のデータ（2007 年後半）によれば、08 年 3 月総選挙では PSOE がかなり有利であるとの予測が出ていた（実際に 2008 年 3 月 9 日の総選挙結果は、事前の CIS 世論調査結果に近いものであった）。その主たる理由は、好調な経済状況、政権与党の実績、積極的な社会政策、党首の人気の差である。

II. 経済

＜鳥の目＞

7) スペイン経済は、1992 年の「通貨の嵐」（欧州通貨システム EMS の為替相場メカニズム ERM― Exchange Rate Mechanism, Mecanismo de Cambios ―に対してヘッジファンド等から巨額の投機資金が流入し、英ポンド、仏フラン、西ペセタなどの通貨が売り浴びせられた。最終的に、欧州諸国の協調介入を前提にした為替安定システムは崩壊した）、93 年のマイナス成長などの困難に直面した後、欧州経済通貨統合 EMU（European Monetary Union, Unión Económica y Monetaria つまりユーロの導入）に向けた経済収斂努力を本格的に実施することになる。

8) 具体的には、マーストリヒト収斂基準（インフレ率の低下、金利の引き下げ、財政赤字の削減、政府長期債務の削減、為替の安定）をクリアすることがユーロ導入を望む国々の課題となった。スペインは1994年から数回にわたり経済収斂計画 Programa de Convergencia を策定し、経済収斂目標の達成に向けて多大な努力を行った。その成果は、単にスペインがユーロ導入国となった実績だけではなく、スペインのマクロ経済安定性拡大・競争力向上という形になって顕在化した。この点は極めて重要である。

9) マクロ経済の安定性拡大とは、経済不均衡の是正・解消を意味する。①インフレ（消費者物価指数）は 4.6%（1993 年）から 1.8%（1998 年）まで沈静化した（しかし、90 年代末後半から約 10 年間にわたる長期景気拡大があったためにインフレは 3%台を推移している）。②長期金利（10 年物中央政府国債金利）の水準は、1994 年には 11.381%と二ケタ台にあったが（それだけスペイン国債にはリスク・プレミアムがついていたということを意味する）、5.644%（1997 年末）まで低下した（その後はユーロ長期金利に連動して、2000 年 5.203%、2006 年 3.817%と推移している）。③財政赤字は 1993 年の GDP 比 6.8%から 2000～02 年には 0.5%に低下し、赤字状態は実質的に解消した。その後 2003 年からは 5 年間連続で財政黒字が発生している。④政府長期債務（中央政府と地方政府の借金）はピークの 68.2%（1996 年、GDP 比）から 34.0%（2006 年）に低下した。長期金利は 13.4%（1985 年）から 3.8%（2006 年）にまで低下した。

10) ⑤為替の安定という条件は、上記 ERM の実質的な崩壊によって、実質的に収斂条件としての要件ではなくなった。（ただし、1992 年の大幅切り下げ後、ペセタ相場は安定的に推移した。）最終的にはペセタを捨て、ユーロを導入することによって、スペインは「通貨不安の亡霊」と完全に決別することができた。すなわち、「ユーロという大きな船の乗員」になることによって通貨不安定要因を解消し、国際金融不安や外国で発生した経済危機の「荒波」から身を守ることが可能になった。これこそ EMU 経済通貨統合がもたらす最大メリットの

ひとつである（ただし、これは「ペセタという小さな船」であれば操作可能であった、自国にとって都合のよい金利を自由に設定という手段を放棄した「デメリット」でもある。この点については 16 で後述する）。

11）スペインは、1993 年にマイナス成長（－1.1%）を記録した後、1998～2000 年は 4.5%～5.0%、2001 年からは（2002 年を除いて）2006 年まで 3%台後半の順調な経済成長率を達成した。景気拡大がこれほど長期に及ぶのは EU 域内でもめずらしいケースである。スペイン経済自身にとっても 1960 年代の高度経済成長以来のことである。

12）この結果、マーストリヒト収斂条件では課せられていない、実質的な収斂条件（convergencia real）でも顕著な好転を見た（先に言及した①～⑤までの条件は名目収斂条件　convergencia nominal と呼ばれる）。⑥失業率は 1997 年の 20.8%から 2007 年には 8.0%に大幅に低下した。⑦アイルランドとともに、スペインの所得向上は目覚しい。一人当たり所得（購買力平価表示、EU 平均 100）では、EU15 カ国平均で 1995 年の 78.9 から 2005 年には 90.1 に向上した。EU25 カ国平均では、99.0 の水準に達した（ちなみに参考例を挙げると、ルクセンブルグ　248、アイルランド　137、デンマーク 124、イギリス　115、ドイツ　110、フランス　109、イタリア 103、　ギリシア　82、ポルトガル　71、ハンガリー　61 である）—2007 年のデータでは、一人当たり所得でスペインがついにイタリアを抜いた。これは 2008 年春に大ニュースとして報じられた—。

13）スペインの潜在成長力は、（旺盛な設備投資や技術革新の成果でもあるが、とりわけ）人口増大によって上昇した。スペインの人口は 2002 年の 4096 万人から 2007 年には 4487 万人へと 5 年の間に 390 万人も増えた。少子化が進むスペインであるにもかかわらず、このように人口急増がみられたのは、移民合法化政策などによる移民増である。移民の増加は労働力人口の増大をもたらすだけでなく（供給サイド）、住宅や生活物資などへの新たな需要増をとなり（需要サ

イド）、スペイン経済の重要な景気刺激誘因となっている。また、移民労働者は新たな社会保険の拠出者になっており、社会保険財政・政府財政の黒字化にも貢献している。

＜虫の目＞

14）経済成長率見通しは、2007 年　3.8%（確定）、2008 年　3.3%であり、個人消費と建設投資の鈍化が不可避であろう。特に、これまでの経済成長の牽引車が、高い住宅需要に感応した建設部門への投資にあったことを考えると、当然のなりゆきである。―しかも、2007 年末から 2008 年春にかけて、米国のサブプライムローンの焦げ付き問題、金融機関の経営難、金融システムの不安定化、世界経済の先行き不透明感・不確実性の増大などが露呈した結果、2008 年以降のスペインの経済見通しも悲観的なものにならざるを得ない―。

15）特にスペイン経済の場合は、内需の伸びに対して、恒常的にマイナスの外需が足を引っ張るという構造が常態化している（例えば 2006 年の場合、内需 5.1%ポイント増に対して、外需は－1.2%ポイントであり、その差が経済成長率 3.9%になっている）。米国発の世界の不況が EU でも深刻になれば、スペインにとって外需は大きな成長抑制要因として働くだろう。しかも、2005 年以降、建設投資の鈍化を補う形で順調に伸びてきた設備投資も 2007 年後半からは減少傾向に転じた（実際に、この傾向は 2008 年に入って非常に強くなっている）。

16）スペインの場合、ユーロ導入以来、独自の金融政策を喪失した結果、不動産バブル発生のリスクが高まったといえる。長期的な好景気に加え、住宅ローン金利が 90 年代初の 13.7%から 2005 年ごろには 3.4%にまで低下し、住宅ローンの貸付残高は 2003～04 年には年率 40%も増加した。この結果、住宅価格は 1997 年～2005 年で約 145%上昇した。本来ならば、この頃には金利を引き上げて、住宅バブル発生の危険を早目に摘んでしまうべきであった（と筆者は考える）が、欧州中央銀行の政策金利は 2003～2005 年の期間は 2.0%に据え置かれたままであった。EU は、域内の大国であるドイツとフラ

ンスが不況傾向にあることから、2000 年から段階的な政策金利の引下げを実施しており、低金利政策が基調であった。やっと 2005 年後半からは金利引き上げが段階的に実施され、2007 年には 4.0%の水準に設定された。これと並行して、スペインにおける不動産バブル発生のリスクも遠のいて行ったのである。2002 年には 3.5%に達した消費者物価指数インフレも、その後の 2003～06 年の期間は 3.0～3.5%に抑えられ、インフレ再燃を防ぐことができた。

＜今後の課題＞

17) スペイン経済は、この 10 年間に大きな構造改革、自由化・規制緩和政策を大胆に進めることによって大きく伸びた。しかし、この間の経済発展を支えたのは、建設部門、不動産部門、多岐にわたるサービス産業である。成長は、これらの産業の量的拡大に依拠するところ大である。今後は産業構造全体にわたって、I+D+I（Investigación, Desarrollo e Innovación 研究・開発・技術革新）を進めて、量よりも質の拡大を図っていかなければならない。最適通貨圏（Optimum Currency Area, Area Monetaria Optima—労働力・資本などの生産要素が自由に域内を移動できる空間、経済の好況・不況に対応できる生産要素・資源の再配分がうまくできる経済圏—）への対応は急務であるからだ。

18) スペイン産業構造の競争力強化は、16 でも述べたような非対称的なショック（asymmetric shocks, choques asimétricos）—すなわち、同一の経済統合圏内で好景気と不況の国々が混在し、これらの間で景気波動が一致しない（例えば、ドイツが不況で、スペインは好景気であるといった）事態に対して—、ユーロ圏で一本化した金融政策、加盟国の主権下にあるものの厳しい財政規律で自立性が大幅に制限される財政政策、この二つのマクロ経済政策のみでグローバリゼーションの大波に対応することは難しいからである。

19) ただし、スペイン経済・産業をめぐる新しい兆しが顕在化しつつあるといっても過言ではあるまい。2 点指摘しよう。第 1 は外国直接

投資の動向である。1997 年（すなわちユーロ導入が決まった年）から、スペインの対外外国直接投資は大幅に増えた（97 年 94 億ユーロ、2000 年 495 億ユーロ、2006 年 559 億ユーロ）。90 年代は対ラテンアメリカ投資が多かったたが、近年では EU 向け投資が急増している（EU の比重は 2005 年 70.1%、2006 年 83.0%）。世界のビジネス主要紙に、スペイン企業による M&A（吸収・合併）のニュースが載るのは決してめずらしいことではなくなった。スペインに向かう対内外国直接投資も盛んであるが、明らかに 2000 年代に入ってからはスペイン主要企業の対外投資が大幅に伸びており、スペインは資本の純輸出国に変貌している。

20）第 2 は、スペインの ODA（AOD　政府開発援助）である。DAC（開発援助委員会）のデータによれば、スペインは 2005 年に ODA 供与額で、世界第 8 位の位置を占めている（ちなみに、第 1 位から第 10 位までをあげると、アメリカ 227 億ドル、イギリス 126 億ドル、日本 116 億ドル、フランス 105 億ドル、ドイツ 104 億ドル、オランダ 55 億ドル、スウェーデン 40 億ドル、スペイン 38 億ドル、カナダ 37 億ドル、イタリア 36 億ドル）。GDP 比では、DAC 平均の 0.30%を上回る 0.32%の経済援助を行っている（ちなみに、アメリカ 0.17%、日本 0.25%である）。スペインは経済規模からみれば、EU先進国並みの経済援助努力を傾注している。ODA の約 2 分の 1 がラテンアメリカ、約 4 分の 1 がアフリカに向けられている。

21）EU 加盟国そしてシェンゲン（ルクセンブルグの町名）協定締約国であるスペインは、人の出入りに対して極めて自由な国になった。2008 年からはシェンゲン圏 24 カ国をパスポートなしで訪れることができるようになった。また、EU の大学生交換留学制度であるエラスムス計画を通じて多くの欧州の若者がスペインで学び、多くのスペイン人が EU の他国で学んでいる。スペイン人のパスポートには、EU そしてスペインの国名が EU 公用語 20 ヶ国語で記載されている。このような「人の交流」からもスペインの国際化は着実に進んでいるのである。

22）翻って日本、東アジアの現状と将来を見つめると、この地域では経済活動の相互依存関係は深まりつつあるものの、地域の一体化・統合化にはほど遠い状況である。民主化後の 1970 年代に、スペインがそれまでの国際的孤立を打破して国際化を進め、1980 年代の EU 統合、1990 年代の統合の深化を経て、2000 年代の「積極的外国人移民の受け入れ策」に見られるような「内なる国際化」に突き進んだスペインの道程は、当然ながら地政学的文脈・文化的背景は異なるものの、東アジアに生きる我々にとって極めて重要な示唆に富む。

あとがき

本稿は、2007 年 12 月に講演を行った時点で入手しえた情報に基づき、講演者の考えを事後的にまとめた原稿である。当然であるが、2008 年 3 月の総選挙の結果が出る前に行われた分析が説明されている。この内容が（本原稿をまとめた）2008 年 4 月の現状と適合しない点があれば、その原因は、①講演を行ってから半年以上の歳月が経過していること、②講演者の分析能力量不足、の 2 点にある。講演においては多彩な資料やデータを駆使したが、本稿においては省略した。

La enseñanza de español a japoneses: puentes culturales en Argentina

María Isabel Pozzo
Universidad Nacional de Rosario (Argentina)

1. INTRODUCCIÓN

La presencia japonesa en Argentina tiene una doble fisonomía: por una parte, los inmigrantes que llegaron a este país entre fines del siglo XIX y mediados del XX aproximadamente, cuyos descendientes ya van en su mayoría por la tercera generación.

La otra faceta, menos conocida pero de interés para el profesor de español lengua extranjera (de ahora en más, E/LE), es la de los japoneses nativos que se instalan temporariamente para desempeñar tareas específicas. Este grupo está constituido fundamentalmente por los voluntarios de la Agencia Cooperación Internacional del Japón (Japan International Cooperation Agency - JICA), organismo dependiente del Gobierno del Japón a cargo de los programas de cooperación técnica en base a solicitudes de los países en vías de desarrollo. En la Argentina, dicho programa se ejecuta a partir del Convenio de Cooperación Técnica firmado entre ambos gobiernos en el año 1979 y ratificado por ley en 1981, con el objeto de contribuir al desarrollo nacional mediante la interacción y el apoyo activo a las entidades y comunidades que los reciben.

2. QUIÉNES SON LOS ESTUDIANTES

Categorizados en *junior* (menor de 40 años) y *senior* (o *experto*, entre 40 y 69 años), los voluntarios están motivados para realizar tareas de transferencia de conocimiento y fomentar lazos de amistad. La denominación de *voluntarios* no significa que trabajen *ad honorem* sino que alude a la propia decisión de participación. Especializados en diversas disciplinas, se insertan en alguna de las siguientes áreas de trabajo:

- Fortalecimiento de exportación de productos argentinos.
- Mejoramiento de la productividad y el control de calidad de las PyMEs
- Desarrollo de la Agricultura y la Pesca
- Mejoramiento del Medio Ambiente
- Desarrollo del Turismo
- Educación

Actualmente, alrededor de 24 Voluntarios Senior se encuentran desarrollando actividades en varias entidades públicas y ONGs de Argentina, cifra que asciende a 68 en el lapso 2002-2005, distribuidos como se detalla en el cuadro N°1.

Cuadro N° 1: Voluntarios Senior que desarrollaron actividades en Argentina entre 2002 y 2005:

AREA	CANTIDAD
Fortalecimiento de la Exportación	14
Gestión de la Calidad	8
Promoción de las Pymes	19
Desarrollo Nacional	3
Desarrollo del Turismo	4
Agricultura y Pesca	3
Medio ambiente	7
Educación	10
TOTAL	68

Fuente: Sitio web de JICA: www.jica.org.ar. Fecha de consulta: 14/11/06

La visita depara sumo interés para la sociedad anfitriona, al beneficiarse con el aporte de nuevos conocimientos. Para los visitantes, la experiencia plantea múltiples desafíos, entre los cuales el aprendizaje de la lengua resulta uno de los principales y más necesarios, en tanto el tiempo de permanencia en Argentina oscila entre uno y dos años. Asimismo, la mayoría de los voluntarios senior se instalan con sus familiares más cercanos (esposo/as o hijo/as), los cuales al tener mayor disponibilidad horaria, se avocan al aprendizaje de la lengua más que los propios interesados. No ocurre lo mismo con los voluntarios junior, que en general son jóvenes solteras que vienen solas. En ambos casos, la excelente predisposición con la que asumen la tarea (y que honra la denominación de voluntarios), más la grata sorpresa que les produce el buen recibimiento de los lugareños, genera condiciones muy propicias para la enseñanza y el aprendizaje de la lengua y cultura local.

Demandan, por tanto, aprender el lenguaje coloquial que les permita desenvolverse en la vida cotidiana y comprender las pautas de conducta. Dada la interposición de viajes de seguimiento laboral en Capital Federal como de turismo que matizan su estadía, prefieren cursos personalizados, cuya evolución siga sus propias disponibilidades de tiempo. En esta relación tutorial, disfrutan el ámbito hogareño de las clases como escenario natural de la cultura y el acercamiento al núcleo familiar del profesor que este ámbito depara. Valoran que el profesor pueda salvar momentos de intercomprensión apelando a su lengua y que conozca al menos la lógica de ella (por ejemplo, patrones de pronunciación del japonés que puedan interferir en sus expresiones orales). A la inversa, se expiden decididos por aprender la variedad rioplatense, tal como indican en la encuesta inicial de curso.

3. LA LENGUA VEHICULAR: ALGUNAS PARADOJAS DE LA INMERSIÓN

Los voluntarios encuadrados en el rubro *Educación* merecen una consideración especial para nuestra perspectiva de profesores de E/LE. Se trata de voluntarios –tanto Juniors como Seniors- que JICA envía a las distintas escuelas de idioma japonés para la difusión y la enseñanza del idioma. Quienes trabajan en la colectividad (sea dando clases de japonés, como supervisando los cursos), suelen manejarse exclusivamente en tal idioma, ya que esa es la tarea que de ellos se espera: promover el contacto con nativos a través de la lengua meta. A su vez, la colectividad los acoge con tanta receptividad, que se podría decir que pasan la mayoría de su tiempo en un gueto. Esto neutraliza en parte la situación de inmersión en que podrían aprender el español. Es así que al ser consultados al inicio del curso con quién y cuándo utilizan el español, responden: "Con el portero del edificio: ¡Buen día!" Profundizo entonces preguntando si al hacer las compras no tienen más oportunidad de utilizar el idioma, a lo que me hacen notar que al ser los supermercados un autoservicio, no es casi preciso verbalizar...

Por su parte, los voluntarios que se desenvuelven en las áreas técnicas manejan el vocabulario especializado en inglés, y dado que es ese el medio propio de las tecnologías, les resulta más fácil adoptar dicha lengua vehicular en sus ámbitos laborales.

4. LOS CONOCIMIENTOS PREVIOS

Algunos de los voluntarios arriban a nuestra comunidad con ciertos conocimientos del español adquiridos en cursos realizados en Japón. Estos conocimientos previos constituyen condicionantes fundamentales en el contexto de destino, tanto si deciden desenvolverse únicamente con dichos aprendizajes, como si optan por completar sus estudios con propuestas sistemáticas locales. En este segundo caso –mayoritario-, las experiencias previas con el español condicionan tanto al docente, quien deberá considerar desde dónde partir, como al alumno, quien pronto establecerá comparaciones entre los contenidos y la metodología previa y la actual.

En un estudio realizado sobre los libros de E/LE utilizados en Japón desde el año 2001 por parte de voluntarios de JICA (Pozzo, 2007) se ha encontrado una definición casi absoluta hacia el español peninsular, tanto en las diferencias léxicas como gramaticales y en los contenidos socioculturales. Es evidente que esto depara una gran desventaja para los japoneses que en teoría aprenden español para insertarse en la Argentina. Para el profesor de E/LE esta situación implica la necesidad de proporcionar una suerte de glosario que traduzca los términos peninsulares en sus semejantes rioplatenses (del tipo *coche-auto*, *autobus-colectivo*, etc.) e introducir aspectos culturales prácticamente desconocidos por el aprendiz (excepto por Maradona o Che Guevara). De hecho, el "Centro Nikkei" argentino (Agrupación de japoneses en el exterior y sus descendientes) organiza para los voluntarios un "Curso de Aclimatación" durante

los primeros días de estadía en Argentina. A cargo de descendientes japoneses, cuentan con un cuadernillo elaborado ad hoc de introducción al idioma español y a la cultura argentina que se desarrolla intensivamente en esta primera etapa de sus estancias en el país.

Además de estas cuestiones de contenido bastante evidentes, existen otras características de los materiales utilizados pre-arribo que condicionan los resultados a obtener en los cursos locales. Una de ellas es la naturaleza de las ejercitaciones propuestas. La primacía de ejercicios repetitivos y mecanizados, inconexos entre sí y/o faltos de relación con la situación concreta en que pueda darse incide en el estilo de aprendizaje de los alumnos. Si bien es deseable el aprendizaje analítico y razonado de la gramática, especialmente entre adultos, la falta de asociación entre las formas y las funciones o situaciones en las que son utilizadas acarrea dificultades para encontrar la forma lingüística a la hora de expresarse. Como resultado, el alumno aprecia cierta familiaridad en los contenidos presentados al tomar sus clases en Argentina, aunque insuficiente para permitirle expresarse o al menos comprender lo que escucha o lee. Desafortunadamente, las interesantes propuestas basadas en el enfoque comunicativo y el enfoque por tareas no están presentes en varios de los libros utilizados por los voluntarios durante sus estudios en Japón, y esto más allá de tratarse de libros generados en dicho país o en España. Para el profesor de español esta situación implica la necesidad de presentar materiales contextualizados. Como contraparte, puede asegurarse que el profesor argentino se ve prácticamente eximido de enseñar (aunque sí ejercitar) las conjugaciones u otros aprendizajes reglados, contemplados en todos los manuales y alimentados por el meticuloso carácter japonés. Y este último factor es quizás uno de los puntos a favor y fuente de placer de trabajar en la transmisión de nuestra lengua y cultura al maravilloso estudiantado japonés.

5. PRINCIPALES DIFERENCIAS LINGÜÍSTICAS

Otro factor interviniente es la distancia interlingüística entre el japonés y el español, que puede ser motivo de dificultad, como se ha desarrollado en otros trabajos (Pozzo 2005a, 2005b, 2006a y 2006b). Por una parte, es evidente la falta de transparencia léxica habitual en lenguas de la misma familia. En este sentido, basta examinar: *Japón* (español), *Japon* (francés), *Japan* (inglés) y *Nihon* (japonés). A este respecto habría que exceptuar los términos del sector tecnológico, los cuales son tomados del idioma inglés con pronunciación adaptada al japonés. Así, por ejemplo: *tape recorder* es *tepu recoda*[1].

La utilización de un sistema de escritura[2] diferente es otro de los factores que parecería dificultar el cambio de lengua. "Usan otros símbolos", dicen algunos

---

[1] En la transcripción japonesa he omitido las vocales largas para que el lector advierta la similitud.

[2] Los sistemas logográficos -como el japonés- se basan en unidades significativas;

profesores de E/LE temerosos de abordar a este grupo de estudiantes. En realidad, el alfabeto les resulta conocido por el extendido uso de la transliteración en "letras romanas" (*romanji*), como le dicen ellos. Además, el generalizado aprendizaje del idioma inglés los pone en contacto con el alfabeto, pero contrariamente a lo que se podría pensar, la ortografía opaca del inglés (esto es, más de una pronunciación para una misma letra) acaba interfiriendo en lo que podría ser la transferencia positiva de la ortografía transparente (relación biunívoca fonema-grafema) del japonés a la del español.

Lo que de hecho representa una dificultad para la lectura es el paso del sistema logográfico al alfabético; esto es, añoran el carácter evocador de la marca gráfica, el logograma (o ideograma[3]). Estas dificultades, no obstante, acaban disipándose al cabo del tiempo y con una ejercitación que se detenga en reparar sobre cuestiones escriturarias, como ya incluyen algunos manuales (cfr. Martín Peris y Sans Baulenas, 2000: 11, 15).

6. EL FILTRO AFECTIVO

Por fuera de lo estrictamente áulico, reciben de muy buen agrado todas las invitaciones: reuniones, paseos, eventos, etc. Y más allá de las propuestas recibidas, se ingenian para concretar todas sus inquietudes en lo que atañe a conocer la región. El recorrido infaltable por los atractivos turísticos argentinos: el Parque Nacional de Glaciares "Perito Moreno", Usuahia –la ciudad más austral del mundo-, los viñedos de la andina ciudad de Mendoza, el altiplano argentino-boliviano en el Noroeste y las Cataratas de Iguazú. Los más osados: Chile, el Machu Pichu (Perú) y Río de Janeiro (Brasil). A propósito de estos destinos, ninguno de los voluntarios conocidos ha padecido jamás un robo o hecho delictivo, lo cual da muestras de una gran habilidad en el aprendizaje de los códigos urbanos. La experiencia previa de casi todos ellos viviendo en otros países del mundo en misiones similares les proporciona una importante adaptabilidad a nuevos contextos. Asimismo, la presencia de voluntarios en distintas localidades del país opera de entramado receptor y /o consultivo a la hora de planear un viaje.

---

los fonográficos -como el utilizado por el español-, en unidades fonológicas (Sampson, 1997: 47).

[3] Los símbolos del sistema de escritura chino son caracteres. Esto significa que representan palabras del lenguaje, o más precisamente morfemas, las menores unidades dotadas de sentido. El término técnico para identificar estos caracteres, que indica su función en el lenguaje es el de *logograma*. A pesar de la creencia popular no son ideogramas, puesto que los caracteres chinos no representan significados sino palabras. No resultan ambiguos cuando se los lee en voz alta y los sinónimos no se escriben de manera semejante, cosa que no sucedería si fueran ideogramas. Este sistema no es ni más ni menos avanzado que otros sistemas de escritura, sino que resulta apropiado para la lengua china (Halliday, 1985: 4).

Aunque menos atractivo desde el punto de vista turístico, algunos incluyen visitas a las principales comunidades japonesas en Corrientes, Paraguay y Brasil. La relación estrecha entre docente y alumno permite saber con antelación acerca de dichos planes y organizar las clases de E/LE en torno a tales experiencias. Dicha táctica resulta también para los eventos anuales destacados del país receptor: la Fiesta de la Flor en Escobar, los Cursos de japonés de verano organizados por el Centro de Cultura e Idioma Japonés de Argentina (*Kyoren*) en La Plata, la Fiesta de las Colectividades de Rosario para los voluntarios residentes en dicha ciudad, etc. Y al interior de las Asociaciones Japonesas del país: el Certamen de oratoria, el Concurso de Karaoke, la Ceremonia del Té, los festejos nacionales japoneses (Día de las Niñas *–hinamatsuri*, el de los Antepasados *–obon*, etc.). Sin afán de apesadumbrar al profesor de E/LE, es lógico que cuanto más conozca la vida y las costumbres del grupo de pertenencia de sus alumnos más podrá llegar a ellos en la selección de contenidos para sus clases. Sin descuidar, naturalmente, el objetivo ulterior de acercarlos a nuestra lengua y cultura.

7. EN PROSPECTIVA

Si pensamos que la Agencia de Cooperación Internacional de Japón (JICA) mantiene una afluencia constante de voluntarios en Argentina y en el mundo[4], es posible que estimemos a los japoneses como un grupo destino para el aprendizaje del español, que supere el estereotipo del turista golondrina que sólo toma fotografías. Y para quienes aducen que el oriental es inexpresivo o cuanto otro estigma circule sobre este grupo, basta con sólo probar para com-probar la inmensa calidez y excelente predisposición para con el acercamiento recíproco.

8. A MODO DE APÉNDICE: TAMBIÉN LOS DEPORTISTAS...

Aunque fuera del accionar de esta esfera gubernamental, otro sector que no debería faltar en este racconto es el de los grupos de jóvenes futbolistas que se insertan en los clubes locales para realizar prácticas deportivas temporarias. Si bien estas inclinaciones puedan sugerir poco interés en el aprendizaje de la lengua, dicha asociación no sería más que un prejuicio que restringe tal interés a las esferas académicas. Es nuestra obligación como profesores de E/LE percibir las necesidades que cada una de las experiencias y perfiles depara, de modo que la estancia en nuestro país sea del máximo aprovechamiento para los visitantes.

9. BIBLIOGRAFÍA CITADA

---

[4] Entre 1991 y abril de 2002, el número de voluntarios senior enviados ascendía a 1042. Fuente: JICA Info-Kit *El programa de voluntarios Senior.* Tokyo, Julio de 2002.

HALLIDAY, M.A.K. (1985) *Spoken and Written Language*. Hong Kong: Oxford University Press. Trad.: Telma Piacente.

MARTÍN PERIS, E. y SANS BAULENAS, N. (2000) *Gente 1. Libro del alumno* Barcelona: Difusión.

POZZO, M.Isabel (2005a) "Análisis contrastivo de los aspectos grafofónicos del japonés y del español: implicancias para el aprendizaje del japonés por hispanohablantes". En *Japonés III para hispanohablantes*. Editor: Instituto Tozai. Buenos Aires: Dunken, pp.125 a 138. ISBN: 987-02-1406-1.

---------- (2005b) "Interferencias de la escritura logosilábica japonesa en adultos japoneses iniciándose en el español como lengua extranjera". En Revista *Quaderns Digitals* "Monográfico sobre Lenguas". ISSN 1575-9393 Edita: Centre d'Estudis "Vall de Segó". Valencia. Disponible en: http://quadernsdigitals.net/index.php?accionMenu=hemeroteca.VisualizaArticuloIU.visualiza&articulo_id=8648

---------- (2006a) "Cuando aprender español implica cambiar de sistema de escritura: el caso de los adultos japoneses de nivel inicial". En Pozzo, María Isabel (coord.) *Enseñanza del español como lengua extranjera en Argentina. Experiencias y reflexiones*. Rosario, Argentina: UNR Editora. Págs.83-95. ISBN: 950-673-527-1.

---------- (2006b) "Interferencias grafofónicas en el aprendizaje de español por japoneses". Actas del II Congreso Internacional "Encuentro de mundos. Pasajes interculturales". Editores: Centro de Estudios Orientales, Centro de Estudios de Literatura Francesa y la Escuela de Letras de la Facultad de Humanidades y Artes de la Universidad Nacional de Rosario. Ediciones Digitales "Nueva Hélade". Rosario, Argentina. ISBN: 10:987-23089-o-X, ISBN: 13: 978-987-23089-0-2

---------- (2007) "La enseñanza del español en Japón. Una mirada desde sus textos". En *Japonés IV para hispanohablantes*. Editor: Instituto Tozai. Buenos Aires: Dunken, pp. 73 a 84. ISBN: 978-987-02-2726-7.

SAMPSON, G. (1997) *Sistemas de escritura*. Barcelona: Gedisa. Colección Lea.

15世紀カスティーリャにおける君主教育書に関する一考察
―モセン・ディエゴ・デ・バレラの手法―

加藤　さやか

はじめに

15世紀および16世紀のカスティーリャでは，君主の教育に関する著作が盛んに執筆され著しい発展を見せた。これらの「君主教育書」（tratados de educación de príncipes）は，スペイン教育学史の研究者 Bernabé Bartolomé Martínez によれば，文学の分野においてピカレスク文学や道徳書簡集や説教集などと同様に，教理文学（literatura doctrinal）に分類される。対象者は具体的に国王とその息子たちであるが，多くの場合領地を所有する名門の貴族の子弟もその範疇に含まれる[1]。教育書というからには，その目的が対象者の教化や訓育にあることは当然ながら，取り上げられている主題や内容の構成は作品によって多種多様である。Bartolomé は，「国政の運営など非常に高い責任をともなう職位にある者，もしくは将来就く者」が「その権力と支配を民と家臣の上に正しく行使する」ように，彼らを「知性において啓蒙し，行いにおいて戒め導くこと」を共通目的とする以外，方法論や構造に一定の形式が存在するわけではないと指摘している[2]。

一方，イデオロギー的視点から見ても，とりわけ15世紀カスティーリャは，中世のスコラ的教育思想と，イタリアから流入した人文主義を基調とする新しい教育思想が共存する時期にあり，年代によって，また著者によって作品が表す思想的特徴にはばらつきがある[3]。このことは，言い換えれば，

---

[1] DELGADO CRIADO, B. (coord.): *Historia de la educación en España y América*, t. II. (Madrid: 1993), p. 289-290.

[2] *Loc. cit.*

[3] 実際，数ある15世紀執筆の君主教育書の中でどの著を「人文主義的」君主教育書の第一号と定めるかという問題は，カスティーリャにおける人文主義の流入及び波及開始時期をいつとするかという議論と結びついており，容易に回答されるものではない。1930年代まで，スペインにおいて最初の人文主義的君主教育書と目されていたのは，アントニオ・デ・ネブリハ（1441-1522）の『子息たちの教育』 *De liberis educandis*（1509年）であったが，1930年に Keniston がロドリーゴ・サンチェス・デ・アレバロ（1404-1470）の『息

15 世紀カスティーリャの君主教育の思想的特徴や傾向を解明するためには，当時の作品を一つ一つ分析し，その考察結果を積み重ねていくことが，地道ながら確実な方法であるということになろう。さらにその作業の積み重ねは，15 世紀の著者一人一人における人文主義の影響の度合いの把握を可能にし，カスティーリャ人文主義という，その混沌性ゆえに絶えずスペイン・ルネサンス研究者の間で議論が繰り返されてきた広大なテーマを一端から照らし出すことにもつながるのではないだろうか。

以上のような観点から，本稿で取り上げるのがモセン・ディエゴ・デ・バレラの『君主の学識』*Doctrinal de príncipes*[4]（以下『学識』と略す。）

子，幼児そして青少年を教育するための手段，手順および方法について』*De arte, disciplina et modo alendi et erudiendi filios, pueros et iuvenes*（以下，『方法』と略す。）(1453 年) を取り上げ，人文主義の影響を表す教育書としてネブリハに 50 年先行していることを指摘した。しかしそれ以前，つまり 15 世紀前半に現れた新しい知識人，文化人グループを最初の人文主義者世代と見做せば，パブロ・デ・サンタ・マリア（1350-1435. 改宗前の名は Salomón Ha Leví）の『スペイン編年大史』*Suma de las crónicas de España* と，その息子アロンソ・デ・カルタヘナ（1384-1456）の手による一連の教育書（1440 年から 1487 年に執筆）あたりが境目かと思われる。以後，モセン・ディエゴ・デ・バレラ（1412-1488）の『真に貴族たるもののかがみ』*Espejo de la verdadera nobleza* (1441 年) と『君主の学識』*Doctrinal de los príncipes* (1476 か 1477 年)，アロンソ・オルティス（¿?-1507）の『カトリック両王の息子フアン王子の教育についての対話』*Liber de educatione Iohannis serenissimi principis...*（以下，『対話』と略す。）(1490 年代前半?)，フアン・デ・ルセナ（c. 1430 -1506）の『幸福な人生について』*Libro de vida beata* (1463 年頃) と『学問奨励のための書簡』*Epístola exhortatoria a las letras* (1480 年頃)，そして上記のネブリハの著という流れとなる。Cf. KENISTON, H.: "A Fifteenth-century treatise on education by Bishop Rodericus Zamorensis", Bulletin hispanique 32, 1930, pp. 193-217.

[4] 現代版としては，*Prosistas castellanos del siglo XV.* Edición y estudio preliminar de M. PENNA (Madrid: 1959), pp. 173-202 に収載された VALERA, M. D. de: *Doctrinal de príncipes* と，Carriazo y Arroquia による解説を伴う "Lecciones al Rey Católico: *el Doctrinal de príncipes* de Mosén Diego de Valera", *Anales de la Universidad Hispalense,* XVI, 1955 が出ている。本稿では Penna 版に基づいて考察する。

である。Camillo の指摘によれば，バレラは，「カスティーリャにおける最初の人文主義思想の発展を担った世代がちょうど終わる頃」に著作活動を始める，「人生で最初の知的教育を受ける時期から既に新しい思想に触れて育った世代」に位置づけられ，同地の人文主義の思潮の発展の中でその重要性が認められている人物である[5]。『学識』は，のちにフェルナンド・カトリック王となるアラゴンのフェルナンド王子のために 1476 年前後[6]に執筆された君主教育書であるが，その 30 年以上後に著されたマキャベリの『君主論』との関連性が指摘され[7]，教育，倫理，政治，歴史と様々な観点から研究者の関心を呼ぶところとなっている。

本稿では，本著のテーマ構成を構造的に分析するとともに議論を構成する主要素を考察し，バレラがいかなる視点で君主教育論に取り組んでいるのか，またそこに人文主義の教育思想との関連性は認められるか，追究を試み，カスティーリャ人文主義の流れにおける同著の位置づけを明らかにするよう努めたい。

1. 15 世紀カスティーリャにおける学問の世俗化と君主教育書

『学識』の考察に入る前に，15 世紀カスティーリャにおける君主教育書の増加と発展を可能にした当時の文化的背景について簡単に触れておきたい。

中世以来，勉学及び学究的活動は聖職者や法律学者に限定された専門的領域であった。世俗に生きる人々の教育といえば，貴族階級でさえ，幼少時のわずかな期間を除けば，「武器 armas と礼節 cortesía」に要約されるよ

---

[5] CAMILLO, O. di: "Las teorías de la nobleza en el pensamiento ético de Diego de Valera", en RODORÍGUEZ PUÉRTOLAS, J., *Mosén Diego de Valera y su tiempo* (Cuenca: 1996), pp. 59-60.

[6] 執筆時期については諸説あるが，1476 年か 1477 年という説で大方一致している。Cf. CARRIAZO Y ARROQUIA: *op. cit.*, pp. 75-76.

[7] マキャベリの『君主論』がフェルナンド・カトリック王をモデルとしていることはよく知られているが，両著の関連性及び類似点を最初に指摘したのは M. Penna である。PENNA : *op. cit.*, pp. cxxix-cxxxvi. その後 Camillo らが同様の点について言及している。CAMILLO: *op. cit.*, pp. 59-60; RODRÍGUEZ PUÉRTOLAS, J.: "Mosén Diego de Valera: Ideología y poesía", en R. PUÉRTOLAS, *op. cit.*, p. 24.

うに騎士としての実技能力と作法の習得が殆ど全てであり[8]，文学に関する活動としては，詩とレトリックがその修養の必要性を認められていたに過ぎなかった。理想の武人像に「文」は不要と見做す風潮に支配され，文学に対する彼らの関心が極めて低いものであったことは歴史的資料によってよく知られることである[9]。

ところが，15 世紀も半ばに近づくにつれ徐々に変化が生じ始める。その兆しはまず，カスティーリャにおける最初の人文主義世代と G. Rolán らが見做す人々の中に，非聖職者が混じっていることに見出される[10]。イニェゴ・ロペス・デ・メンドーサをはじめ，彼らのほんとんどは宮廷もしくはその周辺で生きる世俗人であり，メセナ活動や古典を中心とした書物の収集を熱心に行った。メンドーサの質量ともに豊かな蔵書は，貴族階級に起こった

---

[8] 15 世紀半ば以前における貴族教育に関しては，NADER, H.: *Los Mendoza y el Renacimiento español* (Guadalajara: 1985), p. 102 を参照。なお，「武」優先の貴族教育の傾向について，Baceiro Pita は Russell に同意し，カスティーリャに限定されるものではなく，イタリアを除く西ヨーロッパほぼ全土に共通する特徴であったことを指摘している。BACEIRO PITA, I.: "Educación y cultura en la nobleza (siglos XIII-XV)", *Anuario de estudios medievales*, 21 (Barcelona: 1991), p. 572. Cf. RUSSELL, P.E.: "Las armas contra las letras: para una definición del humanismo español del siglo XV", en *Temas de La Celestina y otros estudios*, Ariel, Barcelona, 1978, pp. 207-241.

[9] イサベル・カトリック女王により貴族子弟の教育を任じられたイタリア人人文主義者ペドロ・マルティル・デ・アングレリアの書簡がしばしば研究者に引用されている。RIBER, L.: *El humanista Pedro Mártir de Anglería*, Barcelona, Barna, 1964, p. 72; NEBRIJA, A. de: *La educación de los hijos*. Estudio, edición, traducción y notas por León Esteban y Laureano Robles (Valencia: 1981), p. 31.

[10] 2006 年 González Rolán らは，1480 年以前のカスティーリャにおける人文主義思想の普及を過小に評価し，同年以後つまりカトリック両王統治開始後を境に一気にルネサンス人文主義が同地に開花したかのように捉える歴史家たちの説に反論し，すでにフアン二世（1406-1454）時代から最初の人文主義者世代が形成されつつあったと主張している。GONZÁLEZ ROLÁN, T., BAÑOS BAÑOS, J. M. y SAQUERO SUÁREZ-SOMONTE, P.: *El humanismo cristiano en la Corte de los Reyes Católicos: Las Consolatorias latinas a la muerte del Príncipe Juan* (Madrid: 2006), pp. cvi-cix.

文化活動や学問に対する積極的参加の象徴として捉えられている[11]。しかしこの「学問の世俗化」の動きの中で最も重要なことは，非聖職者が「聖域」であった学問の世界に踏み込んだことではなく，教育そのものに対する考え方の変化を伴っていた点である。古典文学の翻訳を通して古代ギリシャ・ローマの哲学者，教育者，歴史学者に触れた上流貴族の一部は，自分たちの子どものために新しい教育を求めるようになる。彼らは自分たち自身が受けた伝統的騎士教育とは異なる，人間としての生き方を示唆してくれるような新しい教育方法を求めて，国外で新しい思想や教養を身につけた知識人たちに助言を依頼した[12]。

以上のような学問の世俗化を推進することになった，教育に対する意識変化の原因は何であったのだろうか。真っ先に挙げられるのは，人間教育を標榜する人文主義思想の影響であるが，カスティーリャの場合においては，それは主因であっても唯一ではないことに注意しなければならない。騎士層に起こったメンタリティの変化とその原因をめぐって研究者は様々な見解を示しているが，それらの詳細な検証は別の機会に預けるとして，ここでは簡潔に二つの点について述べるにとどめたい。第一には 15 世紀以降に起こったカスティーリャの政治および社会事情の変化である。この点について，同世紀の貴族階級に詳しい H. Nader は，トラスタマラ朝初期に見られる貴族騎士層の文学活動の高まりは 15 世紀初めの政治的かつ宗教的紛争の結果であると分析している[13]。君主の暗殺や長期化する王族同士の争いといった国

---

[11] NADER: *op. cit.*, p.120.

[12] 教育書の冒頭に著者自身が依頼者の名や執筆の経緯を記している例は珍しくない。例えば，本稿 pp. 1-2，註 3 に掲げたサンチェス・デ・アレバロの『方法』は，国王エンリケ四世の顧問官アルフォンソ・デ・オスの依頼を受けてその息子のために，同じく前掲のネブリハの『子息たちの教育』は，フェルナンド・カトリック王の秘書官ミゲル・ペレス・デ・アルマサンの依頼を受けてその息子たちのために執筆されたことが分かっている。現代語版としては，それぞれ NEBRIJA:. *op cit.*; SÁNCHEZ DE ARÉVALO, R.: *Tratado sobre técnica, método y manera de criar a los hijos, niños y jóvenes (1453).* Introducción, estudio y notas de Lorenzo Velázquez Campo; Traducción de Pedro Arias Fernández, Cuadernos de pensamiento español (Servicio de publicaciones de la Universidad de Navarra), Pamplona, 1999 が出ている。

[13] NADER: *op. cit.*, pp. 105-106.

内の動乱の他に，教会分裂（1378 年）とそれに続く和解の公会議の難航などカトリック国として巻き込まれざるをえない国際的争乱は，彼らを自らの保身と忠誠心との狭間で苦悩する慢性的な不安状態に陥れた。そしてこの「モラル的ジレンマ」の問題に答えを求めて彼らが向かったのが，人文主義者たちによって引き出された古典世界であった。古代の偉大な作家の中に倫理的かつ宗教的指導を見出そうという試みが，彼らを古典学習へ向かわせたとする見方である[14]。また，B. Delgado Criado は教育学史研究の立場から，社会の能力主義化を指摘している。トラスタマラ王室のもとで国造りが進展すると同時に，政治，経済，行政，外交，宗教とあらゆる分野の国内外の問題が複雑化していき，専門知識を持った人間，とりわけしかるべき高等教育機関で法律学を修めた人間が必要とされるようになった。実際に 15 世紀半ば頃には，中世以来大学教育とは無縁であったはずの貴族階級の中に，学問と権力の両方を身につけた新しいタイプの貴族層が形成され始める[15]。当時のトレドの王室代理官ゴメス・マンリケの言葉[16]は，権力ある地位に就くためには，言い換えれば，成功の人生を勝ち取るためには，家系や血筋に依らず学問が必要であることを，誰もが認識せざるを得なくなっていたことを示していよう。

第二の要因として指摘されるのは，フアン二世（1404-1454）やイサベル・カトリック女王（1451-1504）ら文化活動や学問に関心の高いトラスタマラ朝君主の影響である。これら二人の君主が宮廷の内側から学問を推進す

---

[14] *Loc cit.* NADER は 15 世紀カスティーリャにおける人文主義思想は，社会における自分たちの人生の問題に答えを出そうとした騎士階級によって，もっぱらカスティーリャ語でもって表現されたと結論している。

[15] DELGADO: *op. cit.*, t. I. (Madrid: 1992), p. 649.

[16] 「この市トレドで名声や役職を持つ者に高貴な血筋でない者がいるからといって，嘆くのは間違いである。血の欠陥はその者の統治能力を損なうと考えるからであろうが，そう考える者は，新たに富を築いて裕福になった者たちに対しても，彼らはその富に値しないと思い苦渋するであろう。」以上のマンリケの言葉は以下の Maravall の論文に引用されている。MARAVALL, A.: "El prerrenacimiento del siglo XV", en GARCÍA DE LA CONCHA, V. (dir.), *Nebrija y la introducción del renacimiento en España* (Salamanca: 1983), p. 28.

る原動力となったことは多くの研究者の認めるところである[17]。彼らの率先して文化および学問的活動に携わる姿勢に，宮廷の貴族騎士たちは追随する結果となった[18]。

以上のように，15 世紀カスティーリャに見られる君主教育関連の著作の増加は，同地特有の社会および政治の諸事情に由来する要因と，折からの人文主義の影響が相まって貴族階級に生じた意識変化を背景としていた。そしてバレラはまさに貴族階級の出身であったが，メンドーサら最初の人文主義世代と異なるのは，もはや大学出もしくは外国帰りの知識人に依頼するのではなく，自ら教育論の執筆に従事している点である。

2. 著者モセン・ディエゴ・デ・バレラと『学識』の概要

モセン・ディエゴ・デ・バレラは，1412 年にクエンカのコンベルソ系貴族の家に生まれる[19]。15 歳にしてカスティーリャ国王フアン二世の宮廷に仕

---

[17] フアン二世は，詩の愛好家である以外にも古典文学の翻訳を奨励したり自らの蔵書を宮廷の騎士たちに貸し与えて転写させたりしたことが知られている。BACEIRO PITA: *op. cit.*, pp. 572-574. 宮廷内に大学卒の法律専門秘書官とは別に，ラテン語書簡担当や王室年代記者など文化的事柄を受持つ秘書官のポストを設けたのも同王であった。ROLÁN y otros: *op. cit.*, pp. xliii-xliv. イサベル女王が自らの王子王女だけでなく貴族子弟の教育のために宮廷内に学校（Escuela palaciega）を設けたことが，当時の記録から知られている。女王が最初の教師として任命したのは，イタリア人人文主義者ペドロ・マルティル・デ・アングレリアであった。DELGADO: *op. cit.*, t. II., pp. 296-298. 女王の宮廷内での文化および学問的活動については他に SUÁREZ FERNÁNDEZ, L.: *Isabel I, Reina*, Ariel, Barcelona, 2000, p. 216; LADERO QUESADA, M. Á.: *Los Reyes Católicos: La Corona y la Unidad de España*, Asociación Francisco López de Gomara, Valencia, 1989, p. 237 を参照。

[18] 当時の宮廷人フアン・デ・ルセナの言葉は象徴的である。「善であれ悪であれ，国王が為されることは我々もみな試みます。もしそれがよいことならば，我々自ら楽しむために。もし悪であるならば，国王に阿るために。国王が遊んでばかりの時は，我々もみな遊びほうけていました。女王が勉強される今，我々も学問の徒になりました。」LUCENA, J. de: "Epístola exhortatoria a las letras", en PAZ Y MELÍA (ed.) *Opúsculos literarios de los siglos XIV al XVI*, Sociedad de Bibliófilos Españoles, Madrid, 1892, p. 216.

え始めてから後，騎士，宮廷人，外交官そして政治家として活躍する人生が始まる。同世紀に同じく君主教育を著したロドリーゴ・サンチェス・デ・アレバロ（1404-1470）やアロンソ・オルティス（¿?-1507）[20]が若年期から没するまで聖職者の世界で生きたのとは対照的に，バレラの人生の舞台は常に世俗にあった。つまりバレラは，前章で触れたカスティーリャにおける学問の世俗化を象徴する一著作家と捉えられる。

フアン二世死後もエンリケ四世の給仕長，さらにフェルナンド・カトリック王の顧問官など，宮廷での役職を歴任するかたわら，著作活動も旺盛で，とりわけ年代記・歴史の分野においては当時から名声を得ていたらしい。道徳，政治，詩分野の著作に関しては，歴史物に比べて研究の遅れが認められるものの，『学識』についてはその重要性が Menéndez y Pelayo によって早くから指摘されている[21]。

バレラの生涯の中で，その豊富な国外旅行歴が我々の目を引く。国王の外交的使命を帯びて，バレラは 1437 年から 1444 年にかけて，フランス，ボヘミア，スイス（バーゼル），デンマーク，イギリス，ブルゴーニュと，宮廷を中心にヨーロッパ各地を周遊している。これらはバレラと人文主義との接触を示唆する重要な座標である。また，若い時分から政務と外交の世界

---

[19] バレラの生涯に関する論文は多数あるが，ここでは代表的なものを最小限に記す。TORRE, L. de: *Mosén Diego de Valera. Apuntaciones biográficas, seguidas de sus poemas y varios documentos*, Fortanet, Madrid, 1914; VALERA: *La Crónica de los Reyes Católicos*. Edición de Juan de Mata Carriazo y Arroquia, Centro de Estudios Históricos, Madrid, 1927; PENNA: *op. cit.*, pp. xcix-cxxxvi; SANCHO, H.: "Sobre Mosén Diego de Valera. Notas y documentos para su biografía", *Hispania*, 7 (1947), pp. 531-553.

[20] アレバロはエンリケ四世に『君主の苑』*Vergel de los príncipes* (1456 か 1457 年) を，オルティスはカトリック両王の継嗣フアン王子に前掲の『対話』を著している。現代語版としては，それぞれ "Vergel de los príncipes", en PENNA (ed.), *op. cit.*, pp. 311-341; *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos*, Versión, notas e interpretaciones por Giovanni Maria Bertini (Madrid: 1983) が出版されている。

[21] MENÉNDEZ Y PELAYO, M.: *Poetas de la corte de don Juan II*, Colección Austral, núm. 350, Madrid, 1943, p. 286.

で生きてきたことと，歴代の国王の年代記の編者であることは，彼の思想を形成する要素として，政治と歴史が大きな位置を占めていたことを推測させる。

『学識』の記述形式は，フェルナンド王子に宛てた書簡の形式をとっており，使用言語はロマンス語である[22]。全編の構造は，プロローグと本文と，最後に数行の締めくくりの文句で構成され，本文は全九章から成る。各章の長さは一定ではなく，わずか数行の章もある。第七章を除くほとんど全ての章には，その章で扱うテーマが疑問詞を用いて提示されており（下表参照），それに応答する形で著者の考えを述べる形式になっている。

『学識』目次	
プロローグ	
第一章	国王という名はどこに由来するか。
第二章	いかに国王は神を恐れ愛するべきか。
第三章	国王の職務とは何か。
第四章	国王は臣下に対しどうあるべきか。
第五章	国王と暴君の間にある違いについて。
第六章	暴君には幾通りあるか。
第七章	タイトルなし。
第八章	一般的に言って徳とは何か。
第九章	徳の分類について。
献辞	

本著執筆の意図は，フェルナンド王子の教育という点において明らかではあるが，プロローグの著書自身の言葉は本著の教育書としての一つの特徴を表している。

> (...) 拙書は，貴きお方であらせられる殿下の高い見識のために有益なれと，私めの暗愚な判断ではなく，カトリック，異教の徒を問わず，倫理，経済そして政治について著した有名な著者たちの優秀

[22] バレラの作品は，現在分かっている限りすべてロマンス語である。この点に言及して，Camillo は，「1400 年代のスペイン人文主義のいくつかの特徴の一つは，モセン・ディエゴ・デ・バレラの作品群に最も関連するもので，私が土着言語人文主義 humanismo vernáculo と識別するものである。」と述べている。CAMILLO: *op. cit.*, p. 50.

で明晰な判断に基づいて，執筆いたしました。(...) 国王のお務めに必要な知識の完成においてお役に立てるかと存じます[23]。

本著は「統治を司る者の知識・学識の完成のために役立つこと」を目的とする。この部分の記述から覗い知れるのは，本著の政治教育書としての役割である。実際に，プロローグが示唆する政治教育の視点は，本著とマキャベリの『君主論』との類似性が指摘される所以でもあるが[24]，しかしながら，『学識』の目次に明らかなように，政治や行政に関する現実的問題は題材として見当たらない。では実際に本著の中でバレラは何を論じたのであろうか。各章のテーマはそれぞれの章の冒頭に掲げられてはいるが（第七章を除く），本著中で扱われる論点を内容によって整理すると，大きく四つにまとめることができる。すなわち，1）国王という存在の定義と位置づけ，2）完璧な国王（rey perfecto）の概念，3）暴君（tirano）の概念，4）徳の定義の四点である。本稿ではこの区分に従って考察を進めていくものとする。

3. 『学識』にみるバレラの君主教育論

3.1. 国王という存在の定義と位置づけ

議論の出発点として，王という言葉の語源が聖イシドルスの『語源論』に拠って示された後[25]，国王の位置づけが，1）神との関係，2）国との関係の二つの段階を経て明らかにされる。1）について着目すべきは，権利よりも義務の強調に議論の重点が置かれていることである。

(...) 真っ直ぐな柱が建物の重さを全て受けとめて支えるように，国王は神によって託された国民を正義をもって支えなければなりません。七部法典第二部第一編第七条に，国王はその領地の民を正義と真実の内に保たねばならぬ，と記されるように。(...) 国王は神を畏怖し愛するがよいでしょう。なぜなら神は国王を非常に偉大な場所に位置づけたのですから，それだけ国王は神をよく知ろうと努め

---

[23] VALERA: *op. cit.*, p. 173.

[24] Cf. PENNA: *op. cit.*, pp. cxxvii-cxxxvi; CAMILLO: *op. cit.*, p. 61; RODRÍGUEZ PUÉRTOLAS: *op. cit.*, p. 24.

[25] VALERA: *op. cit.*, p. 174.

なければなりません。神を知って愛し，愛してそして畏れ，仕えるのです[26]。

バレラの記述には王位の決定を神慮とする思想を否定する言葉こそ見られないものの，かといって国王の存在を取り立てて神格化することもなく，そのかわり王位も民も神より委託されたものであることが随所で強調されている。そして神から託された以上，それらの安全を確保し平和に治めることは，国王という地位にいる者が果たすべき義務である，と国王の使命を中心に議論が展開されていく。常に自分よりも公共の利益を第一に考えて統治する立場にいるのが国王である。国王は任務の重大さと苛酷さを受け止め，神を「愛し，恐れかつ感謝を忘れぬように」すべきだ，と一貫して謙虚な態度を求めている。

一方，2）の国王と国との関係については，両者をそれぞれ頭部と身体に譬えて，互いの関係を説明しているのが興味深い。

国王にとって王国は人体のようなものです。その頭部が国王です。身体の各部が頭部を守り保護することに努めるように，頭部は各部を統御し治めそして助けるために働かねばなりません。時に痛みを伴ってでも部分を切除しなければならないときもあるでしょう[27]。

また，別の箇所では，

国王は恐れられるよりも愛されるよう努めるのがよいでしょう。キケロ曰く，「愛される以上に保つに値する状態などなく，ひどく恐れられる以上に不適切なことはない。」(...) そしてソクラテス曰く，「犬も馬も人間もあらゆるものに正しく命令を下すことは出来ない，まず何よりも相手の意思を勝ち取っていなければ。(...) 意思こそはそなたの心の守衛となろう。厚い石壁よりも友の人徳によっ

---

[26] *Loc. cit.*

[27] *Ibid.*, p. 187.

て，武装した兵士よりも市民の愛情によって守られるように。」[28]
（括弧筆者）

「神秘体」（cuerpo místico）はもともとカトリック神学のコンセプトであるが，バレラはそれを政治的な視点から用いて国王（頭部）と国（身体）に譬えている[29]。バレラはこのメタファーを通して，国王と国の民は一体であること，そして二者の関係は支配権力から被支配者への力の一方通行ではなく，相互作用の関係にあることを示唆している。国を守るのは頑丈な城砦ではなく，国民の王に対する信頼と愛情である。畏れられるより愛されよ，そのためには自らがまず愛を与えることである，と両者の間にあるべき関係を提示すると同時に，その関係を築くために国王がまず持つべき心構えを説いている。

以上の点を踏まえると，国王の存在と位置についてのバレラの議論の特徴は，国王の神性を問うたり，その超越的特権を謳い上げたりすることにはほとんど興味が無く，その職務に伴う責任の重大さや神に任された使命の意義を説くことに重点を置いているところに見出されよう。そこから観察されるのは，バレラの現実的な社会意識，突きつめて言えば，王位を殆ど一つの社会的職業として捉える視点である。これらの特徴は，人間の生や幸福や不幸を，社会的地位や職業というフィルターを通して論じようと試みた人文主義者たちの社会意識を想起させるものである。

3.2. 完璧な国王（rey perfecto）の概念

3.2.1. 徳

前述したように本著の執筆意図が，完全なる国王の育成である以上，「完璧な国王」（rey perfecto）という概念を追及し読者の前に明示することは本著の中核的課題と捉えられる。バレラがその課題に取り組むに当たっ

---

[28] *Ibid.*, pp. 186-187.

[29] 「神秘体」のコンセプトを政治的な意味に適用するやり方を，バレラは他の著作や書簡の中でも用いているが，その点についてDíez Borqueは，同コンセプトはのちにエラスムス主義者たちが好んで用いたものであることを指摘し，バレラに彼らとの共通点を見出している。DÍEZ BORQUE, J. M.: "Ideas de Mosén Diego de Valera sobre la monarquía", en PUÉRTOLAS, *op. cit.*, p. 87.

て議論の中心においたのが徳であったことは，15 世紀カスティーリャの人文主義者らしい特徴と言えよう。バレラは国王が具えるべき徳（正義，節制，率直，賢明，慈悲，謙虚，気前の良さ等）と，逆に避けるべき悪徳（吝嗇，貪欲，非寛容等）の両者を対比的に提示することによって，完璧な国王の輪郭を描き出そうと試みる。理論面では七部法典，アリストテレス，セネカ，聖グレゴリウス，ソクラテス，聖イシドルス，聖トマス，聖バレリウスらが論拠に用いられ，実例としては，アレクサンドロス大王，トラヤヌス帝，オクタビアヌス帝，ブルートゥス，ポンペイウスなど古代の例から，ミラノ，ブルゴーニュ，ルクセンブルクなど外国の公爵の例，またアラゴン王国のアルフォンソ（フェルナンド王子にとって伯父にあたる）やフアン二世（同父にあたる）に至るまで，空間的にも時間的にも幅広くバラエティに富んだ例が扱われており，著者バレラの歴史に関する造詣の深さを物語っている。

具えるべき資質の中でも，「国王の存在意義そのもの」と言ってよいほど重要視されているのが「寛大さ」と「正義」である。歴代の有名な国王や大帝が，その臣下や征服した異教徒たちを相手に寛容に気前よく振舞ったエピソードを列挙し，「国王にとって寛大もしくは率直であることはとても大事なことです。ボエティウスは寛大さによって君主は愛されるようになると述べています[30]。」と，寛容さを大切とする理由を明かす。王の寛容な振舞いや気前の良さは，臣下の中に王に対する敬愛の情を育み，ひいては王位を安泰なものへと導いてくれる，というのである。

正義については，公共の安全を保持し，安定した統治の維持を実現させる徳であると断言する。

> 国王は公正で情け深く誠実で慈悲深くあるのがよいでしょう。(...) 慈悲と真実は国王を守り，正義と仁徳はその座を強固なものにするでしょう[31]。

また別の箇所では，

---

[30] VALERA: *op. cit.*, p. 178.

[31] *Ibid.*, p. 175.

第 23 章「国王の務め」問 5[32]でこう言われています。「国王の仕事とは正しい判断と正義を実行し，悪の手から抑圧される者たちを解放し，未亡人や孤児や巡礼者を救うことである。彼らは権力者によって誰よりも先に窮乏にさらされる者たちであるから。(...)」また アリストテレスはその『倫理学』第五巻で，正義は完全な徳にほかならないことを述べています。その反対の場合，行く末は悪です。だからこそ，正義の無い国は長く続かないのです[33]。（括弧筆者）

興味深いのは，正義の実行を厳しく求めつつも，同時に状況によっては寛容と慈悲も必要であると警告している点である。

神がその寛大さによって，この世において善人と悪人，そしてキリスト教徒と異教徒を，時に緩やかに罰し，時に我々の過ちを許し，そして時には厳しく叱責したりして支えているように，国王もこの地において同様の位置を占められます。罪や罪を犯した者の性質や時と場所を見極めつつ，行き過ぎを諫め罰しなければなりません[34]。

悪を容赦なく糾弾し常に正義を貫く厳しさと同時に，慈悲深く寛容であれと求めるのは一見矛盾のようであり，両者をバランスよく両立するのがいかに困難であるかバレラ自身が認めている。そのことは，本著の最後の部分で，正義にあるべき厳しさと寛容さの二面について再度論じていることからも覗い知れる[35]。寛容が度を過ぎないために，バレラがバランスの拠り所として言及しているのが，法の遵守である。

国王は法を遵守せねばなりません。七部法典第一部第一編第十条に記されるように，王は法を己の誇りや流儀同様に守り，国民を己

---

[32] 引用元は政令の一項目と思われる。Penna 版では註として *Decreti pars II, Causa XXIII, quesito V, cap.* 23 (ed. Lipsiae 1879, col. 937) と付されている。

[33] *Ibid.*, pp. 187-188.

[34] *Ibid.*, p. 187.

[35] *Ibid.*, pp. 195-196. ここでは聖アウグスティヌススス，セネカ，キケロの理論が論拠に用いられている。

の命や後見同様に守るものです。法を守らぬ王は，国王ではなく暴君と呼ばれるべきです[36]。

国王たりとも法を免れるものではない。もし法を自分に対してであれ他人に対してであれ自分に都合よく適用したり，厳格であるべきときに慈悲を施したりすれば，それはもはや国王ではなく暴君である。バレラによれば，国王と暴君を画す一線は法を遵守するか否かにあった。

バレラの徳についての議論を通して二つの点が我々の関心を引く。一つは，バレラが論じている徳の性質が，すべて人格形成もしくは人間性の向上に関するところのいわゆる倫理的徳（virtudes morales）であることである。言い換えれば，正義や寛大さというのは国王でなくてもあらゆる人間が具えて然るべき「人間的徳」である。他方，統治者たるゆえに必要もしくは実利的と思われるような「政治的徳」についてはほとんど触れられていない。さらに，この時代の作品にしては宗教的徳について言及する部分も極めて少ない。つまるところ，バレラの関心の先にあるのは，人間としての普遍的モラルであり，統治を司る者（国王）だけに求められる限定的それではないと捉えてよいのではないか。

もう一つの点は，バレラの倫理的徳を実践的生の中で論じる視点である。バレラは徳を終始臣下や国民との関係において論じ，彼らに対する態度や言動の中で国王はどのような徳をいかに実践するか，という点に焦点を当てて議論を展開している。これはつまり，バレラの倫理的徳の議論の根底にあるのが，国王は自らを取り巻く人間関係においてどう振舞うべきか，という極めて人間的な現実の問題に対する興味であったことを示唆している。この倫理的徳の実践は，人文主義者たちが最も関心をもって追求した，「人間の善」の根幹に触れる問題であった。

3.2.2. 学問

徳と合わせて国王に必要なものとして，バレラは学問も強調している。15 世紀に人文主義の流入とともに貴族騎士階級に起こった学問や文化活動に対する意識変化については第一章で触れたが，バレラも勉学の必要性を認

[36] *Ibid.*, p. 189.

識していたようである。国王の学問に対する姿勢は国全体の繁栄を左右するとして自覚を促している。

(...) 法律が何たるかを知らぬ者が公正に生きられるはずがありません。また己を制御できぬ者が，習慣や状況の異なる大勢の人々を治め統べることなどできるはずがないのです。(...) 偉業を成し遂げた昔の君主たちは学問に打ち込み，そして学識豊かな師のもとで努力したものでした[37]。

国王自身が学問の修養に努めるだけでなく，学者や知識人を保護することによって国全体に学問を育成することがいかに重要であるかを，七部法典，ボエティウス，アリストテレス，聖イシドルスを論拠に引いて説く。また実際に文武両道を実践したモデルとしてアルフォンソ十世賢王，カエサル，ハンガリーのシギスムンドら有名な君主たちの名を挙げているが，興味深いのはイニェゴ・ロペス・デ・メンドーサ，カスティーリャのフアン二世やアラゴンのアルフォンソ王など，フェルナンド王子にとって極めて身近な人々をも例としてあげている点である。

今日輝かしい記憶に残る優秀な君主たちの中でも，殿下の伯父様方に当たられる，カスティーリャのフアン二世国王様やアラゴンのアルフォンソ国王様は，道徳哲学やラテン語，そして雄弁術や詩などを熱心に学ばれました。かつそれゆえに戦闘行為を放棄するということはなく，果敢に厳しく取り組まれたことは万人に知られています[38]。

さらに，記憶にも眩い，かの高貴なる騎士サンティリャーナ侯爵イニェゴ・ロペス・デ・メンドーサ様のお言葉は真実をついております。曰く，「学問は騎士の手にある槍を鈍らせるものではない」と。戦士としてまた騎士として堅実かつ優秀でいらした侯爵は，皆

---

[37] *Ibid.*, p. 181.

[38] *Ibid.*, p. 182.

の目に明らかなように，武道によって文道を諦めることもなければ，文道によって武道を捨てることもありませんでした[39]。（括弧筆者）

マルケス・デ・サンティリャーナの通称で知られる有力貴族メンドーサ（1398-1458）は，第一章において触れたように，15 世紀前半のカスティーリャ最初の人文主義世代を代表する一人である[40]。彼のほぼ次世代にあたるバレラは，古典文学の収集に熱心でイタリア人人文主義者や知識人との盛んな交流で知られたサンティリャーナ侯爵を新しい時代の騎士の象徴であるかのように扱っている。学問に従事することは騎士にとって不要どころが有害であるとする中世の騎士世界の因習を一掃しようとするバレラの意気込みが覗われる部分である。

では実際に何をどのように学べばよいのか。この点については，アロンソ・オルティスやアントニオ・デ・ネブリハら同世紀の他の君主教育書の著者と異なり，バレラは具体的な学習計画や教育内容を提示していない。唯一具体的な指示と受け取れるのは，歴史を学ぶことの奨めである。

国王は絶えず年代記や過去の高い身分の人々の歴史を，それが善人のものであれ悪人のものであれ，読まれるのがよろしいでしょう。というのは，悪人の卑劣な行為や刑罰の話は，国王を似た様な行為から遠ざけ引き離してくれますし，善人の栄光や名誉や褒賞の話は，彼らを真似て彼らのようになりたいという願望をもたらすからです[41]。

---

[39] *Ibid.*, p. 181.

[40] 一方で，少数ではあるが研究者の中にはマルケス・デ・サンティリャーナのスペイン・ルネサンスへの貢献の歴史的過大評価を批判する見方もある。彼にラテン語の知識が欠如していたことがその主な論拠であるが，そのような批判的見解を，R. Manrique は「ばかげた意見」と一蹴している。RICO MANRIQUE, F.: "Príncipes y humanistas en los comienzos del Renacimiento español", en VALDEÓN BARUQUE, J. (ed.), *Arte y cultura en la época de Isabel la Católica* (Valladolid: 2003), p. 329.

[41] VALERA: *op. cit.*, p. 186.

知られるとおり，歴史学は人文主義者が標榜したフマニタス研究を構成する一分野である[42]。中世の騎士教育でも，過去の武人の武勇伝や武勲詩を読むことは推奨されていた[43]。しかし人文主義者たちは単なる過去の英雄の模倣とは異なる目的で，歴史を教育に取り入れることを奨めたのである。ピエール・パオロ・ヴェルジェーリオ (1370-1449) の「歴史は，我々の祖先の残した善例や悪例を我々に語り伝え，これから我々が取るべき道を教えてくれる」[44]という言葉に見られるように，彼らは未来への建設的観点から歴史学習の重要性を唱えていた。バレラの歴史学習に関する記述は手短に終わっていて，彼の歴史学習に対する認識をヴェルジェーリオのそれと同一視するには判断材料が不十分である。しかし，バレラ自身が『小年代記』*Crónica abreviada* o *Valeriana*，『カトリック両王時代編年史』*Crónicas de los Reyes Católicos* そして『種々の偉業に関する覚書』*Memorial de diversas hazañas* など年代記の編者であったことと，本著を通して証明している彼の歴史的知識の豊かさとを考え合わせると，歴史学に対してとりわけ深い認識を抱いていたことは認めてよいであろう。

人文主義的教育思想と共通の特徴を表す一方で，他方バレラは保守的な面も見せている。例えば，レクリエーション的活動に対する否定的価値観である。

---

[42] ルネサンス期の人文主義者は人間性を高めるために必要な教育として，文法，詩，道徳哲学，修辞，歴史の五つの学問を重視した。これらはフマニタス研究 studia humanitatis と呼ばれる。Cf. KRISTELLER, P. O.: *El pensamiento renacentista y sus fuentes* (México D. F.: 1982), pp. 40-51.

[43] DELGADO: *op. cit.*, t. I., pp. 506-507.

[44] VERGERIO, P. P.: *De ingenuis moribus et liberalibus adulescientiae studiis*, en *Humanist educational treatises*, edited and translated by W. KALLENDORF, C. (London: 2002), p. 48. 同著は 1400 年の初めに書かれ，パドヴァの君主のひとりウベルティーノ・ダ・カッラーラに捧げられた。その後，ヨーロッパ各地で 18 世紀まで繰り返し印刷され，スペインでも 1481 年にバルセロナで出版されている。E. Garin は「自由な学習・研究をはじめて体系的に論じた」著と評し，ルネサンス期全体を通じて同著が教育論に及ぼした影響の大きさを指摘している。GARIN, E.: *La educación en Europa, 1400-1600* (Barcelona: 1987), p. 110. 現代語版としては，上記の W. KALLENDORF によるラテン語と英語の対訳が出ている。

国王は，狩猟や乗馬や遊戯や音楽にあまり夢中になられない方がよろしいでしょう。というのは，これらのことに熱心な君主は，なぜにこの地に神によって地位を与えられたのか，その務めの目的を忘れてしまうでありましょうから[45]。

遊戯やスポーツなどレクリエーション的活動の意義の見直しは，人文主義の思潮の中で起こった動きの一つである。精神に限らず身体の健全にも関心を払ったこと，そして人間は人間との触れ合いの中でこそ成長するものであると考えたことから，人文主義教育者たちは遊戯やスポーツの意義を認めていた[46]。一方，音楽は，政治との類似性から実用的価値が認められ，15世紀の宮廷人の間で，精神的癒しを目的とする単なる娯楽から「教養ある自由な人間が身に付けるべき高尚な学芸」へと地位を確立しつつあった[47]。そのような状況を考慮すると，バレラの態度は時代に逆行するかのように見える。しかし，バレラがこの種の活動の中でもあえて狩猟と乗馬と音楽の三つを挙げていること，そしてそれらがもたらし得る弊害ばかりにこだわっていることに着目すると，まさにそれらの活動を非常に好んだカスティーリャ前国王エンリケ四世（1425-1474）とロドリーゴ・サンチェス・デ・アレバロが同王のために執筆した『君主の苑』*Vergel de los príncipes*[48] が想起される。

---

[45] VALERA: *op. cit.*, p. 186.

[46] 先述のヴェルジェーリオも "De otio et vacatione" と題した一章を設け，数ページにわたって論じている。そこではプルタルコスの *Vita Lycurgi* を引き，狩猟，釣り，乗馬，散歩等を奨励している。VERGERIO: *op. cit.*, p. 84.

[47] 音楽と政治的徳の関連性の主張は，アリストテレスの『政治学』第八巻第五章から第七章を論拠としている。Cf. ARISTÓTELES: *Política*, 1339a 11-1342b 34. María José Vega は，ルネサンス期の宮廷における余暇の過ごし方としての音楽と詩の普及と，そこに見られるアリストテレス理論の影響をテーマに興味深い論文を発表している。 VEGA, M. J.: "Poesía y música en el Quinientos: la fantasía aristocrática", *Res publica Litterarum*, 2006-3, pp. 1-19.

[48] アレバロは，同著で 武芸 guerra, 狩 caza, 音楽 música の三つを王族貴族が行うに相応しい，崇高で有益な活動としてを挙げ，各活動が心身両面にもたらす利点を 12 ずつ論じている。同著の文献データは本稿 p. 8，註 20 を参照のこと。

エンリケ四世のこれらの活動への執心は宮廷で有名であったから，バレラはあえて自著の中で戒めの態度をとったとも推測できる。

3.3. 暴君（tirano）の概念

一通り理想の国王について述べた後に導入されるテーマが暴君である。完璧な国王と正反対の対象を対置させることで，理想の国王像を一層際立たせようとする著者の意図が覗われる。

そもそも暴君とは何なのかという問題がまず提起され，「国王対暴君」という対極図のもと，相反する特徴を七組列挙することによって回答としている。

> 聖トマスが前述の著[49]に，そしてセネカが『寛容について』第二巻に，ローマのエジディオの要約の第三に，そしてアリストテレスが『政治学』第三巻と第五巻にそれぞれ述べているところによると，国王と暴君の違いは次のようである。国王は共和国を防衛するために武器を持ち，暴君は攻撃するためにそれを持つ。国王は家臣の利益を追求し，暴君は己のそれを追求する。国王は寛大で徳高く賢明な善人を愛し，暴君は彼らを忌み嫌い冷淡に扱う。国王は家臣の中に団結と一致を求め，暴君は対立と不和を求める。国王は偉大なものや古いものを維持し増加させ，暴君は減少させ破壊する。国王は家臣を豊かにし，暴君は貧乏にし疲弊させる。国王は法律によって治め，暴君は己の意思によって治める[50]。

前章で国王にとって最重要とされていた二つの徳（正義と寛容さ）が，ここでも暴君のコンセプトを表すキーワードになっていることが分かる。理論的に定義づけた後に続けて，歴史上の有名な暴君として，古代ローマ軍人スキピオ・アフリカヌスの息子，執政官クィントゥス・ファビウスの息子，アッシリア王アッシュールバニパル，ソロモン王の息子レハブアム，西ゴー

---

[49] この箇所以前に聖トマスの引用は多数あるものの，著作名は明記されていない。第一章に記されている *Regimiento de los príncipes* が唯一の著名のため，「前述の著」とはおそらく同著を指すものと思われる。VALERA: *op. cit.*, p. 174.

[50] *Ibid.*, p. 188.

トのエヒカ王とその息子ヴィティサをもって実例を示し，さらにネロ帝のエピソードを引いて「暴君を王位に戴く国の行く末は滅亡しかない」と断言する。その理由の一つは，暴君の時代に善人は少なくなるからである。なぜなら「国の模範である国王に国中は従うからである」[51]。もう一つの理由は，国王の犯した罪悪に対する罰は一般市民のそれより重いからである。

> (...) 君主の犯した罪は，その量において他の人間と同じであっても，質においてははるかに深刻なのです。なぜなら，君主の過ちは，家臣たちに過ちを犯す原因と機会と厚かましさを与えてしまうからです[52]。

国王という任務が神から託された「公務」である以上，その地位にある者が犯した罪悪の見返りは彼個人のレベルにはとどまらず，国全体に及ぶのである。バレラは，再び国王と神との関係を持ち出して暴君に陥らないよう戒める。このように，バレラの暴君の基準は，完璧な国王のそれを論じたときと同様，政治や行政手腕など実務的なことよりも，人間性や振る舞いにおける徳の欠如に焦点が当てられている点に注意すべきであろう。

3.4. 徳の定義

完璧な国王像の議論ですでに論じたにもかかわらず，最後の二章では再び徳がテーマとなる。しかし冒頭句に「一般的に言って徳とは何か」とあるように，ここでは国王という立場に限らず，全ての人間にとって徳とは何かという一般的視点から論じる構えを見せている。

議論の展開方法としては，古今の著名な哲学者やカトリック教会教父[53]によるそれぞれの徳の定義を提示した後で，「（これらの様々な定義を見ると，徳は）様々に異なるもののように見えるが，実際のところ求める目的は一つである。すなわち，悪徳や罪から我々を引き離し，神の下へそして我々の清

---

[51] *Ibid.*, p. 183.

[52] *Loc. cit.*

[53] パナイティオス，アリストテレス，ラクタンティウス，聖アウグスティヌス，聖グレゴリウスらの定義が叙述されている。*Ibid.*, p. 190.

浄なる意識へと近づけることである」[54]とまとめ，続けてローマのエジディオ[55]の区分による徳の四つのたて分け（枢要徳，対神徳，知性的徳，身体的徳）を示し（下図参照），さらにそれぞれに属する徳の概念についてセネカ，マクロビウス，聖アウグスティヌスらによる定義を列挙する。

・枢要徳 --- 賢慮，正義，勇気，節制。
・対神徳 --- 信，望，愛。
・知性的徳 --- 自然哲学，理性哲学，形而上学，数学，幾何学。もしくは知恵，学知，知性，賢慮，技術。
・身体的徳 --- 体力の修練[56]。

四つに分類されたグループのうち，バレラは特に最初の二つ（枢要徳と対神徳）に重きを置いて論じているが，その理由を以下のように述べる。

> 知性的徳については，(...) 一つとしてここで扱う理由を認められません。なぜならそれらは，悪人にも善人にも共通しうるものであり，私のここでの意図は，あらゆる君主そしてあらゆる人間をも高潔かつ善にする徳以外について述べることではないからです[57]。

---

[54] *Loc. cit.*

[55] Egidio Romano (ca. 1243-1316) イタリア出身の神学者。Gil de Roma とも呼ばれる。パリ大学にてトマス・アクィナスに学ぶ。その著『君主による統治について』*De Regimine Principum* は，中世で最初の君主教育書とされ，キリスト教世界の君主教育の思想的基盤となったとされる。Bartolomé は 16 及び 17 世紀のスペインの君主教育書における同著の影響の大きさを指摘している。DELGADO: *op. cit.*, t. II., pp. 290-291. 『君主による統治について』の概要とスペインにおける影響については，GALINO CARRILLO, M. A.: *Los tratados sobre educación de príncipes. Siglos XVI y XVII* (Madrid: 1948), pp. 31-35 を参照。

[56] VALERA: *op. cit.*, pp. 191-195. 徳の各概念の名称については，日本語に訳す際，出来る限り原語の字義に忠実であるよう努めた。しかし，バレラが列挙するように，それぞれの概念について古今の思想家により異なる定義や見解が存在するため，日本語訳にも様々な訳語があって然るべきであることを補足しておく。

[57] *Ibid.*, p. 193.

上述のバレラの言葉はどのように解釈できるであろうか。単純に，国王に必要な資質の中で知性的徳を倫理的徳より軽んじていると捉えてよいのだろうか。「知性的徳は善人にも悪人にも具わり得る」というのは，知性的徳自体を軽んじているわけではあるまい。むしろ，知性的徳を具えていてもそれらをどのように発揮するか，つまり善の方向にか悪の方向にかは，その人の倫理性次第である。だから，知性的徳を具えているというだけでは，「徳の高い善人」とは言えない。倫理的徳と信仰を伴わなければ意味がない，とバレラは考えたと解釈した方がよいのではないだろうか。15 世紀当時，倫理的徳と知性的徳は人間の最終目的の問題と結びつき，イタリアでもスペインでも盛んに議論された概念であった。善なる人間の完成に続く道としての二種の徳の問題をバレラも意識していたのであろう。ここに徳の概念に対する彼なりの回答を見出すことが出来る。

バレラの君主教育書は，完璧な国王（rey perfecto）の概念を暴君のそれと対比させて追求することで，理想の国王像を描き出すという構成になっている。その完璧な国王の具えるべき要素として一貫して議論の中心を占めるのは徳，それも人間性を問う倫理的徳であり，政治家もしくは統治者としての手腕を問うような実務的能力には殆ど関心が払われていない。国王は社会的にどのような立場にあり，その立場で他者に対してどう振舞うか，という実践的視点から投げかけられる問いのもとに，バレラの君主教育論は展開されている。これらの点を総合して言えるのは，バレラが完璧な国王像の題目の下に論じているのは，実は「理想の国王」ではなく，実社会に生きる「善なる人間の完成」であるということである。このことを意識して読むとき，我々はバレラの以下の平板な言葉の中に，彼の君主教育に対する基本的態度を見出すであろう。

> (...) 国王は領地の人間の誰よりもすべての徳においてはるかに秀でておられなければならないのです[58]。

> あらゆる善の源である聖霊に，殿下がすべての徳において賢明で思慮深く善良であられますよう，つつしんでお願い申し上げつつ，

[58] *Ibid.*, p. 188.

ここに拙著を結ばせて頂きます。(...) この国は長らく混乱と不和に苦しんでまいりました。今こそ殿下の御手をもって，平和と和合と法的正義の中で改革されますように，長きに亘って，殿下が永遠なる栄光と賞賛の記憶にふさわしくあられますように[59]。

完璧な国王が具えるべき徳は，あらゆる人間が人間として完成するために育成し習得するべき徳と本質的には何ら変わりはない。ただ社会的立場というフィルターを通してみると，国王はこれらの徳を個人としても公人としても，どの国民よりも深め実践することを要求される地位にいるということである。完璧な国王となるためにまず必要なのは，社会に生きる一人の人間としての完成への努力であるとバレラの教育書は訴えている。

おわりに

本稿では，15 世紀カスティーリャの君主教育書の中の一著，モセン・ディエゴ・デ・バレラの『学識』を取り上げ，彼の君主教育論について考察した。バレラの教育思想は，人間教育の必要性への確信，道徳哲学への深い傾倒，そして高い社会意識に基づいた実践的生重視の態度を基盤としていることが見出された。つまりバレラは，人間の完成という普遍的テーマを君主教育書という枠の中で扱ったわけである。このことは，15 世紀中後期のカスティーリャ人バレラの中に，イタリア初期人文主義者たちが追求した新しい時代の教育論を成す基本的理念に共通する思考が存在したことを示している。

しかしその一方，君主教育という少なからず政治的意義を持つ（持つべき）ジャンルの作品であることを鑑みると，主軸をあくまで人間的道徳においた本著は，Camillo がマキャベリと比較して指摘するように，「最後まで政治と倫理を切り離さないことによって 15 世紀人文主義思想の母数内にとどまった」バレラの思想の近代性の限界を示唆しているとも言える[60]。

---

[59] *Ibid.*, p. 196.

[60] Camillo は，バレラの非近代性に対抗させて「マキャベリは倫理と政治を分割して論じた『君主論』をもって，今日我々が政治学と呼ぶ，新しい学問の分野を切り開くことになった。」と評している。CAMILLO: *op. cit.*, p. 61.

本稿では考察が及ばなかったが，バレラが自らの理論を支える論拠として引用している過去の著作家や著作は分析するに値する要素である。全篇を通してギリシャ・ローマの古典や哲学者から中世キリスト教教父までバレラの引用元は幅広い。これらの分析は，15 世紀当時の知識人の思考や知識の傾向を探り出すための一助になりうるかと思われる。この点については次回の研究の課題としたい。

参考文献

BECEIRO PITA, Isabel: "Educación y cultura en la nobleza (siglos XIII-XV)", *Anuario de estudios medievales 21*, CSIC, Barcelona, 1991, pp. 571-590.

BERTINI, Giovanni Maria: "Un diálogo humanístico sobre la educación del príncipe Don Juan", en Congreso de Historia de la Corona de Aragón, *Fernando el Católico y la Cultura de su tiempo*, Institución Fernando el Católico-Diputación Provincial, Zaragoza, 1961, pp. 37-62. [Reproducido en su edición de *Alonso Ortiz, Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos*, Porrúa, Madrid, 1983, pp. 1-40.]

CAMILLO, Ottavio di: *Humanismo castellano del siglo XV*, trad. por Manuel Loris, Fernando Torres, Valencia, 1976.

_____: "Las teorías de la nobleza en el pensamiento ético de Diego de Valera", en RODORÍGUEZ PUÉRTOLAS, J., *Mosén Diego de Valera y su tiempo*, Instituto Juan de Valdés, Cuenca, 1996, pp. 48-81.

CARRIAZO Y ARROQUIA, Juan de Mata: "Lecciones al Rey Católico: el *Doctrinal de príncipes* de Mosén Diego de Valera", *Anales de la Universidad Hispalense*, XVI, 1955, pp. 73-131.

DELGADO CRIADO, Buenaventura (coord.): *Historia de la educación en España y América*, Fundación Santa María, Morata, Madrid, t. I. 1992; t. II, 1993.

DÍEZ BORQUE, José María: "Ideas de Mosén Diego de Valera sobre la monarquía", en RODORÍGUEZ PUÉRTOLAS, *op. cit.*, pp. 84-114.

ESTEBAN, León: *La educación en el renacimiento*, Síntesis, Madrid, 2002.

GALINO CARRILLO, María Ángeles: *Los tratados sobre educación de príncipes. Siglos XVI y XVII*, CSIC, Madrid, 1948.

GARIN, Eugenio: *La educación en Europa, 1400-1600*, Crítica, Barcelona, 1987.

GONZÁLEZ ROLÁN, T., BAÑOS BAÑOS, J. M. y SAQUERO SUÁREZ-SOMONTE, P.: *El humanismo cristiano en la Corte de los Reyes Católicos: Las Consolatorias latinas a la muerte del Príncipe Juan*, Ediciones Clásicas, Madrid, 2006.

KRISTELLER, Paul Oskar: *El pensamiento renacentista y sus fuentes*, 1ª ed. en español, trad. por Federico Patán López, Fondo de Cultura Económica, México D. F., 1982.

MARAVALL, José Antonio: "El prerrenacimiento del siglo XV", en GARCÍA DE LA CONCHA, V. (dir.), *Nebrija y la introducción del renacimiento en España*, Actas de la III Academia Literaria Renacentista, Universidad de Salamanca, Salamanca, 1983, pp. 17-36.

NADER, Helen: *Los Mendoza y el renacimiento español*, trad. por Jesús Valiente Malla, Institución Provincial de Cultura "Marqués de Santillana", Gráficas Dehon, 1986.

NEBRIJA, Antonio de: *La educación de los hijos.* Estudio, edición, traducción y notas por León Esteban y Laureano Robles, Universidad de Valencia, Valencia, 1981.

PENNA, Mario (ed.): *Prosistas castellanos del siglo* XV, vol. I. Edición y estudio preliminar de M. PENNA, I, BAE, CXVI, Atlas, Madrid, 1959.

RICO MANRIQUE, Francisco: "Príncipes y humanistas en los comienzos del Renacimiento español", en VALDEÓN BARUQUE, Julio (ed.), *Arte y cultura en la época de Isabel la Católica*, Instituto Universitario de Historia Simancas y Ámbito, Valladolid, 2003, pp. 323-338.

SÁNCHEZ DE ARÉVALO, Rodrigo: *Vergel de los príncipes*, en PENNA (ed.), *op. cit.*, pp. 311-341.

VALERA, Mosén Diego de: *Doctrinal de príncipes*, en PENNA (ed.), *op. cit.*, pp. 173-202.

VERGERIO, Pier Paolo: *De ingenuis moribus et liberalibus adulescientiae studiis*, en *Humanist educational treatises*, edited and translated by Craig W. Kallendorf, The I Tatti Renaissance Library, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts London, 2002, pp. 2-91.

スペイン語コーパスを利用した語彙指導に関する一試案

二宗　美紀

1. はじめに

近年、コンピュータの進化・普及と共に、英語の言語学の世界には、言語の振る舞いを体系的に捉えようと考える研究者が現れた。彼らはコーパスという大量の言語資料を構築し、情報処理の様々な手法を用いて、分析や研究を行っている。その結果、頻度の高い単語の特定や単語と単語の結びつきを調べ、コロケーションを特定することが可能となった。その後、コーパスから得られた研究成果は辞書や文法書へ大きな影響を与え、今日では英語の辞書の編纂にコーパスは欠かせない存在として定着している。英語の世界で「コーパス言語学」という語が定着し始めたころ、スペイン語の世界においても、スペイン王立アカデミーやスペイン語の研究者が、スペイン語コーパス構築を計画し、いくつかのコーパスが公開され現在に至っている。

このようにスペイン語のコーパスが利用可能となる一方で、日本のスペイン語教育や授業で利用できる具体的な活用法に関する資料が非常に乏しいことが問題として挙げられる。したがって本稿では、語彙指導に重点を置き、コーパスを利用した活動の一提案を試みる。まず、英語コーパス言語学にて確立されたコーパス言語学やコーパスに関する定義を確認し、英語コーパス言語学の成果をまとめる。次に、本研究で利用する既存のスペイン語コーパスの概要および機能について述べ、スペイン語初級レベルの語彙指導においていかにコーパスを利用するか、授業内での具体的な活動を模索する。

2. コーパス言語学

2.1. コーパス言語学とは何か

まず、コーパス言語学の定義について検討する。齊藤他（2005）によると、コーパス言語学とは「コンピュータで処理可能な電子コーパスを検索して言語分析・記述を行う言語学一般」と定義されている。すなわち、コンピュータを利用し、大量の言語資料の中から任意の単語がどの程度の頻度で出現するのか、またその任意の単語の前後に頻

繁に出現する単語を特定する作業をコンピュータのプログラムを導入することによって瞬時に行い、「語の振る舞い」を研究する学問であると言える。その中で、研究対象言語を英語とした「英語コーパス言語学」は、コーパス言語学の先駆的存在である。

Leech（1992）は、コーパス言語学の特徴を下記の4点にまとめている。

1) 言語能力よりも言語運用に中心をおく
2) 言語の普遍的特性の解明よりも、個別言語の言語記述に中心をおく
3) 質的な言語モデルのみならず、数量的な言語モデルにも中心をおく
4) 言語研究における合理主義的な立場よりも、より一層経験主義的な立場に中心をおく

英語の言語学の歴史には経験主義と合理主義という2つの大きな流れがあるが、Leech（1992）が示したこれらの特徴からも分かるように、コーパス言語学は経験主義的な立場をとっている。さらに、「生成文法のように母語話者の言語直感に依存するより、言語資料（言語運用）であるコーパスを検索して得られる言語的証拠に基づき言語記述を行う学問である。北欧など非英語国で盛んであることからもわかるように、英語の非母語話者にもハンディキャップなしに英語研究のできる言語学である」という点もコーパス言語学の特徴である。[1]

2.2. コーパスとは何か

齊藤他（2005）はコーパスを「言語分析に利用できる電子化された言語資料の集積」としている。言い換えると、書き言葉や話し言葉の中から、実例である小説、新聞、会話、などをより多く収集し、電子化を行う。このような「電子化された言語資料の集積」をコーパスと呼んでいる。コーパスの規模に関する明確な基準は存在していないが、量的な調査を行うことがある際に、コーパスの規模は大きければ大きいほどより信頼性が高くなると考えられる。[2]

また、言語の変種や社会的コンテキストや、大学での講義やビジネ

[1] 齊藤他（2005）, p. 4.
[2] cf. Sinclair (1991), p.19.

スレターのような特殊目的で使用される言語資料をコーパスとして構築したものもある。したがって、コーパスには、分析対象となる言語変種を代表しているという前提が必要である。[3] このコーパスの特性は、代表性と呼ばれる。もちろん、大規模コーパスのように、書き言葉と話し言葉を量的に調整し、言語体系を見出す研究も行われている。

2.3. コーパスの主な機能

英語コーパス研究の主要な機能として、語彙頻度表の作成、コンコーダンスラインの表示、そしてコロケーション検索という3つの機能が挙げられる。まず、語彙頻度表の作成とは、単語が出現する回数を算出する機能のことである。頻度順に並べられたものとアルファベット順に並べられたものの2種類がある。また、特定の単語、あるいは熟語の頻度を調べる機能や、総語数を算出する機能も備わっており、得られる結果は語彙研究だけではなくコーパスの語彙的特徴を知る上で非常に有効であることが分かっている。

次に、コンコーダンスラインとは、KWIC コンコーダンスとも呼ばれ、特定の単語を検索する際に、その単語を中心にした文脈が画面に出力される機能のことである。[4] 通常、画面に表示されたキーワードの左右の語やその範囲を指定し、アルファベット順に並び替え、キーワードの前後に出現する語の傾向をパターンとして探る機能も備えている。

最後に、コロケーション検索とは、KWIC コンコーダンス検索で行った並び替えの結果から、キーワードの左側や右側で頻繁に出現する単語の共起関係を調べることである。コロケーションは、Sinclair（1991）によると“the occurrence of two or more words within a short space of each other in a text (p. 170)”と定義されている。このことからも分かるように、コロケーションは必ず隣接した連語になっているとは限らないことも理解しておくべき点である。

---

[3] 齊藤他 (2005), p. 22.

[4] key word in context の頭字語。電子化されたコンコーダンスの一種で、キーワードを中心として左右に数語の文脈を配置し、一行に表示する形式を指す。

3. 英語のコーパスとスペイン語のコーパス

3.1. 英語コーパス言語学の発展と成果

中村（2004）はコーパス言語学の発展を 2 期に分けている。第 1 期は、1959 年から 1990 年代初頭までの間を、そして第 2 期は 1990 年代以降にコーパスに基づく研究が行われ、それと共に、さまざまな変種のコーパスや大規模コーパスが編纂された時期を指している。

はじめに、第 1 期では、Quirk を中心に Survey of English Usage Project が始まり、1964 年には世界で初めて Brown Corpus が公開された。[5] その後、そのイギリス英語版を作成するべく、LOB Corpus が構築され、[6] 1977 年にはその編纂に携わった Leech らが ICAME を設立した。[7] 1980 年代に入ると、辞書の編纂を目的とする大型コーパス構築プロジェクトが始まり、[8] 世界で初めてコーパスに依拠した英語学習辞書（COBUILD[1]）が出版された。[9] その一方で、自動品詞標識付けのプログラムが開発され、より精密な言語分析が可能となった。さらに、Aarts & Mejis（1984）が出版され Corpus Linguistics という学術用語が定着したのもこの時期のことだった。

第 2 期に入ると、COBUILD は規模を拡大し、出版社、大学等 5 つの機関で構成されるコンソーシアムが British National Corpus（BNC）の編纂に取り掛かる。[10] BNC は 1994 年に完成し公開されたが、日本で BNC が利用できるようになったのは、2000 年 10 月に

---

[5] Brown Corpus は 1961 年の出版物から 2000 語のテキストを 500 集め、アメリカ英語約 100 万語を収集したもの。（cf. http://helmer.aksis.uib.no/icame.html）

[6] 1961 年のイギリス英語の出版物が集積されたコーパスである。Brown Corpus の構成に合わせて編纂されたコーパスである。（cf. http://helmer.aksis.uib.no/icame.html）

[7] International Computer Archive of Modern and Medieval English の頭字語。英語コーパスの情報センターの役割を果たしてきた。年次大会開催、ICAME Journal 刊行、メーリングリスト CORPORA の運営を行い、ICAME Corpus Collection on CD-ROM(1991,1999)を配布してきた。

[8] COBUILD(Collins Birmingham University International Language Database)という Birmingham 大学と Collins の共同プロジェクトで編纂された辞書。

[9] Bank of English (BoE)と呼ばれるコーパスに依拠して編纂された。当時は 2,000 万語の資料に基づき編纂された。現在では、資料が追加され 5 億語を超える規模にまで至る。5,700 万語を Wordbanks*Online* にて使用可能。

[10] 1 億語のイギリス英語のコーパス。資料は大半が 1990 年代初期のもので、書き言葉約 9,000 万語、話し言葉が約 1,000 万語という構成で編纂された。（cf. http://www.natcorp.ox.ac.uk/）

BNC World Editionが公開されてからのことであった。また、1999年には、Linguistic Data Consortium（LDC）を拠点に[11] Reppenを中心としたAmerican National Corpus(ANC)の編纂が始まるなど、さまざまな目的に応じたコーパスの編纂が開始された。[12]

1995年には、COBUILD第2版、Longman Dictionary of Contempo-
rary English第3版、Oxford Advanced Learner's Dictionary第5版などコーパスに基づく英語学習辞典が4種類出版された。この頃から、コーパスは辞書の編纂に欠かせない存在へとなったのである。

英語学習辞典へ貢献する一方で、1990年代後半以降には、McEnery & Wilson（1996）、Kennedy（1998）、Biber, et al.（1998）、齊藤他編（1998）、Meyer（2002）等のコーパス言語学の教科書が次々に出版され、大学や大学院レベルでのコーパスを利用した言語研究に関する教育が本格的に始まり、現在に至っている。

3.2. スペイン語コーパスについて

スペインでは、1995年にスペイン王立アカデミーがCorpus de Referencia del Español Actual（CREA）編纂の計画を公表し、1975年以降のスペイン語約1億語を集積したコーパスを1997年に初めて公開した。また、計画の第2期として2000年より2億語以上を集積したコーパスを公開し、現在に至っている。その後、2002年8月には、米国のMark Daviesが13世紀から20世紀までのスペイン語を収集したCorpus del Españolの編纂を終え、インターネット上で公開した。さらに、このCorpus del Españolは、2007年12月に検索画面のアップグレードがなされ、機能の充実を拡大するなど、スペイン語コーパスも発展の過程を歩み始めたことが分かる。これらのコーパスの概要をまとめると表1のようになる。

---

[11] 言語資料やツールに関する資料、規格を作成・共有することでの言語教育に関連した研究や技術開発をサポートすることを目的とする団体。
[12] BNCに匹敵するアメリカ英語1億語のコーパスを構築するプロジェクト。LDCのメンバーは1,000万語が利用可能となっている。2008年秋には一般公開される予定。（cf. http://wave.ldc.upenn.edu/）

表１．主要なスペイン語コーパスの概要

コーパス	総語数	年代	スペインのスペイン語とラテンアメリカのスペイン語の割合	
			スペイン	ラテンアメリカ
CREA	1億語以上	1975年～1999年	50%	50%
Corpus del Español	約2億語	1200年～1999年	非公開	非公開

次に、授業でのより有効な活動を行うためにコーパスの選定を行う。表２は両コーパスにおける検索機能についてまとめたものである。

表２．主要なスペイン語コーパスの検索機能

コーパス		CREA	Corpus del Español
コンコーダンスラインの表示		○	○
機能	コロケーションの表示	×	○
	単語の検索結果の表示	○	○
	検索結果の並び替え	×	×
	コンテキストの表示	○	×
	レンマ検索	×	○
	2つの検索結果の同時表示	×	○
	類義語検索	×	○
	出現頻度表	×	×

CREA は言語資料として大規模ではあるが、Corpus del Español と比較すると機能の面では充実していないことが分かる。また、重要なことは、双方とも「コンコーダンスラインの表示」という機能は持つが、実際にはすべてのコンコーダンスラインを表示することができ

ない。CREAの場合は、検索結果が2,000例以上の場合はコンコーダンスラインが一行も表示されず、もう一方のCorpus del Españolの場合においては、出現頻度の高い結果については検索結果の中からランダムに一部のみをコンコーダンスラインとして表示するに留まっている。出現頻度の高い語彙を学習することは重要であるため、言語教育にコーパスを活用する場合、コンコーダンスラインの一部を表示するCorpus del Españolを利用するのが有効だと考えられる。

4. スペイン語授業におけるCorpus del Españolを利用した語彙指導に関する試案

4.1. 語句検索機能を用いた語彙指導例

初級レベルの学習者を対象に行う授業で、語彙の定着は不可欠な要素である。ここでは、Corpus del Españolを利用して語彙を増やす活動の提案を行う。その問題例と検索結果を示すと次のようになる。

練習1．[?aro]のクエスチョンマークに入る1文字を補って単語を作りましょう。

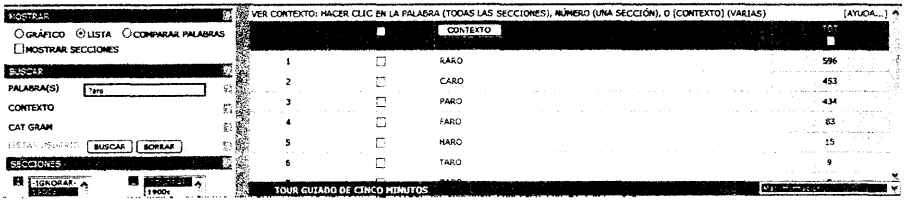


図1．[?aro]の検索結果の一部

練習2．[*ar]のアステリスクに入る1文字以上を補って単語を作りましょう。

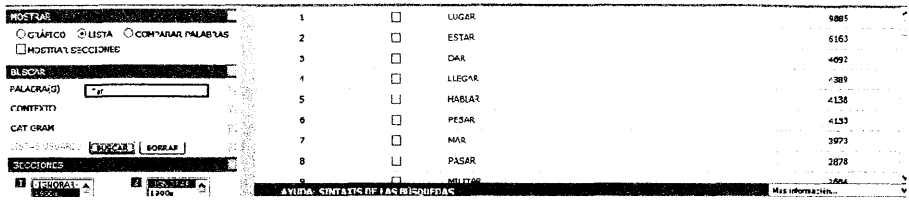


図２．[*ar]の検索結果の一部

Corpus del Español の検索の欄で[?]はアルファベット１文字を補うことを示し、[*]は０文字以上アルファベットを補うことを示す。[13] このような検索の活動を行う際に共通して重要なのは、あらかじめ、学習者が予測を立てることである。なぜなら、予測と検索結果を照らし合わせることで、語彙のより高い定着を図ることが期待されるからである。練習２では、例えば、[—ar]で終わる動詞をいくつ書き出すことができるかをペアで競わせることも可能である。予測を立てる際に辞書を引く活動を取り入れると、学習者がこれまで知らなかった単語に出会い、そして意味の確認も行うことができるため、積極的に語彙の定着を図ることが期待される。

4.2. 類義語検索機能を用いた語彙指導例

スペイン語の語彙をある程度学び、語彙力がついてきた学習者には、類義語検索を活動として取り入れ、効果的に語彙を増やすことが可能であると考えられる。練習３は類義語検索の問題例である。その検索結果を図３に示した。

練習３．動詞 hablar の類義語をいくつ知っていますか。できるだけ多く挙げましょう。

[13] ０回以上とは、アルファベットが補われなくても、あるいは２文字以上が補われても良いことを表している。[*]の左右がスペースで区切られている場合は、単語１語、あるいは単語がない状況を表すことができる。

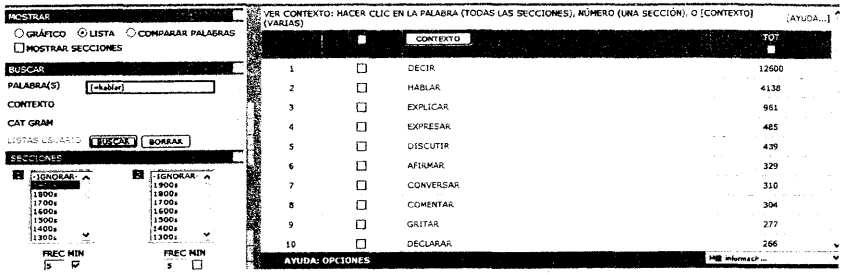


図３．動詞 hablar の類義語の検索結果の一部

現在、スペイン語の辞書では、『クラウン西和辞典』が類義語を掲載するのみで、他の辞書には同義語が掲載されていない。したがって、このようなコーパスの類義語検索機能は語彙力向上と同様に作文の際にも有効に活用されることが期待される。

4.3.コロケーション検索機能を用いた語彙指導例

Corpus del Español ではコロケーションの品詞を限定して検索を行うことができる。練習４は名詞の前後に出現する形容詞のコロケーションを調べる問題である。学習者は、単語が使用される文脈や背景を想像しながら予測を立てるので、スペイン語らしい表現を身に付ける活動として取り入れることが可能である。さらに、コロケーションの練習問題は、スペイン語検定の対策としても効果的であると考えられる。

練習４．名詞 flor につく形容詞をいくつ知っていますか。できるだけ多く挙げましょう。

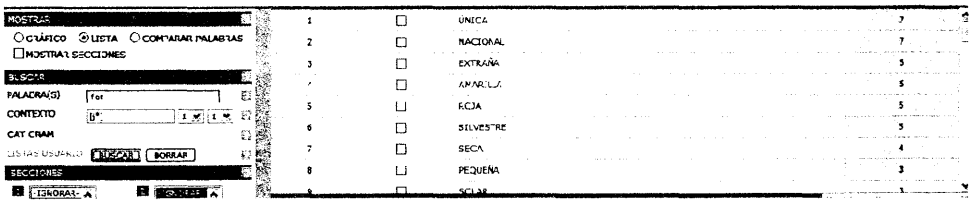


図４．名詞 flor のコロケーション（形容詞）の結果の一部

また、コーパスによる検索結果は、辞書に比べて例文を多く表示することができるため、コロケーションからある特定の語の用法パターンを見つけることが可能である。例えば、Corpus del Español を利用して動詞 tomar の後に続く名詞のコロケーションを調べると、decisión が 397 例と最も高い頻度で共起することが明らかになった。café と比べると decisión の方がより多く使用されている結果となった。動詞 tomar のレンマと decisión が後に続くコンコーダンスラインの一部を別の KWIC 形式のプログラムで表示すると図５のようになる。

コンコーダンスラインから１つのパターンを探すと、tomar +（冠詞／指示詞）+ decisión de + 不定詞、という形が多く見られた。辞書で tomar の用法を確認すると、まず白水社の『現代スペイン語辞典』

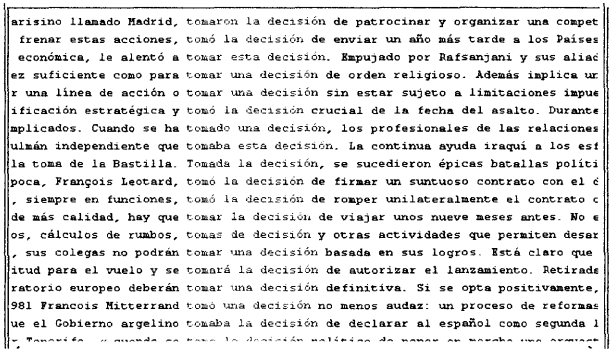

arisino llamado Madrid, tomaron la decisión de patrocinar y organizar una compet
frenar estas acciones, tomó la decisión de enviar un año más tarde a los Países
económica, le alentó a tomar esta decisión. Empujado por Rafsanjani y sus aliad
ez suficiente como para tomar una decisión de orden religioso. Además implica ur
r una línea de acción o tomar una decisión sin estar sujeto a limitaciones impue
ificación estratégica y tomó la decisión crucial de la fecha del asalto. Durante
mplicados. Cuando se ha tomado una decisión, los profesionales de las relaciones
ulmán independiente que tomaba esta decisión. La continua ayuda iraquí a los esf
la toma de la Bastilla. Tomada la decisión, se sucedieron épicas batallas políti
poca, François Leotard, tomó la decisión de firmar un suntuoso contrato con el é
, siempre en funciones, tomó la decisión de romper unilateralmente el contrato c
de más calidad, hay que tomar la decisión de viajar unos nueve meses antes. No e
os, cálculos de rumbos, tomas de decisión y otras actividades que permiten desar
, sus colegas no podrán tomar una decisión basada en sus logros. Está claro que
itud para el vuelo y se tomará la decisión de autorizar el lanzamiento. Retirada
ratorio europeo deberán tomar una decisión definitiva. Si se opta positivamente,
981 Francois Mitterrand tomó una decisión no menos audaz: un proceso de reformas
ue el Gobierno argelino tomaba la decisión de declarar al español como segunda l

図５．　動詞 tomar の後に decisión が続く例

には tomar +(冠詞／指示詞)+ decisión の用法は掲載されていない。また、小学館の『西和中辞典』第２版では、第９番目の語義として、tomar una [la] decisión と記されていたが、decisión 以降の de + 不定詞は説明されていない。三省堂の『クラウン西和辞典』には、El anciano tomó la decisión de ingresar en un asilo.という一文が例文として掲載されていたが、パターンとしての提示は見られなかった。このように、日本のスペイン語学習辞書からは、パターンとしての tomar +（冠詞／指示詞）+ decisión de + 不定詞の形は、明示されていないことが判明した。

5. おわりに

語彙の検索では、初級レベルの学習者でも楽しみながら取り組むことができ、スペイン語の綴りに親しむ助けにもなることが期待される。類義語やコロケーションの活動に関しては、単語と意味を繰り返し覚える活動とは異なり、学習者のこれまで得た語学力を刺激し、語彙力や表現を豊かにする役割を果たせるのではないだろうか。

コーパスを用いた検索は、言語事実を客観的に観察する手法として重要だということが確認できた。しかし、既存の英語コーパスの検索ソフトと比べ、既存のスペイン語コーパスには、機能の面でより充実を図る必要があり、より信頼性の高い分析結果を出すことが今後の大きな課題であると考えられる。とりわけ、頻度に関わらず検索結果すべてを画面に表示させることと、「語彙頻度表の作成」機能を付することが早急に求められている。

本稿では、コーパス言語学の定義および英語コーパス言語学の成果を概観し、スペイン語の授業でコーパスを利用する活動のいくつかについて考えてみた。今後はこうした活動の有効性を実証したい。

参考文献

Aarts, J. & W. Mejis. (eds.) (1984) *Corpus Linguistics*. Amsterdam: Rodopi.

有本 紀明他. (2001) 『西和辞典』. 改訂版. 東京: 白水社.

Bank of English (BoE): http://www.cobuild.collins.co.uk/

Biber,D., S. Conrad & R. Reppen. (1998) *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*. Cambridge: Cambridge University Press.

Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. (1999) *Longman Grammer of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education.

British National Corpus (BNC): http://www.natcorp.ox.ac.uk/

Corpus de Referencia del Español Actual (CREA): http://corpus.rae.es/creanet.html

Corpus del Español: http://www.corpusdelespanol.org/

Corpus Diacrónico del Español (CORDE): http://corpus.rae.es/cordenet.html

Davies, M. (2004) "El uso del Corpus del Español y otros corpus en la investigación de la variación actual y los cambios históricos."『スペイン文化シリーズ』. 第 11 号. 東京：上智大学イスパニア研究センター.

原 誠他. (2005) 『クラウン西和辞典』. 東京: 三省堂.

家入 葉子. (2005)『文科系ストレイシープのための研究生活ガイド』. 東京:ひつじ書房.

井上 永幸, 赤野 一郎. (2007) 『ウィズダム英和辞典』第 2 版. 東京: 三省堂.

International Computer Archive of Modern and Medieval English (ICAME): http://helmer.aksis.uib.no/icame.html

石川 保茂. (2005) 『教師の力—教室の「空気」を入れかえる—』. 京都：ミネルヴァ書房.

Kennedy, G. (1998) *An Introduction to Corpus Linguistics*. Harlow: Longman.

Linguistic Data Consortium (LDC): http://wave.ldc.upenn.edu/

McEnery, T. & A. Wilson. (1996) *Corpus Linguistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Meyer, C. F. (2002) *English Corpus Linguistics: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

宮城 昇他. (2000) 『現代スペイン語辞典』. 改訂版. 東京: 白水社.

望月 正道, 投野 由紀夫, 相沢 一美. (2003) 『英語語彙の指導マニュアル』. 東京：大修館書店.

中村 純作. (2004) 「コーパス言語学を概観する」 『英語青年』149, 11: 2-5.

太田 洋, 日臺 滋之. (2006) 『英語が使える中学生 新しい語彙指導のカタチ—学習者コーパスを活用して— 』. 東京：明治図書.

Real Academia Española: http://www.rae.es/

Rubio, C.他. (2004) 『クラウン和西辞典』. 東京: 三省堂.

齊藤 俊雄, 中村 純作, 赤野 一郎. (2005) 『英語コーパス言語学—基礎と実践— 改訂新版』. 東京: 研究社.

Sinclair, J. (1991) *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford: Oxford University Press.
高垣 敏博.(監修). (2007) 『小学館西和中辞典』. 第 2 版. 東京: 小学館.

ロドルフォ・カント・サエンス
『エネケンからマキラドラへ　ユカタンの工業政策　1984－2001』より

吉野　達也

[訳者解説]

本稿ではユカタン州立自治大学（La Universidad Autónoma de Yucatán）の経済学部教授であるロドルフォ・カント・サエンス博士（Dr. Rodolfo Canto Sáenz）が2001年に発表した『エネケンからマキラドラへ　ユカタンの工業政策 1984－2001』（*Del henequén a las maquiladoras. La política industrial en Yucatán 1984-2001*）のエネケン産業の全盛期から現在の自由経済主義期に向かう推移が扱われた55頁～68頁の対訳を試みた。

エネケンとは中米原産の竜舌蘭の一種で頑丈な葉脈の内部から良質な繊維が抽出できる。メキシコ・ユカタン州においては19世紀前半から商品作物としてエネケンが栽培され海外に輸出されていた。そんな折、1878年に米国の大手農機具メーカー、マコーミック社（McCormick）がユカタン州のエネケン繊維を自社製品製造の為に大量購入するようになって以来、ユカタン州では空前のエネケン・ブームが起こる。しかしエネケン産業も第一次大戦が終了する1918年以降、国際的需要が伸び悩みや海外産の自然繊維がエネケンを肉薄、さらに化学繊維の登場によって深刻な危機に直面する。

今回対訳を試みた部分は、主に20世紀初期から後期にかけてのユカタン州におけるメキシコ連邦政府及びユカタン州政府のエネケン産業に対する政策が扱われており、エネケン産業が今日に至るまでどう変移してきたかを理解できる内容になっている。よってこの文献はエネケン産業とユカタン経済の両通史を理解する上で有益な資料の一つであると言える。

エネケンの時代

“エネケン”と“ユカタン”。ユカタン地域を訪れたり、ユカタン地域の文献を読んだりすると双方は意識的に結びつけようとなされる言葉である。キューバ経済をサトウキビとの関連なしに取り扱う事ができない様に、ユカタン経済について書くとなるとエネケンとの関連を扱わずに話を展開させていく事は到底考えられない。歴史の展望から見るとユカ

タンのエネケン・ブームの時期はそれほど長期間ではなく40年間未満であり（19世紀最後の20年と20世紀最初の20年間）、その後は停滞の時期を向かえエネケンは浮き沈みを経て今世紀まで生き長らえてきた。今日までのエネケン時代の痕跡に対してはユカタン経済を考える上でも一定の評価を与えることが出来るはずである。

州経済のエネケン産業の経緯に関しては20世紀のユカタン経済の段階を考えるにあたって避けることの出来ない項目である。ここではその歴史に関して簡潔に扱おうと思う。なぜなら他の方法をもってしては現代のユカタンの産業や企業のエネケン以外の生産活動に関する本質的特徴を理解することが出来ないからである。

エネケン・ブーム：1880－1918

1870年代の国際市場におけるエネケン繊維需要は米国の農業の機械化によって前例のないくらい増加した。米国の企業家であるシーラス・マコーミック（Cyrus McCormick）は針金によって収穫物を自動的に束ねる機能を持つ穀物の収穫機を開発していた。しかし針金から生ずる鉄粉が入った収穫物を与えたことによって家畜の健康被害が発生し、この針金に代わる物としてバインダー・トワイン（binder twine）と呼ばれ、家畜に無害で虫害にも強いエネケン紐が採用された。

ユカタンはそれ以前から小規模でエネケン繊維を輸出していたが、アシエンダ内に置ける主要な生産活動はトウモロコシ農業や家畜が大半を占めていた。興味深いデータによるとエネケン・ブーム以前のユカタン州の自給自足率は高く、塩漬け肉や牛皮も輸出していた。19世紀後半からトウモロコシや家畜を栽培していていた大農園はエネケン栽培にゆっくりと転換を始め、州内の食料自給率の低下が起こる。トウモロコシに関しては二度と自給率が回復することはなかった。

エネケンの国際需要はエネケン繊維抽出の機械化を促進した。一時間に1000枚の葉の繊維を抽出できる“ルエダ・ソリス”（rueda Solís）、1882年に開発され一時間に2000枚分を抽出できる“ルエダ・ヴェンセドラ”（rueda Vencedora）といった抽出機がユカタン技術者によって発明された。それらが抽出の機械化に対して貢献をもたらした。蒸気機関の導入は繊維生産を大規模に行う上で必要な動力獲得に寄与した。1861年に銀行家兼アシエンダ農園主であったエウセビオ・エスカランテ（Eusebio Escalante）によって最初の導入がなされ、1892年にはユカタン半島内に1300の蒸気機関が存在していた。

ユカタン州においては元々、エネケン産業の膨張を財政的に支える十分な資本がなかったが、それはユカタン州がエネケン繊維輸出において米国のエンクレーブ（飛び地）経済として変貌するためにはそれほど大きな問題とはならなかった[1]。ニューヨークの銀行家であるシボー兄弟（los hermanos Thebaud）が農園主やユカタンの企業家が必要としていた資本の供給を始めた。こうして安定した市場、生産向上に適応した技術や流動的な資本がユカタン州の少なくとも 30 年間の間にメキシコ国内で最も豊かな州に変貌させた本当のエネケン・ブームを支えたのである。1880 年に 11 万 3000 パカを生産し、77 万 8000 ペソの価値であったエネケンは 1916 年に 119 万 1000 パカの史上最高の生産量を記録し 2 年後の 1918 年には 9100 万ペソと史上最大の利益を記録した[2]。

ディアス政権（Porfiriato）の終了期にユカタン州ではおよそ 1000 のエネケン大農園、約 850 のエネケン繊維抽出業者や輸出船積み業者が存在した。またエネケンの総栽培面積はおよそ 30 万ヘクタールであった。労働力に関してはマヤ先住民の債務労働者（peones mayas acasillados）が農園主に対して返済不可能な負債を抱え永続的に半奴隷の状態で働いていた。エネケン・ブームは 300 から 400 の家族で構成された農業産業ブルジョアジーの動向で支配され、その中でも 20 から 30 の家族が生産量の半分を管理し、2 つしか存在しない輸出商会のオーナー、あるいは役員を担当していた。これらの 20～30 の家族は“神聖な血統”(Casta Divina)という名称で呼ばれていた。

エネケン・ブームの経済は 2 つの側面に要約できる。1 つはディアス政権の政治家達が他の農業作物や工業の投資に対して高い税金を突きつけて、エネケン栽培に集中させようとし、また資本の一本化やエネケン農業産業の過度な拡大を誘導させた事である。ディアス政権の最も著名な政治家の一人であるオレガリオ・モリナ（Olegario Molina）もエネケン大農園を最も所有しており、主要な輸出商会のオーナーでもあった。エネケン・ブルジョアジー達は経済的実権を持っていただけではなく、政治的実権も兼ね備えており、それがエネケンの一次産品の生産促進に利用された。

もう一つの側面として、はっきりとした確証はないがエネケン・ブームを超えて持続したエネケン・ブルジョアジーの贅沢な消費活動が経済に影響を与えたと考えられる。前述のとおり、ユカタンにはブームの以前、それほど富裕層は存在しなかった。1878 年に連邦政府が出した報告書は、ユカタンでは 3 人の個人が 20 万ペソを所有するのみでこの地域に

は大きな資産を持ったものはいなかったと述べている。もしアシエンダでの生産コストが15万ペソのみで計算されるとすれば、ほんの20年の間に20万ペソ以上の資産を所有する家族は約400存在した（彼らの多くはニューヨークの金融資本に債務を抱えていた)。新たに裕福になった者は自らを誇張するように、ユカタンのエネケン・ブルジョアジーはメリダ市において贅沢な消費活動を尽くし（現在でもメリダ市内のモンテホ通りやコロン通りにある銀行や会社事務所として使われている豪華な建築物は彼らが建てたものである。)、度々旅行を行い、ヨーロッパに滞在し海外から輸入された高価な品々を惜しげもなく購入した。古いアングロサクソン系ブルジョアジーが彼らと異なる点は、質素さと貯蓄癖でありエネケン農園主達は豪華で幸運な人生を謳歌した。その名残は現在に至るまで感じ取ることができる。

エネケンによるモノカルチャーの活力と消費への異常な偏りによって産業多様化の可能性は閉ざれてしまった。当初は富によって過度に膨れ上がったエネケンプランター達ではあったものの、彼らの産業活動は他の産業欠如によってビール、清涼飲料、タバコ、パンといった主に現在に至るまで存在する消費に直結した生産活動のみに限定された。一度、エネケン輸出ブームは終焉しメキシコ革命以降の政治家によって奨励されたエネケンの他産業の一つである繊維・ロープ加工業を派生させたが、生産余剰と資本の過剰な集中が産業の多様化を頓挫させた。産業と企業の経済の統括を図ったエネケン産業の継承はうらやむべき結果にはならなかった。

産業のゆっくりとした凋落　1918－1935

エネケン・ブームの真只中であった1900年にエネケンの国際市場の立場を変化させる出来事が起こる。米国ではマコーミック社やデーリング社（Deering）グレスナー・アンド・ジョーンズ社（Glessner y Jones）あらゆる繊維業者が世界繊維市場において大きな競争を行っており、この競合がユカタンの生産者にとって好都合な結果となる。その年、他の米国の企業家であるジョン・P・モーガン（John P. Morgan）が前述の繊維業者を融合させ後にユカタンのエネケン繊維の買占めを行うインターナショナル・ハーベスター・カンパニー（International Harvester Co.）という巨大な合弁会社を作り上げる事に成功した。その後インターナショナル・ハーベスター社はエネケンの繊維価格を9.48米ドルから8ドルまで下落させ、また1911年には後に上昇はするものの、3ドルまで

下落させた。対照的に、ユカタンのエネケン農園主達はインターナショナル・ハーベスター社のエネケン市場のコントロールによって経済的な成功を得ることは出来なかった。逆にオレガリオ・モリナはインターナショナル・ハーベスター社と安い価格で繊維を供給する為に手を組んだ。

またユカタンはエネケン繊維の唯一の生産者であり販売者であった。だが 1920 年代にはケニア、タンザニア、スマトラ、ジャワが繊維市場に参入し、後にはキューバ、ハイチ、バハマ、エル・サルバドル、ブラジルも参入した。1918 年の時点ではまだユカタン産が世界生産の 85% のシェアを持っていたがこの状況はすぐに変わる。より影響を与えた出来事として他の市場において苗を植えてから 4 年後に繊維を抽出できる合成種が開発された。この事が大多数の麻を屈服させ、より丈夫で伸縮性の高い繊維が供給され始めた。ユカタンの場合は現在に至るまで同じように、エネケン苗を植えて刈り取りが可能になるまで 6、7 年はかかる。価格の縮小や外国市場との競争がエネケン・ブームを終焉させるのである。ユカタンのエネケンは最高生産高を記録した 1916 年、最高利益を記録した 1918 年の基準をその後決して上回る事はなかった。

エネケン・ブーム終了期に貢献した他分野といえば、農園主の反発を打倒し、革命家の使命を遂行し農園内の農奴や使用人制度を終焉させたサルバドル・アルバラド（Salvador Alvarado）に代表されるメキシコ革命の到着がもちろん挙げられる。しかしながら、革命は政治ほど経済に大きな影響を及ぼさなかった。経済の中心においては革命の主な効果は農園主によって労働力の対価が低く設定されていた労働権の開放に限定された。一方で農地分配は何も栽培していない土地に限定された。フェリペ・カリジョ・プエルト（Felipe Carrillo Puerto）州政権（1921－1924）の間は対照的に、農園主たちはエネケン農地と繊維抽出業者の所有をかたくなに維持した。アルバラドは 1912 年に創設されたエネケン市場管理委員会（La Comisión Reguladora del Mercado del Henequén）を利用しながらエネケン繊維の国際価格の改善に努め、これにより数年は価格上昇の効果が見られた。同様に、農民の生活状況の改善も州内市場の発展に寄与した。

一方、政治的影響はより大きなものであった。メキシコ革命はディアス政権の政治家（Porfirista）や社会の流動性の増大で政治的領域や他の階級に起因する公共分野の管理ポストにつく事を許されていたエネケンオリガルキーの政治的権利を取り払った。これは同様に、農園主の間で深い不信感を持たせることになった。経済の長い視点の結果としてエネ

ケン農地の未管理やエネケン繊維品質の粗悪化はエネケン大農園の衰退や農業改革実施の噂の下で度を越えたエネケン苗の植え付けを引き起こした。その後、改革は20年ほど遅れてやってきた。だが、さらに革命の時期はすでに引用した様に新たな市場やより競争力の高い生産者との一体化またエネケン繊維の低価格の持続に起因するユカタンの農業産業のゆっくりとした衰退が国際市場の立場を揺るがす。20世紀初頭のユカタンではエネケン繊維は世界需要のシェアを100%維持し1922年ではまだ75%を保っていた。1929年には53%迄落ち込み、1933年には39%に下落し、1938年時点では23%のみであった。1925年にはエネケン繊維価格は6.66ドルまで下がり1932年は最悪の年で1.9ドルまで落ち込んだ。すでに指し示したとおりまず、第一次世界大戦の終了とその後の米国の経済恐慌がユカタンのエネケン繊維輸出の崩壊を引き起こした。1916年には最大で20万2000トンを生産したが、1925年では13万7000トンまで減少し、カルデナス（Cárdenas）による農地改革が始まる1935年では8万1000トンのみ生産された。

エネケンとユカタン州：カルデナスからコルデメックスまで（1935－1964）

すでに見てきた通り、アルバラドやカリジョ・プエルトによってエネケンアシエンダの解体が続けられた。エネケン農園主達は栽培農地やエネケン抽出機械、一連の生産ラインを所有し続けユカタンの農地の独占者であり続けた。この状況が変わるのはカルデナスの農地改革が本格化する1935年から1937年の間である。

大統領の権限の下でラサロ・カルデナス大統領（Lázaro Cárdenas）はエネケン大農園内の農地分配を始める。1935年5月から1937年8月の間に農業信用銀行（el Banco de Crédito Agrícola）が3万ヘクタールのエネケン農地と45万1000ヘクタールの未開墾の土地を分配した。古い農園主たちの反抗はカルデナス大統領の弱体化を意図としていた。カルデナスは農地分配を視察するためにユカタンを歴訪することにし、1937年8月カルデナスはユカタンに3週間以上滞在した。8月8日には土地が収用され80%の農民に土地が分配され、その内の74%は開発可能な農地でうち97%はまだ未開墾であった。エネケン農園主達は一人当たり150ヘクタールの農地を保障され、憲法の制限によって小さな土地所有者となった。

1938年4月から10月にかけてユカタン州知事であったウンベルト・

カント・エチェベリア（Humberto Canto Echeverría）は繊維抽出機の占有と収用を法令として定めるが、4年後の1942年には法令で収用されたはずの抽出機がまた農園主の下の管理下に戻され、エネケン集団農地において繊維抽出権を独占した。古い農園主たちは現在において小土地所有者となっており、農業産業分野において事業に失敗し二度と以前の様に産業を支配することはなかった。栽培のコントロール、エネケンの工業化や商業化は次々と州政府機関傘下になり、1992年までエネケン集団農地の清算が続けられた。

また1938年にはカント・エチェベリア州知事は同様にカルデナス大統領に5万のエネケン栽培従事者が一つの様式で利益を出し商業化を行える様な巨大な集団農地制度の立ち上げを提案した。そして集団農地制度（el Gran Ejido）として知られている農地が出現し、その管理はユカタン州時事が代表者を務める“ユカタンのエネケン従事者”（Henequeneros de Yucatán）と命名された団体に託された。“エネケン従事者”の団体は州知事によって全てにおいて汚職の一様式となり、大量のエネケン繊維の販売は集団農地から手数料を巻き上げることで利益を出し、農園で働くものは常に雇われの身となり、団体と共生していた集団農地の調査者達はほとんど仕事を行わずに給与を取り1200人の官僚たちは自らの地位を利用して金儲けをすることを探り、無数の機能を失った集団農地の土地は違法に金品で取引された。

“ユカタンのエネケン従事者”は1955年に清算され、海外商業銀行（el Banco de Comercio Exterior）はエヒド信用銀行がそれまで行っていた地方社会の組織化やエヒドへの融資などといったエネケンの売買交渉や取引を受け継いだ。“エネケン従事者”団体は単に汚職の慣習を残す企業体としての歴史を終えただけでなく、その団体の重要性から内部で企業家階層の構築が行われ州政府の汚職保護を継続させた。この新しい階層は古いエネケン農園主たちとは異なっており、中産階級や新しい社会団体を長きに渡って保護し、レバノンの移民者といったユカタン経済エリート達を統括した。連邦政府においては、革命によって刷新され新しくなった州はディアス政権のエリート達を打倒するだけではなく新しい経済のエリートを誕生させる事も行われた。

ユカタン経済の大きな重要性をもった他の企業家グループは紐製造業者であった。紐製造業者は19世紀から存在し、国際価格の縮小し、価格が上昇すると閉鎖した繊維の国際市場価格に左右される立場であった。1883年には数年間、支援が施された紐業者の“ミラフローレス”

（Miraflores）が閉鎖され、1897年には国際市場価格はオレガリオ・モリナが古い繊維産業の工業化を再開し大量の資本を投下し産業の現代化がなされると大きく下落した。一方で紙を抽出し、エネケンから酒をつくる試みも実行されたが、決してそれらの製品は開発の利益となることはなかった。1年後企業家はキューバ戦争（1898年）によって繊維の国際価格が上昇し再び工業化の可能性が半減したことによって彼らの商機は絶たれた。その企業家育成は1908年に再開された。20世紀初頭に紐業者の“サンファン”（San Juan）はメキシコにおいて初の小麦自動結束機を製造した業者となった。

1920年から1930年代におけるエネケン繊維輸出はゆっくりと衰退するが、州内の紐業者の繊維消費は増加していた。1925年ではユカタン内の紐業者の繊維消費はエネケン繊維総生産量の1％に過ぎなかったが1930年には10％、1940年には25％、1944年に33％まで上昇した（1950年では50％に増加し、コルデメックス（Cordemex）が創設される直前の1959年では80％まで増えた。）ユカタンの紐業者は労働力の集中と簡素な技術によって米国業者と競争することができた。よってユカタン州は縄や紐や他のエネケン繊維商品を輸出することができた。第二次世界大戦が起こるとヨーロッパの紐業者は破壊され、ユカタンの繊維商品の需要が急速に高まった。1944年では90の紐業者が自社の製品を海外へ輸出し、1948年には海外へ輸出する紐業者は110まで増加した。

戦争による需要の逼迫がユカタンの紐業者に異なる品質や重さや長さといった条件をあまり考慮せずに売買契約を結ぶことを可能にさせた。しかしこの事はユカタン繊維の信用失墜を招き、需要が落ち着くと海外向けの生産量は落ち込み、価格も下落した。海外向け繊維品質の回復を短期間で行うために1949年州政府は“エネケン機械生産委員会”（Productores de Artefactos de Henequén）を立ち上げるが、朝鮮戦争によって需要が高まったことにより以前の悪癖に逆戻りしてしまう。1953年に生産者委員会は2つの大手紐業者を一体化し“メキシコ繊維業者連合”（Cordeleros de México, S. De R.L.）と新たに命名された団体に変わる。だが、以前の品質に関する悪癖は消えることはなかった。

同様にエネケン農園主たちは紐業者がたくさんの繊維抽出業者の所有を行った様に、自分たちに多大な財産を今まで築かせたエネケン生産の工業的過程（繊維抽出、運搬）全てのコントロールを掌握するようになる。ユカタンのエネケン産業の影で利益を享受した紐業者はユカタン州の助力により新しい企業家階層、あるいは特権階級となった。彼らはエ

ネケン農園主とは異なる家系か（農園主の家系の中でも紐業者として生き残った者は存在するが）、以前中産階級やレバノン移民者の苗字を持つ者達であった。

60 年代の初め時点ではエネケン産業の将来の見通しは決して明るいものではなかった。当時他国の市場ではより低価格で高品質の繊維が生産されまた化学繊維の出現によって自然繊維は消滅する危機にあった。一方で個人的資産の多さとは対照的に紐業者達は商業資金の融資を受け、また英国の繊維機械や他の物品調達によってエヒド信用銀行に多大な債務を抱えていた。エヒド信用銀行は紐業者に対して 4000 万ペソの債権を持っていた。

そのような状況下で紐業者は後にコルデメックス創設によって実現する自らの紐製品をユカタン州に売りつける方策を考えた。このあらたな売買体制は土地収用の事例として引用すべきアルバラド、カリジョ・プエルト、カルデナス、カント・エチェベリア時代の最初のエネケン産業段階の賜物によってではなく、紐産業企業家の積極的な活動によって可能となった。エネケン大農園解体で終焉したユカタン州の革命は負債を抱えた企業家達や不明確なエネケン産業の救済も行う。紐業者は合計5000 人近くを雇用し、4 万以上の集団農地で生産される 90%のエネケンを取り扱っていた事からも推測できるようにその救済は社会的義務という理由付けによって実施された。

1961 年にユカタン州の公的資本 2 億 5000 万ペソが投資されたコルデメックス株式会社が設立される。この 2 億 5000 万ペソは二分割され、一方の 1 億 2500 万ペソは紐業者に割り当てられ、もう一方は連邦政府が管理した。1964 年には企業家達は自らの参加株式を 2 億ペソで連邦政府に売却し、追加として彼らは 2000 万ペソの免税と 3 年間で 9850 万ペソの蓄積資本の利用権を手にした。これらにより紐業者達は 3000 万ペソ弱を獲得し当時ユカタン州経済を支える資本としては相応な額であったものの、彼らは他分野に投資する術を心得ていなかった。

エネケンの衰退、経済の多様化

紐業者のブームは半世紀前の 20 世紀初頭にあったエネケン・ブームの様なものであり、ユカタン経済の為の他分野の堅実な生産発展の為にディアス側近の政治家たちは今後より強く発展し経済的にも見込みがあると認識していたエネケン農業産業の再投資の可能性を探り出し、革命後の政治家たちは明確な意識を持ち、エネケンの主要な顧客ならびに消費

者である紐産業をより奨励した。新しい企業家階層はエネケン産業従事者や紐業者から派生し、州経済をより牽引させる者達であった。すでに述べたように 19 世紀の終わりからユカタンの工業においてエネケン産業の生産の一部分と関連はもっていたと判断できるものの、直接消費と関わりのある生産業がすでに存在していた。第二次世界大戦後、州東部において家畜業が発展しだしたが、やはりまだ一般的な経済活動は主に紐業者の工業活動によるエネケン業部門に限定されていた。この状況が変わるのは 1964 年以降である。

紐業者が受け取った保証金は産業の多様化を始めるための資金として割り当てられた。財務支援と企業の相談役の助言によってユカタンの紐業者は履物製造業やセメント、製鉄産業といったあらたな局面に突入していく。“メリダ市起業推進センター”（el Centro Empresarial de Mérida）は以下の言葉によって変化の重要性を表した。

「紐産業界においては生産物販売によって受け取った金を何に資本投資してよいか見つけることができていなかった。アルトゥロ・ポンセ・G・カントン（Arturo Ponce G. Cantón）、アウグスト・イトゥラルデ（Augusto Iturralde）やアレハンドロ・ゴモリ・アギラル（Alejandro Gómory Aguilar）らはユカタンの投資家の可能性をホセ・P・サルダニャ（José P. Saldaña）に示唆した。そして “モンテレ市企業支援センター”（Centro Patronal de Monterrey）の所長は 1964 年にユカタンの企業家で視察団体を組織させ、モンテレ市に招いた。」

「モンテレ市の滞在ではまだ一般的ではなかったものの、ユカタン企業家達に視察の為に全ての工場を開放させ、企業家達はビール工場、セメント工場、ガラス工場、靴工場、梱包工場などを見学した。それによって製鉄工場の発想が生まれた。その経験の後、メリダ市においてマヌエル・カセレス（Manuel Cáceres）のように投資の発想を強化し、スニーカー工場や、“セメント・マヤ”（Cementos Maya）が建設された。」

1964 年にコルデメックスが設立されると、エネケン産業の近代化や、生産者の生活は改善すると大きな期待が持たれていた。1967 年に経済団体がエネケン大農園の古い軽便列車を刷新し、一工場あたりの生産能力を 4 万 3200 トン維持するという繊維抽出部門の近代化を提唱した。1973 年当時、コルデメックスは 16 の紡績、紐工場をユカタン州に所有していただけでなく、またハリスコ州(Jalisco)、シナロア州(Sinaloa)、タマウ

リパス州(Tamaulipas)、サン・ルイスポトシ州(San Luis Potosí)にも工場を所有していた。1960年代の前半には公共支出の増強といった政策によってエネケン産業に対する助成金は前例のない位増大し、1976年時点でコルデメックスはそれまで最高の7473人の従業員を雇っていた。

しかしながら、エネケン生産の減少傾向はコルデメックス創設、相次ぐ機関の変更そして州政府、連邦政府によって計画された様々なプロジェクトが実施なされた時期においても引き続いた。1961年に合弁会社としてコルデメックスが設立された当時、エネケン製品の生産量は13万9650トンで1976年において生産量は9万8350トンに減少し、1985年は5万31トン、1990年では3万6156トンで1993年にコルデメックスは閉鎖に追い込まれエネケン集団農地の清算によって2万7007トンが生産された。ユカタンのエネケンは全盛期時代を過ぎると一種の足かせのようなものであった。生産量やエネケン栽培面積が減少しただけではなく、1ヘクタールの生産性も1961年に835キロあったものが、1976年に627キロ、1980年では561キロそして1993年には540キロまで減少した。“緑の金”(oro verde)の伝説は完全に消滅し、誰もそれを避ける事はできなかった。

これまでにもエネケン研究においてエネケン生産品の減少は化学繊維の普及やブラジルやタンザニアといった他地域の繊維生産上昇によって引き起こされたと言及なされているが、その理由は繊維量の減少のみで説明出来るものではなく、60年代初めから存在したエネケン産業の個人資本の焦げ付きも理由の一つとして挙げられる。しかしながら1997年時点では州内の紐業者は再び個人経営となり、州内生産だけではなく年間1万2000トンの繊維を輸入するほどの需要があり、州内のエネケン需要は現在においても消えることなく持続している。おそらく、生産減少の理由を説明する為にはエネケン産業に常に深々と介入してきた州政府の悪癖、汚職、不効率性、またユカタンのエネケン産業危機の過渡期(1920年～1940年)においてコルデメックス設立時よりも以前の集団農地時代において自らの将来に対して何の主張もしなかった雇われの身である怠惰な集団農地の農民性格も省みる必要性がある。

ユカタンのエネケン産業支援の手立てとなったエヒド信用銀行は1955年に連邦政府によって設立され、1962年には連邦政府の官僚主義から脱却する目的で“ユカタン農業銀行”(el Banco Agrario de Yucatán)も設立された。連邦政府がエネケン産業のコントロールを再び握った1974年にはユカタン農村信用銀行(el Banco Crédito Rural Peninsular,

(Banrural)) が作られた。4年後の1978年に連邦政府によって“エネケン地帯の統括的発展”(el Desarrollo Integral de la Zona Henequenera)が指定された。断続的に設立されたこれらの機関は執拗に続く官僚主義やエヒド農民の生活改善を考慮することなしに州政府(コルデメックス)が生産を独占できる温床となり各生産段階の成長を失わせた。あるエネケン産業研究者がこれらの機関の書類において解明できた点を以下のように述べている。

「バンルラル (Banrural) は常にエヒド農民から繊維を買い取り、コルデメックスに売るという仲介的役割を果していた訳ではなく、それ以上にコルデメックスと癒着していた。バンルラルは名目上、農業生産を安定化するために資金を準備、支給していた。この銀行は年毎に連邦政府から新しい計画の立案、開発を行うために資金援助を受け、その資金を基礎にして各集団農地への毎週の資金提供実施を行っていた。同様に、農業労働に対する賃金はコルデメックスが定めた (異なった品質によって) 繊維加工品に対する収益金で決まり一般的に低く設定されていた最低賃金、活用可能な資源、集団農民と機関の間の交渉などのあらゆる分野の機能によって形作られていた。」

「1983年にはバンルラルがエネケン産業に対して行った融資は合計で32億9170万ペソに達し、内訳として17億6680万ペソが産業振興費として使われ、残りの15億2490万ペソは助成金に当てられた。しかしエヒド農民たちはそれぞれの合計額の半分しか受け取っておらず、さらにその半分の額から農地管理費、社会保険 (IMSS) などの数々の支出が差し引かれた。」

同じく1983年にメキシコにおいて半官半民分野の民営化を基礎とし生産活動の規制緩和や商業の開放といった新自由主義 (neolibelarismo) の経済政策による新しい体制が採用された。10年以上前の政府の主な経済活動は国外債務によって調達した資金を公共支出へ莫大に投下する形式をとっていた。対外債務の危機は1982年8月に起こり、経済開放を実施せざるを得ない状況となり同年の12月にはミゲル・デ・ラ・マドリ (Miguel de la Madrid) 政権によって“経済再生の為の早急的プロジェクト” (Programa Inmediato de Reordenación Económica)が進められ、大きな変化が始まった。

主要産業であるエネケン産業、またユカタン経済全般にとって新自由

主義経済の採用は重大な結果をもたらした。新しい連邦政府の経済実用主義は州政府によって引き継がれ、州政府によるエネケン産業の管理不十分さや、先にもふれた集団農地農民に対する融資を含んだエネケン生産に対する助成金を是正した。1992年には3万以上の集団農地が清算され、1万2000人が定年によって土地を手放した。この事でユカタン州が近代化や他の政策によって50年以上に渡って実行してきたエネケン集団農地制度に対して自ら結論をつけた。一見するとエネケンはこれらの処置によって消滅、あるいは隅に追いやられたものとなり、連邦政府や州政府は工業、観光、漁業や他の農業生産活動といった他分野の経済活動による多様化を計画した。そういった経済の変化はすぐには行われなかったが、それから15年たった今日のユカタン経済は戦略変化の重要性を反映している。

1984年に州政府と連邦政府は共同で“エネケン地帯の再組織化とユカタンの全体的な発展を促すプロジェクト”（el Programa de Reordenación de la Zona Henequenera y Desarrollo Integral de Yucatán)を発表した。このプロジェクトではすでにユカタン経済の発展を促す機能をもっていなかった衰退したエネケン産業を広く再認識し、そしてユカタン全体、特に産業といった交互の発展を計画した。計画では農業産業の再組織化やユカタン経済活動全般を地域と国の発展、そして州内市場活性化といった地域と国家レベルの両方を適応させて共に活気付ける事が組み込まれた。そのプロジェクトでは次の具体案が示された。

1. マキラドラ工業、また工業分野全般のインフラ設備拡充によって投資家の資本投下を募り新たな成長を促すために工業発展を推進する
2. エネケン地帯、ならびにそれ以外の農業産業活動の多様化を行う
3. 漁業活動に対する密の濃いキャンペーン活動
4. マヤ地域ならびにその他の地域の観光業を通した発展
5. 通信、輸送部門の発展
6. 商業と食料品分野の強化
7. 教育の推進
8. 健康と社会安全の強化
9. 都市と住居を発展させる新たな対策
10. 汚染のコントロールと予防
11. 労働と社会保障

エネケンと関連するものとしてプロジェクトは需要と適用させるためにエネケン産業の活動規模を熟慮し、それにより日雇い労働者の給与システムにとって代わって融資額に相応する額を給与とする事、エネケン生産やコルデメックスの根本的な再構築によってエヒドの基本的組織を強化する事、工業機械の再構成、法律を遵守した労働形態、生産性を高めるために労働状況の変革が計画された。

プロジェクトは机上論だけでは終わらなかった。州政府は主にマキラドラ工場の誘致を軸にして外国資本を呼び込むキャンペーン活動を展開した。1年目はそれほど大きな効果はなかったが、最終的には成功と判断できる状態までになった。1984年に知事としてプロジェクトを創案し、1995年にも再選したビクトル・セルヴェラ・パチェコ州知事（Víctor Cervera Pacheco）はマキラドラの奨励、またマキラドラをエネケン地帯や他の州内地域の自治体へ招致する戦略を立てた。農村では温室野菜栽培や、他の果物の栽培を通じて農業産業の多様化に対して賛同した。ただ飛行機のケータリングサービス用の野菜、竹、キジや鹿を飼育していた従来の小さな他の農民はそれほど大きな成功を収めることはなかった。

1990年にはユカタン州において新自由主義経済体制が強化なされ、同時にコルデメックスの一体化が弱められ、エネケン市場の自由化や集団農地の私有地化が行われ始めた。当初の数ヶ月で州による独占をやめ生産者が望めば州内外を問わず繊維を誰にでも自由に売る事が出来るようにするなどエネケン産業の自由化を含んだ産業の新しい組織化が実行された。同年の3月には14の半官半民の繊維抽出業者で働く1750人の清算された労働者が脱一体化を始めた。1年後の1991年4月9日にはコルデメックスが正式に労働者に対して工場を閉鎖することを発表し2730人の従業員が清算された。この事によって“イロス・アグリコラス”(Hilos agrícolas)、“フィエルトロス”(Fieltros)、“サコス・イ・テラス”(Sacos y Telas)、“タペテス”(Tapetes)の4つの団体が作り上げられた。連邦政府は全ての者が新しい企業製品の買い手となる事を要望した。

最後に1992年5月に3万225の集団農地と50歳を超える1万2200人の農民の定年を補償する州政府の法令を下にエヒドの私有化が具体化された。定年者は年金として1ヶ月ごとに10万ペソ（1991年にデノミネーションが行われる以前の通貨換算で）を受け取り、（月最低賃金の30%は33万3000ペソ～60万ペソほどであった。）これらの補償額は集

団農地農民一人当たり800万ペソ（24ヶ月分の最低賃金）であった。これによってエネケン市場の自由化とコルデメックスの清算が加速し、ユカタン州政府は50年以上コントロールし続けてきたエネケン産業に対する介入を完全に終焉させた。

ユカタンのエネケンは消滅したわけではないが、ユカタン経済におけるエネケンの存在感は微々たる物である。今日まで約20の個人経営の繊維業者が機能し続けており、栽培される全てのエネケン繊維あるいは海外から輸入される1万2000トンの繊維を消費している。1994年12月にエネケン輸入価格が値上がりし、もう一度エネケンを農地で栽培する動きがでた。1997年ユカタン政府は繊維抽出業者に対する再融資や新しく苗を植える1万ヘクタールのエネケン農地に対して栽培補助融資を行う計画を発表した。しかしこれらの規模はエネケンの単一栽培が盛んに行われた時期の規模と比べると大変少なく、また前述のプロジェクトによって推進された野菜、柑橘、他の栽培品に対して行われた助成金と比較しても少量であった。エネケンの時代は終わりを迎えたのである。

参考文献

ASKINASY Siegfried, (1936): *El problema agrario en Yucatán.* México:Ediciones Botas, 1936.

ENRIQUE Aznar, Mendoza,(1947): "Historia de la industria henequenera desde 1919 hasta nuestros dias", *Enciclopedia yucatanense,* tomo 3, Mérida:Edición oficial del gobierno de Yucatán, 1947.

注.

1 米国資本はユカタン州のエネケン大農園やインフラの直接管理を行わず、現地の有力オリガルキーに対して資本投下を行い間接的に関わっていた事から、これは間接的支配であったと解釈するのが妥当である。

2 パカ（paca）はエネケン繊維を運搬する為、箱型に圧縮された繊維の塊で、年によって塊の重量は異なる。ちなみに1パカ当たりの重量は1880年では約161キロ、1916年では約169キロであった。

大垣貴志郎著『物語　メキシコの歴史－太陽の国の英傑たち』（中公新書，2008年，270pp.）

立岩　礼子

本書巻末の参考文献を見て，著者が初めてメキシコを訪れた1968年前後から，日本語で読めるメキシコ関連の書物がほぼ毎年のように刊行されていることにあらためて驚かされる。ここに挙げられてない本も合わせれば相当の数にのぼる。それだけメキシコは日本人が関心を寄せる国なのだ。これらの書物は，マヤあるいはアステカの謎に迫るもの，メキシコの政治経済情勢を中心に1980年代までをまとめたものに大別される。この度刊行された『物語　メキシコの歴史』は，マヤもアステカも扱い，メキシコを理解する上で重要な植民地時代と独立後の混乱期を丁寧に解説し，メキシコの近代化の終着点ともいえる2000年の大統領選挙で制度的革命党（PRI=Partido Revolucionario Institucional）の歴史的敗北までを網羅している点で，貴重な1冊である。

著者は「まえがき」で，「メキシコ人というものは己のなかに閉じこもって，身を守る存在のように思われる。閉鎖性は，我々の猜疑心と不信感への一つの手段である。その顔が仮面であり，微笑が仮面である」というオクタビオ・パスの言葉を引用し，その仮面を一枚ずつ剥がしながら，メキシコの歴史と社会について考えよう，と読者をメキシコという迷宮に誘う。まず第1章「文明の出合い」では，1992年に論議を呼んだ「発見か，遭遇か」という問題を踏まえて，メキシコの古代文明についてはマヤとアステカの特徴を解説している。第2章「搾取と布教の時代」ではスペインによるメキシコ支配のシステムを詳解している。第3章「独立記念日」では，独立運動がイダルゴ神父からモレロス神父へ，そして軍人イトゥルビデへと継投された経緯が説明され，第4章「憎き星条旗」では迫り来る隣国アメリカの脅威が描き出されている。第5章「先住民の勇ましさ」では，エンリケ・クラウセが「19世紀のラテンアメリカにおいてメキシコだけに出現した英傑」と称えたベニート・フアレスと法の精神について述べられ

ている。第6章「白昼夢を見た皇帝」では，フランス干渉によって激化したメキシコの保守派と自由主義者の攻防が，マキシミリアン皇帝夫妻の目を通して語られる。第7章「族長の功罪」と第8章「革命精神は死んだのか」では，独裁者ディアスや映画でも馴染みの深い英雄ビージャらの人柄を描き出しながら，メキシコ革命の紆余曲折を整理して説明している。そして最終章では「現代メキシコ」では，メキシコの経済発展を軸に制度的革命党の誕生から敗北までが解説してある。本書は「メキシコ人は，ほんとうに太陽のように陽気で明るいのか？」「では，なぜそんな国で革命が起きたのか？」「革命が勝利したのに，なぜ貧しい人たちが多いのか？」といった読者の疑問に答えてくれるだけでなく，メキシコと日本との関係についても言及した日本人のためのメキシコ物語に仕上がっている。

現在，メキシコについて書かれた数ある文献の中で，国本伊代著『メキシコの歴史』（新評論，2002年）がメキシコ研究の入門書として定着している。石田英一郎著『マヤ文明－世界史に残る謎』（中公新書，1967年）とともに増田義郎著『古代アステカ帝国』（中公新書）は近年の研究の進展によって色褪せてしまったが，後者の続編である『メキシコ革命－近代化のたたかい－』（中公新書，1968年）は当時のアメリカ人研究者らによる成果を援用したメキシコ史の概説書として，今日でも重要な邦文献であろう。山崎眞次著『メキシコ－民族の誇りと闘い－』（新評論，2004年）は，増田氏が追った「近代化」を「ナショナリズム」と読み，一見，複雑に思われるメキシコの古代から現代までをメキシコ・ナショナリズムの進展の流れに乗せて一本の線でつなぎ，独自のメキシコ観を展開している。こうした本をすでに手にした読者にとっても，本書は新鮮に映るはずだ。それは，我々日本人がメキシコをメキシコ人と同じ視線で理解できるようにまとめてあるからだ。著者は，今日メキシコを代表する知識人で歴史家のエンリケ・クラウセの著作 *Siglo de los Caudillos, Biografía política de México (1810-1910)* を邦訳している（『メキシコの百年 1810-1910－権力者の列伝－』，現代企画室，2004年）。その「訳者あとがき」で，「予てより興味のあったメキシコ独立戦争時期をよく理解したいと考えていたので，これまで外国語，日本語でかかれたこのテーマに関

する研究書を補完する新刊書を待望していた。自分が執筆することも含めてこの希望を満たしたいと思っていたが，その葛藤は意外にも本書を再読した時に，当面は本書を翻訳する形で解決できると考えたのである」と綴っている。そして本書では，クラウセの歴史観を踏襲しながらも翻訳の呪縛から解かれ，著者自身の長年にわたる研究成果に照らし合わせて熟成された内容になっている。著者は1968年に初めてメキシコを訪ねてから，博士課程への留学，研究活動，出張のためと，これまでに20回を有に超える回数を渡墨している。この国の歴史の舞台である広大な大地の豊かさと不毛さの両方を自身の目で確かめてきたからこそ上梓の運びとなったのであろう。

それでも，著者は「あとがき」で「メキシコは私たちになかなか素顔を見せない」と記す。それほどメキシコを理解するのは困難なのである。しかし，著者は我々にこの国を解く鍵を示している。それが本書の副題に示されている「太陽の国の英傑たち」であり，クラウセの言葉を借りれば，「国の運命が決定される緊張状態を生き抜いてきた人物」caudillo である。長くなるが，著者訳のクラウセの言葉を引用する。「スペイン型の歴史秩序の崩壊は，ラテンアメリカ全域にカウディーヨの出現を招いた。我々にとってそのカウディーヨという言葉の意味は否定的意味合いだけを含むものではない。カウディーヨとは強力な権力を保持している者，新しいタイプの『傭兵隊長』，生命と財産を支配する者，光輝く刀を振り回しイベリア半島を支配した典型的なアラブ人の血を受け継いだ者であり，『王国を興さんがために』戦った中世の騎士のような者で，それが19世紀のメキシコにやや違った形で再び出現したのだ。カウディーヨはカリスマ的人物にとどまらない。神託を携えて神の摂理に導かれている者もあれば，偶像崇拝の対象になる人物もおり，または神権政治を司る人物であった。つまり，神がかりな者であった。」本書が依拠しているクラウセの歴史観の根幹がこの「カウディーヨ」なのだが，著者は本書の中でこの用語を一度も使っていない。おそらく一般読者にはイメージしにくいこの用語を著者は意図的に避けたのであろう。副題の「英傑」の二文字すら本文では使っていない。長年にわたり日墨交流に貢献してきたからこそ，あえて専門用語を使わずに日本の一般読者にメキシコを深く

知ってもらうという配慮が感じられる。メキシコを真に理解している著者だからこそ可能な試みであったと言えるだろう。

REHK 投稿規定

(2004 年 11 月 11 日一部改定)

1. 本誌への投稿は京都イスパニア学研究会の会員に限る。ただし，本会が依頼した寄稿・講演の原稿等はこの限りではない。

2. 本会が依頼した場合を除き，執筆者は所定の印刷費を支払うものとする。印刷費の額については，その都度連絡する。

3. 原稿の種別は論文・研究ノート・書評・翻訳・資料とする。

4. 原稿は 9 月末までに＜規定 12＞の宛先に送付すること（期限厳守)。

5. エッセイ・回顧録等は記念号を除き本誌には掲載せず，会報に記載する。

6. 原稿の採否は，編集委員会が審査し決定する。

7. 提出された原稿について，編集委員会は意見を述べて修正を要請することがある。

8. 編集委員会が要請した場合を除き，提出後の原稿の書き足しや差し替えは認めない。

9. **製本は，提出原稿を使用する。従って，提出原稿は，下記の要領で清書プリントされた完成原稿でなければならない。**

記

(1) 用紙
A4 版の用紙を用い，REHK 第 1 号～第 4 号に近い形で完成させる。製本の際には，A5 版に縮小されることを念頭に置くこと。(A5 版は A4 版を 70%縮小したもの)

(2) 余白
上下左右とも 25mm とする。

(3) 書き出し
第 1 行目：タイトル（太字，センタリング)
第 2 行目：空け
第 3 行目：氏名（右詰め)
第 4 行目：空け
第 5 行目：書き始め

(4) 註
文末註でも脚註でもよい。

(5) 原稿枚数
論文：和文で，34字×33行で15枚程度
欧文で，33行で18枚程度
研究ノート：和文で，34字×33行で10枚程度
欧文で，33行で12枚程度
書評：和文で，34字×33行で3枚程度
翻訳：和文で，34字×33行で10枚程度
資料：和文で，34字×33行で10枚程度
なお，枚数には，書き出し部分，本文，註，参考文献を含む。

(6) ページ番号
原稿の最下部に通し番号を付すること

(7) 文字のタイプとサイズ
和文の場合は，明朝体で12ポイント
欧文の場合は，Centuryで12ポイント

10. 前項の規定（1）～（7）に反する原稿は原則的に受理しない。

11. 原稿送付時には，以下のものを必ず揃えて提出すること
① 完成原稿をプリントアウトしたものを3部。
② 完成原稿の入っているフロッピーディスク（Windows の Microsoft Word に限る）を1枚。
③ 種別（<規定3>）を明示したもの。
④ 和文の場合は，スペイン語タイトルおよびローマ字表記の氏名を明記したもの。

12. 完成原稿の送付先およびREHKに関する問い合わせ先：

〒612 - 8577
京都市伏見区深草塚本町67
龍谷大学文学部　安藤真次郎研究室
Tel: 075 - 645 - 8521（研究室直通）
E-mail: shinjiro@let.ryukoku.ac.jp

以上

編集後記

REHK 第 15 号が刊行の運びとなりましたので、お届け致します。予定より大幅に遅れましたことをお詫び申し上げます。

京都イスパニア学研究会第 16 回大会（2007 年 12 月 9 日（日）、於京都キャンパスプラザ）では三浦知佐子氏（スペイン文学）、朽木利家氏（ラテンアメリカ文学）、二宗美紀氏（コーパス言語学）の 3 名に研究発表を行っていただきました。記念講演会には神田外語大学より戸門一衛先生をお迎えし、「スペイン政治経済最新情勢：新たなる地平」という演題のもとで、文字通り最新のスペイン情勢についてお話いただきました。今回は、2006 年度第 15 回大会での加藤薫先生のご講演内容と昨年度大会での戸門一衛先生のご講演内容とを同時に本誌に掲載させていただくことになりました。また、初代会長坂東省次先生のご紹介により、アルゼンチンから María Isabel Pozzo 氏（国立ロサリオ大学教育学部）よりご投稿をいただいております。合わせてご高覧ください。

さて、『REHK』は 1993 年の創刊号以来 15 年間刊行を継続して参りましたが、諸般の事情により本誌第 15 号をもって休刊とさせていただきますこと、誠に残念ながらお伝えしなければなりなせん。振り返ってみますと、この 15 年間で多数の原稿が寄せられました。本号まで掲載された原稿数を数えてみますと、講演録 16、論文 69、研究ノート 19、評論 2、資料紹介 6、翻訳 16、書評 26 となり、投稿者総数は 65 名に及びます。これまで玉稿をお寄せいただいた皆様、ならびに本誌を愛読していただいたすべての方々に改めまして心より御礼申し上げます。

なお、京都イスパニア学研究会は今後も研究発表や講演など、従来通りの活動を継続していくつもりですので、なお一層のご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

（岡本信照）

REHK (Revsita de Estudios Hispánicos de Kioto)
２００８年３月３１日　印刷
２００８年３月３１日　発行

発行所　京都外国語大学イスパニア語学科
〒６１５－８５５８　京都市右京区西院笠目町６

発行責任者　岡本信照
印刷所　都印刷
〒６００－８３１８　京都市下京区北小路新町西入る

R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

No. 15

Conferencias:

Una prueba de descifrar la historia de chicano
por las representaciones visuales de arte chicano
..... Kaoru Kato (1)

Política y economía de la España de hoy :
retos actuales y nuevos horizontes
..... Kazuei Tokado (51)

Artículos:

La enseñanza de español a japoneses: puentes culturales en Argentina
..... María Isabel Pozzo (59)

Tratados de educación de príncipes en la Castilla del siglo XV
—Una obra pedagógica de Mosén Diego de Valera—
..... Sayaka Kato (67)

Nota:

Propuesta didáctica para actividades léxicas: uso del corpus lingüístico
..... Miki Nishu (93)

Traducción:

CANTO Sánez, Rodolfo, *-Del henequén a las maquiladoras. La política industrial en Yucatán 1984-2001-*.
..... Tatsuya Yoshino (107)

Reseña:

Kishiro Ohgaki, *Breve Historia de México* (Tokio, 2008)
..... Reiko Tateiwa (123)

2007
Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto